島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査

1995年３月

匹見町教育委員会

島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査

1995年３月

匹見町教育委員会

序

本書は，当町の萩原に発見された縄文時代早期の上ノ原遺跡の報告書であります。

本報告書のとおり，本遺跡は縄文時代早期（今から約8000年前）といわれ古さからみれば一驚するばかりであります。勿論古さからみれば，当町には先土器（旧石器）時代に溯ることのできる新槇原遺跡が存在しますが，本遺跡では多出土した遺物に加え，原始人の生活痕跡が確認されていることによって，本遺跡の重要性がより高められたということは確かであります。しかも本町では，多くの原始古代遺跡があるとはいえ，縄文時代早期の代表的基準となる押型紋土器は皆無でありましたから，該当期における原始研究に今回の発見で弾みが付けられたことは間違いないと考えております。

こうした地道な調査をつづけていくことにより，当町の黎明期が明かになっていくものと思われ，そのことが強いていえば，私達現代人の蓄積の幅の広さとなっていき，今後の生きるための糧となって還元されていくはずであります。このような考えに立ち，今後とも文化財保護あるいは保存に務め，将来に向って継承していかなければならない，と肝に命じている昨今であります。

末尾になりましたが，本遺跡の調査及び報告書作成までお世話になりました山口大学人文学部の中村友博教授，また本学生の黒崎　充氏に対し，記して感謝の意を表したいと存じます。また発掘作業に従事して下さいました作業員の皆さんにもお礼を申し上げ，序の挨拶といたします。

平成７年３月

匹見町教育委員会

教育長　斉藤惟人

例　　言

1　本書は文化財保護法の公開原則に則り，埋蔵文化財の包蔵地の調査成果を公刊するものである。

2　遺跡は島根県美濃郡匹見町匹見イ－617番地にある上ノ原遺跡である。

3　発掘調査は，匹見町教育委員会が実施した。

4　発掘は，山口大学人文学部助教授中村友博が担当した。

5　発掘の企画調整は，匹見町文化財調査員渡辺友千代が担当した。

6　発掘は，1993年７月13日から同23日まで実施した小規模なものである。

7　発掘作業は，匹見町の町民の協力を得た。

8　遺物の整理と報告書の作成は，山口大学中村研究室で実施した。

9　本書の編集は，中村友博が担当した。

10　発掘と遺物の整理ならびに報告書の刊行にかかる費用は匹見町が支出した。

11　文責は，括弧内に明記した。

12　発掘は黒崎充（山口大学人文学部２年生），屋内作業は黒崎充と中村利至久（山口大学人文科学研究科１年生）が補佐した。

13　遺物の実測は，山口大学の学生の協力を得た。

14　石器石材に関しては，山口大学理学部永尾隆志助教授の助言を得た部分がある。

15　製図は，黒崎充，中村利至久，中村友博が担当した。

16　遺物ならびに実測図面は匹見町教育委員会が保管，公開する。

島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査

目　　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査体制 …… 3
　３．発掘日誌抄 …… 3
第２章　位 置 と 環 境 …… 5
　１．濃密な遺跡群 …… 5
　２．上ノ原遺跡の立地 …… 9
第３章　層 位 と 遺 構 …… 11
　１．調査の方法 …… 11
　２．東西トレンチ …… 13
　３．南北トレンチ …… 15
　４．遺　　構 …… 15
第４章　出　土　遺　物 …… 21
　１．はじめに …… 21
　２．第２黄色土から出土した遺物 …… 21
　３．第２黒色土から出土した遺物 …… 25
　　ａ　遺構に伴った遺物 …… 25
　　ｂ　包含層の遺物 …… 26
　　ｃ　包含層の石器型式 …… 29
　　ｄ　包含層の剥片 …… 31
　４．第１黄色土から出土した遺物 …… 35
　５．第１黒色土から出土した遺物 …… 37
　６．表 採 品 …… 41
　７．層位との比較 …… 42
第５章　ま　　と　　め …… 43
　１．土器について …… 43
　２．石器について …… 45
　３．遺構について …… 47
付　篇　遺物取り上げ明細 …… 49

図　版　目　次

図版一　遺跡　　環　境

1.上ノ原遺跡の遠景

2.上ノ原遺跡の近景

図版二　遺跡　　近　景

1.発掘調査前の状況

2.発掘中の上ノ原遺跡

図版三　遺跡　　調査区

1.終了直前の遺跡

2.東西トレンチ

3.南北トレンチ

図版四　遺跡　　第１黒色土

1.第１黒色土の基底面（南北調査区を北から撮る）

2.第１黒色土の基底で出土した土坑

図版五　遺跡　　第２黒色土

1.東西トレンチ(西から)

2.東西トレンチ(東から)

3.南北トレンチ(北から)

4.南北トレンチ(南から)

図版六　遺跡　　第２黒色土の土坑

1.Ｐ９区の土坑３

2.Ｏ９区の土坑７～10

3.R14区の西半

4.Ｒ９区の土坑１，２

図版七　遺物　　出土状況

1.第２黒色土中の遺物の散布

2.Ｒ14区の遺物の散布

3.東西トレンチおける遺物の散布（西から）

図版八　遺物　　出土状況

1.第２黒色土の石鏃（R10区）

2.第２黒色土の打製石斧（Ｒ９区）

3.第１黄色土の楔形石器（R10区）

4.第１黄色土の土器（R11区）

5.第１黄色土の土器（R10区）

6.第１黄色土の土器（R13区）

図版九　遺物　　土器と石器

1.発掘以前の表採遺物

2.土坑出土の遺物（1/1）

図版十　遺物　　土器と石器細部

1.第２黄色土から出土した土器（1/2）

2.第１黒色土から出土した土器（1/2）

3.削器の凸刃（R10区；×1.5）

4.楔形石器の縁部（R10区；×1.5）

図版十一　遺物　　土器と剝片

1.第１黄色土から出土した土器（1/2）

2.第１黒色土から出土した土器（1/2）

3.水晶製の剝片（ｃ.1/1）

4.石の目による階段剝離（Ｒ８区）

図版十二　遺物　　石器の型式

1.石鏃・削器・石錐・掻器（表面;1/1）

2.石鏃・削器・石錐・掻器（裏面;1/1）

図版十三　遺物　　石器の型式

1.楔形石器･円形掻器･削器(表面;1/1)

2.楔形石器･円形掻器･削器(裏面;1/1)

図版十四　遺物　　石器の型式

1.打製石斧ほか（表面;1/2）

2.打製石斧ほか（裏面;1/2）

図版十五　遺物　　第２黒色土の剥片
1.第２黒色土O9区から出土した剥片（1/1）
2.4第２黒色土P9区から出土した剥片（1/1）
図版十六　遺物　　第２黒色土の剥片
1.第２黒色土Q9区から出土した剥片（1/1）
2.第２黒色土R8区から出土した剥片（1/1）
図版十七　遺物　　第２黒色土の剥片
1.第２黒色土R9区から出土した剥片（1/1）
2.第２黒色土R10,11区から出土した剥片（1/1）
図版十八　遺物　　上層の剥片
1.第１黄色土から出土した剥片（1/1）
2.第１黒色土から出土した剥片（1/1）

挿　図　目　次

第１図　匹見町の遺跡の分布；A匹見町の位置，B遺跡の分布（1/100,000），C濃密な半田地区
第２図　上ノ原遺跡の台地（1/1,250）
第３図　発掘調査区の位置（1/600）
第４図　検出した遺構；A.全図，B.土坑a
第５図　東西トレンチ（1/40）
第６図　南北トレンチの南半部分（1/40）
第７図　南北トレンチの北半部分（1/40）
第８図　遺物の分布図（1/60）；A.南北トレンチ，B.東西トレンチ
第９図　第２黄色土から出土した土器（1/2）
第10図　土坑から出土した遺物（1/2，2/3）
第11図　第２黒色土から出土した土器（1/2）
第12図　出土した石器の型式（2/3）
第13図　打製石斧ほか（1/2）
第14図　第２黒色土O9区から出土した剥片（2/3）
第15図　第２黒色土P9区（1～7）とR9区（8～26）から出土した剥片（2/3）
第16図　第２黒色土R8区から出土した剥片（2/3）
第17図　第２黒色土R9区から出土した剥片（2/3）
第18図　第２黒色土R10区から出土た剥片（2/3）
第19図　第２黒色土R11区（1～4），R12区（6・7），R13区（5）から出土した剥片（2/3）
第20図　第２黒色土R14区から出土した剥片（2/3）
第21図　第１黄色土から出土した土器（1/2）
第22図　第１黄色土から出土した剥片（2/3）
第23図　第１黒色土から出土した剥片（2/3）
第24図　第１黒色土から出土した土器（1/2）
第25図　層位分けした押型紋土器（2/3）

第１章　調査に至る経緯

１．調査に至る経緯

上ノ原遺跡は，島根県美濃郡匹見町匹見イ－617番地ほかにある。匹見町教育委員会は山口大学人文学部助教授の中村友博を発掘担当者として上ノ原遺跡の発掘調査を1993年７月13日から同23日まで実施した。本書はその成果を公刊するものである。1993年の発掘ならびに1994年の屋内整理作業と出版にかんする経費の一切は匹見町の支弁にかかる。

1993年６月２日，匹見町文化財調査員の渡辺友千代氏から遺跡発見の電話連絡が中村にあった。内容は，石器遺物の剝片と縄紋時代早期の押型紋土器とおもわれる破片を採集したこと，県道の付設工事が遺跡の隣で着工中であること，またこの地域は町が『交流の里』として宅地の開発を計画していることの説明があり，渡辺友千代調査員は発掘現場が掛け持ちとなり，とても対応できる状態にないので山口大学で発掘調査して欲しい旨の話を承る。しかし，研究室による調査は物件，人件ともに無理なのでただちにお断りするとともに，事情を島根県文化課ならびに同埋蔵文化財センターに通報して発掘依頼すべきとお応えした。その翌日３日，町教育委員会は単独で調査費用を補正予算に編成する方針と島根県との協議でも町事業で了解がついた旨，渡辺友千代氏から再度連絡をうけた。中村は夏休みなら１週間ぐらい発掘に出向いてよいこと，報告書の印刷費用を発掘調査費と同年度会計にしてほしくないことを伝え，また遺跡の現状と採集品のスナップ写真（図版九ノ１）を中村宛て送付して欲しい旨やりとりし，結果お引き受けすることとした。また，発掘調査の参加学生は１名にかぎってほしいとの渡辺調査員の要望があった。数日のちには，発掘担当承諾書を匹見町に送付した。

６月22，23日匹見町から招聘され，上ノ原遺跡の現地を視察した。現状は県営農道の付設工事中であった。路面は現地表面より３mほど掘削し法面となった切通しの断面に遺構とおぼしき落ち込みがみえる。表層は黄色の土をはさんで黒色土が２層あり，1985年12月に発掘調査した匹見町の新槇原遺跡の層順とおなじである。匹見町企画課にて『交流の里』実施計画の現況地形図と工事予定図をみる。発掘予定地の１点のトラヴァース・ポイントは発見したが，後視につかえるトラヴァース・ポイントはとばされていること，また，現状では県営農道の付設工事は路線半ばで中断しており。路線の北半の掘削ならびに区画造成工事は着工されていない。渡辺氏の採集地点は農道に面する１筆で，表土の黒色土がかなり削平され，廃土置き場に予定されていた。このためトラックの進入路面として砕石がまかれていた。

この折，町教育委員会幹部から，開発予定地はすでに町有地として移転登記が完了している

から遺跡がでた場合でも対応がしやすいとの言葉があった。これは，いままでの町の文化財行政の実績からじゅうぶん信頼できる発言なので，事後の保存処置にかんして間違いないとの個人的な印象をえた。すなわち匹見町では近年ぞくぞくと遺跡が発見されるが，設計仕様の変更で保存処置がとられている。その原因は，過疎地においては地価よりも埋蔵文化財の調査費のほうが割高になるという経済原則が決定的に作用しているからである。いっぽう町教育委員会はほとんど実績のなかった埋蔵文化財の対策を迅速に行政に組み込もうとした。専門性のたかい調査員はともかく，作業員の確保は町教育委員会が経験をつんでいる講演会や学習会の組織化が有効に機能したのである。学生参加１名の限定は当初奇妙な要請であると感じたが，そのご発掘調査をすすめる過程で意図がわかった。すなわち，町民をじかに埋蔵文化財と接触させて，郷土史の体験学習の好機とするねらいがあり，じじつ発掘の手を一時やすめて発見物にたいして解説することが調査担当者の仕事の一部ともなった。この政策は今回の発掘にもおおきく影響している。まず発掘調査そのものが，個人研究ではないので，匹見町の渡辺調査員の指示をうけた。とくに調査区の設定と遺物の取り上げにかんしては指導があった。発掘に参加した作業員は，戦争とそのごの激変を体験し，いま深刻な過疎問題をかかえる匹見町でともかくやってきた年長の方ばかりであった。発掘作業の指示は順守していただき，遺物の取り上げはきわめて慎重かつ丁寧であった。

発掘のあとは，遺物の水洗と注記を匹見町に依頼した。匹見町からは報告書の出版費をふくめて遺物の整理費用の見積もり依頼があった。遺物は1994年５月山口大学の中村のもとに届き，町費の利用手続きの説明があった。遺物の登録と実測には学生の協力をえた。ただし，参加学生名と員数ならびに個々の勤務時間を捕捉しても，内業実務の経験がない学生による仕事の能率はわるく，いたずらに人件費がかさむ。そこで，参加は適時とし，賃金請求するやり方とした。学生の実測図は石器の輪郭と稜線はそのまま製図できるが，剥離面の表現方法で個性があらわれ，全体として基準がさだまらない。土器片の図化にいたってはさらに個人色がつよくでる。こうしたことは，個人としてはおなじ誤差が反復されるだけだから問題ないけれども，実測担当が不特定多数の場合は不統一となる。したがって製図にかんしては，中村が実物と対照し，できるだけ統一をはかった。

匹見町からは報告書原稿の提出をのぞくほかは，研究の自由一切が保証された。しかしながら，中村は本務が多忙な年まわりであったので，時間のほとんどは一次資料化に費やされてしまった。資料は，匹見町保管の文化財として，収蔵，公開されるから，研究のためであれば何人も資格をとわずに利用できる。

2．調査体制

主　　体　　匹　見　町
事　務　局　　渡辺　隆（匹見町教育委員会）
調査指導員　　渡辺友千代（匹見町文化財調査員）
発掘担当者　　中村友博（山口大学人文学部助教授）
発掘補助員　　黒崎　充（山口大学人文学部２年生）
発掘作業員　　栗田　定，宮市民義，斉藤実夫，渡辺　照，渡辺　勉，長谷川時子，溝田久子，西田キヌエ，落田光子，村上知子

3．発掘日誌抄

７月12日（月曜日，晴）

午前中は草刈。午後，中村，黒崎が到着。周辺の測量杭探し。渡辺友千代氏と打合わせて調査区を決定し，縄張をする。休憩所，資材置き場を設営。調査区は２ｍ四方を１マスとしてローマ字と数字の組合せで番づけした。まず，Ｒ８区をコントロール・ピットとして荒掘。第２黒色土から遺物がでる。これを見た渡辺氏から忠告があり，遺物は１点ずつ取り上げよとの指示である。この原位置記録法は匹見町の発掘常態であり，そう言えば荒掘を指示したとき経験ある作業員の表情は困惑していたようす。３次元の記録を採ると期日までには調査区を完掘できないが，それでもよいのかと渡辺氏に尋ねると，それでもよいとの回答であった。以後，原位置記録法を採択する。

７月13日（火曜日，晴）

東西トレンチの東では第１黄色土が尖滅する。この部分の表層は黒色土と黄色土のブロックからなる。現地表から20㎝下げた。南北トレンチでは北の３区R12,13,14の第１黒色土を削除しおわる。荒掘した南端のＲ８区は第２黒色土の基底面まで検出した。なかの３マスＲ９,10,11は表土を剝いだところで本日終了。渡辺氏は前田中遺跡の調査にまわる。

７月14日（水曜日，曇のち雨）

R10,11の第１黒色土を削除。検出した柱穴らしいピットを作図。

７月15日（木曜日，曇）

中村は校務のため離脱。渡辺氏が現場指揮。ピットの埋土を掘り下げる。写真撮影。第１黄色土を掘下げ。

７月16日（金曜日，快晴）

R9～14区までの第１黄色土を全面削除。

７月17日（土曜日，雨）

発掘は休み。黒崎は図面を山口に持ち帰り中村に報告。

７月18日（日曜日）

発掘は休み。

７月19日（月曜日，晴）

中村が現場に復帰。R11区から14区までの検出

した第２黒色土は掘削せず，上面にめり込んでいる遺物だけ記録して取り上げる。Ｏ９，Ｐ９，Ｑ９区の第２黒色土の掘削にはいる。Ｒ９区の東と南に残していた断面土堤２箇所を取りはずす。

７月20日（火曜日，晴）

東西トレンチの包含層である第２黒色土をほぼ基底面の第２黄色土上面まで掘削。この面に，無数に落ち込みがある。東西トレンチに連結する南北トレンチＲ９区の第２黒色土を掘削する。つづいてその北の１マスR10区の第２黒色土の掘削にはいるが，北のR11区にかけて差渡し50㎝くらいの円形土坑がある。これを立ち割る格好で掘り下げる。調査区をとばして北端のR14区を掘り下げる。第２黄色土の上面が一部露呈。

７月21日（水曜日，晴）

東西トレンチと南北トレンチＲ９区の遺構検出。無数の小ピットと１ｍくらいの不整形の土坑がおおい。埋土は暗い茶色で，床が浅い。遺物はすくないが，鑑別できる土器は黄島式である。土坑のなかには埋土が黒色土のものがあるけれども，これは現地表から掘り込まれた撹乱土坑である。R10区とR14区も，遺構検出にはいる。

７月22日（木曜日，晴）

写真撮影のあと平面実測と断面図を作成にかかる。現地説明会を開催。駄目押しのため，Ｏ９区の基盤である第２黄色土の掘削に入り，途中で本日終了。どうもこの層も確実な遺物包含層のようで，発掘の終りになるとよくある話。

７月23日（金曜日，晴）

平面と断面の実測を継続。Ｏ９の１区を深掘し，段丘礫層の上面の海抜高を計測。基盤の第２黄色土はしたになると，明黄褐色の粘質できわめてしまりのかたい土に変化する。遺物はこのかたい土からはもう出土しなくなる。第２黄色土はかなり遺物を含む包含層である。坪掘では基底面がなく明黄褐色粘質土に漸移して変化する。われわれの仕事はここまでである。撤収。埋め戻しを依頼して遺跡から離脱。

（黒崎　充・中村友博）

第2章　位置と環境

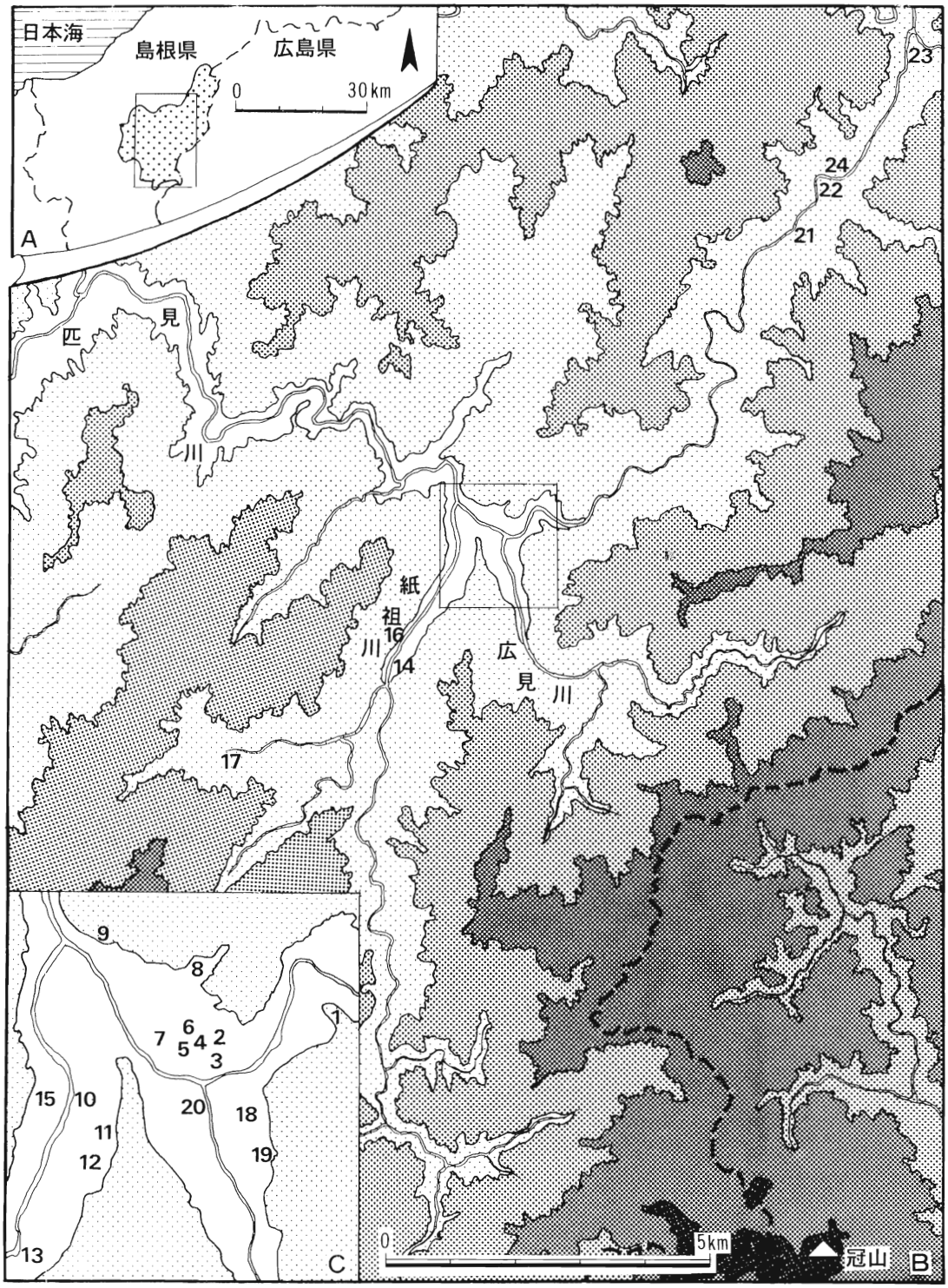
1．濃密な遺跡群

匹見町は島根県の西南にある山村で，中国山地の脊稜である冠山地の北斜面にあたる（第1図A）。山地からの流水は町内でいく筋も匹見川に合流して西下し，高津川にそそいで日本海にぬける。町内のほとんどが山地であるから，川の流れは峨々たる山並みのあいだを縫って走る。せまい山峡にふかい谷間がつづき，両岸は切り立った斜面である。なかでも匹見川筋の表匹見峡と広見川筋の裏匹見峡はちょっとした親不知で，奇観として有名である。考古学上，石器の原材産地として有名な冠山遺跡群は谷筋を上ったところにある。

遺跡の把握　ひと昔まえまでは，匹見町の遺跡についてはなにもわかっていなかった。東京国立博物館が匹見町の広瀬の古墳から出土したとして所蔵するカラスキは原始農具としてもっとも有名な遺物であった。しかし木下忠氏の研究によると，古墳の出所は疑わしく，時代もせいぜい室町時代末期の農具だと言う[1)]。ほかに町内からは，旧石器時代の終末から縄紋時代の草創の代表的な石器である両面調整尖頭器の断片[2)]が知られていたが，出土地は大字澄川の能登ではないかとの推定にとどまる。

匹見町の遺跡が考古学上，正規に捕捉されたのは縄紋土器に注目した足立克己氏によるものである[3)]。その直後の1985年12月には町内の東にある新槇原遺跡が島根県文化課の指導で発掘調査された[4)]。その後まもなく，農地改善事業がおおがかりに導入されるにおよび町教育委員会が埋蔵文化財対策として事前調査を実施した結果，続々として遺跡の発見が続いている。たぶんこれほどおおくの新遺跡が短期日に知られたことは考古学上あまり例がないであろう。足立氏が匹見町の土器を引用して，とくに問題点を指摘した縄紋後期前葉の西日本の土器編年にかんしても，現今の状況は新発見遺跡の対処と1次資料の整理・公刊までで手一杯であり，増えつづける資料が解決をむしろ遠ざけている。

遺跡の分布　匹見町で岸がひらけて平地を形づくっているところは，ほんの数えるほどしかない。このせまい谷の平地に遺跡が密集している。もっともひろい平地は，匹見川，紙祖川，広見川の三川が合流する場所で，標高260－270mの河岸段丘が小盆地として匹見川の北岸にひらける。東西が1㎞弱，南北が最大500mのこの平地は，町内で随一の好日照の場所で，しかも往来，物流の経路でも交差点にあたり，遺跡の分布がもっとも濃密である（第1図C）。東から小字名を冠して門田遺跡，イセ遺跡，垣添遺跡，ヨレ遺跡，太鼓胴遺跡，筆田遺跡がすき間をおかずにならんでいるが，むしろこれらは地点名称であって，ぜんたいで字名の半田を冠



第1図　匹見町の遺跡分布　A匹見町の位置，B遺跡の分布（1/100,000），C濃密な半田地区

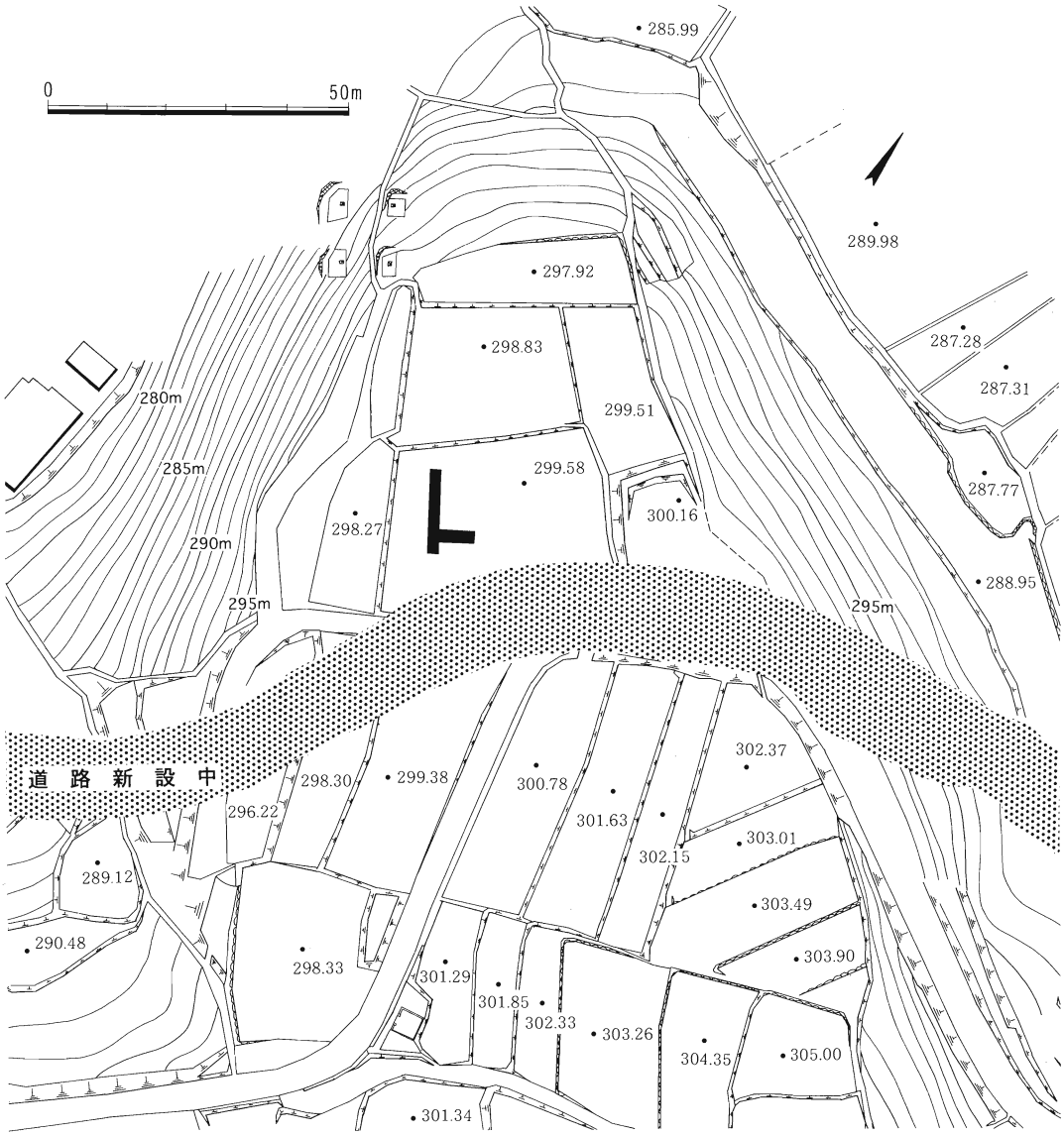
した半田遺跡群[5]とでも言うべきものである。門田遺跡はげんざいの集落位置にあって，発掘調査ができていないが，縄紋後期の精製土器が出土している。門田遺跡に南接するイセ遺跡は縄文時代後期前半の墓址とみられる配石が顕著で，晩期末から弥生時代前期の竪穴住居址が重複する。縄紋遺跡としては門田とイセは場所が連続しているから，おなじ遺跡である。さらにその西どなりには北に晩期初頭の垣添遺跡があり，さらにその西には太鼓胴遺跡がある。その南は縄紋後期から晩期にかかる配石遺跡であるヨレ遺跡である。ヨレ遺跡の配石のしたには木の実の貯蔵穴があるから，最初から宗教遺跡であったのではない。太鼓胴遺跡とヨレ遺跡とは一体で，おなじ遺跡である。筆田遺跡は古墳時代後期の竪穴住居が顕著であるが，弥生時代後期の遺物も出土するし，縄紋時代の石器も散布する。要するに，半田遺跡群は東から西に順次，時代があたらしくなる。しかし，いずれの地点も時代をたがえた遺物を重複するから，中心部が移動したにすぎず，半田の平地の東半はいつの時代も利用されている。

半田遺跡群をとりまく北の山麓斜面には弥生時代後期の江田平台遺跡と横穴式石室をもつ江田古墳がある。

ここから南西方向に紙祖川をのぼると東岸には，まず縄紋後期初頭の土器と古墳時代中頃の竪穴住居が検出された石仏頭遺跡[6]がある。さらに南下すると下正ノ田遺跡，水田ノ上遺跡と長グロ遺跡が近接して立地する[7]。下正ノ田遺跡は古代の掘立柱建物１棟が検出されたが，遺構の分布は稀薄である。水田ノ上遺跡の範囲は県道六日市匹見線をまたいでかなりひろがるが，中心部分は縄文後期末から晩期にかかる配石遺構である。水田ノ上の南にある槍田地区からは細形銅戈ないし銅剣の切先が出土し，弥生土器が採集されていないことから，青銅器の埋納址があったものとおもわれる。長グロ遺跡は奈良時代から平安時代初頭の古代集落址で，平面方形の竪穴住居が10棟以上密集して発掘された。さらに南にくだり，小原川が分岐する手前に石ヶ坪遺跡がある。石ヶ坪遺跡は縄文中期には滑石の混じった並木式，阿高式土器を使用する集落址であるが，後期になると配石遺跡にかわる[8]。この配石遺跡は水田ノ上遺跡よりも１時期ふるいものである。

紙祖川の西岸には，前田尻遺跡とそこをくだったところに前田遺跡とがある。前田尻遺跡の発掘では打製石斧がおおい[9]。前田遺跡では縄紋後期ごろから弥生，古墳時代をへて中世の遺物まで出土する[10]。西岸の遺跡はおおむね洪水の影響で撹乱され，遺跡の残りはよくない。

⇐凡例　1．上ノ原遺跡，　2．門田遺跡，　3．イセ遺跡，　4．垣添遺跡，　5．ヨレ遺跡，　6．太鼓胴遺跡，　7．筆田遺跡，　8．江田平台遺跡，　9．江田古墳，　10．石仏頭遺跡，　11．下正ノ田遺跡，　12．水田ノ田遺跡，　13．長グロ遺跡，　14．石ヶ坪遺跡，　15．前田尻遺跡，　16．前田遺跡，　17．家廻り遺跡，　18．下手遺跡，　19．和田古墳，　20．松田原遺跡，　21．前田中遺跡，　22．ダヤ前遺跡，　23．新槇原遺跡，　24．上家屋遺跡



第２図　上ノ原遺跡の台地（1/1,250）

紙祖川の支流で，西の燕岳から発する小原川の北岸には，縄紋後期末・晩期初頭の家廻り遺跡がある。家廻り遺跡[11)]は浸食を受けていて，遺跡の残りがわるい。

紙祖川の最上流には三葛とよぶ小盆地があり，峠越えで冠山に達する。三葛は，神楽の伝承で民俗学者が注目しているものの考古学上はまだなにも分かっていない。

冠高原には広見川をさかのぼっても到達できる。途中で南に折れて五里山をこえる道路が冠高原に通じているから，その経路の利用もとうぜん古くからあったであろう。広見川は谷の平地がほとんど開けておらず，わずかに匹見川との合流点にちかいところで目下，遺跡が知られるにすぎない。すなわち東岸には弥生時代の下手遺跡[12)]と和田古墳があり，西岸には弥生時代後

期の松田原遺跡がある。これらは，ちょうど半田遺跡群の対岸にあたり，匹見川の南岸に位置する。下手遺跡では，縄紋時代の配石遺跡が連綿として弥生時代にまで残ったとしか思えない石敷遺構が発見されている。

匹見川をさらに東にさかのぼると表匹見峡の景勝をみて，道川にいたって南岸には縄紋時代後期の配石遺跡である前田中遺跡，縄紋時代早期のダヤ前遺跡[13)]がある。その上流の２川の相会地の南岸には縄紋早前期の新槇原遺跡がある。新槇原遺跡はひろく発掘していないが，姶良丹沢火山灰（AT）を含む最下層から旧石器時代が出土した。これらの遺跡はいずれも匹見川の南岸に位置する。北岸は遺跡がすくなく，わずかに上家屋遺跡で縄紋土器の散布がしられるにすぎない。

ここからさらに東は，臼木谷をへて広島県の芸北地方の八幡高原に達する。匹見町ではこの北に，もうひとつ赤谷と呼ぶ小規模な谷の平地が東にむかう。しかし，匹見町の東端のこの地域はまだ分布調査が実施されていないので，遺跡が確認できていない。

匹見町の遺跡には，そのほか山城やタタラなどの時代のくだる遺跡がある。しかし，注目されるのはやはり縄紋遺跡であり，そのうちの配石遺跡である。最初に紙祖川流域で発見されたが，そののち匹見川筋の半田遺跡群と上流をさかのぼった前田中遺跡にも配石があることがわかった。西日本では配石遺跡の密度がもっとも濃い地帯となっている。

２．上ノ原遺跡の立地

上ノ原遺跡は匹見町の中央盆地の東にある（図版一ノ１）。盆地の東を仕切る山塊が，河岸段丘の丘陵となった中段目のなだらかな支脈の先端に遺跡がある（第２図）。遺跡の北を匹見川，西を広見川が流れる。遺跡が密集する半田地区の平坦面からは比高で30mたかく，ちょうど300mの等高線が西北に張り出した台地に位置する。ここから半田遺跡群を西に望むことができる。台地の尾根は東南から西北にのび，頂部は平坦ではなくなだらかな斜面である。調査にはいるまえの現況は，休耕の段々畑に雑草がしげり，尾根筋を切断する県営道路が工事中であった。この台地のうえにはさらにもう一段せまい台地があり，これが上位の河岸段丘にあたる。現在この段まで農地として開墾されて，そこからうえは傾斜が急になり，森林が後背としてひかえる。

遺跡は，道路工事の切通しのうえの畑にある（図版一ノ２）。遺物が採集されたのは畑１筆であり，たぶんここが遺跡の中心であろう。なぜなら台地のなかでこの区画がもっとも面積がひろく，平坦地が確保できているからである。ここから東北にかけては比高がまして，既設の農道が旧地形を削平しており，新道が幅員をひろげて路線を掘削する予定である。基盤土の水準

もたかくなるので，この尾根筋方面には遺跡はあまりひろがらないと見られる。調査地の南はすぐ斜面になり，谷が入り込んでいる。斜面の現状は竹薮となっている。尾根の先端方面へは，どこまで遺跡がひろがるのかはわかっていない。除草しないと踏査できる状態ではなかった。

この台地の水利用は，かくじつに供給できる下の川筋までは距離がありすぎてとおいので，斜面をくだる流水が水源であったものと思われる。また上位の段丘からの伏流水が湧き出て地表水としても利用できたであろう。今回の調査では，遺跡への給水の問題を解くために周辺踏査と聞き取りを忘れたけれども，河川の水の利用はとても考えにくい立地である。つまり，台地と言っても関東のトヤとかヤツ，ヤチとはぜんぜんちがう立地である。

（渡辺友千代・中村友博）

注

1）木下忠「島根県匹見町広瀬出土の犂鑱の再検討」（松崎寿和先生退官記念事業会『考古論集』，1977年）。

2）亀井熙人（『さんいん古代史の周辺』〈上〉，山陰中央新報社，1980年）6ページ。

3）足立克己「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」（岡崎敬先生退官記念事業会『東アジアの考古と歴史』中，1987年）。

4）松本岩雄（『新槇原遺跡発掘調査報告書』，匹見町教育委員会，1987年）。

5）渡辺友千代（『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅳ，1991年。『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』，匹見町教育委員会，1993年）。

6）渡辺友千代（『主要地方道六日市匹見線特殊改良工事に伴う石仏頭遺跡発掘調査報告書』，匹見町教育委員会，1994年）。

7）渡辺友千代（『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』，匹見町教育委員会，1991年）。

8）渡辺友千代（『石ケ坪遺跡』，匹見町教育委員会，1990年）。

9）渡辺友千代（『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅱ，匹見町教育委員会，1989年）。

10）渡辺友千代（『昭和63年度匹見地区県営圃場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書』Ⅱ，匹見町教育委員会，1989年）。

11）渡辺友千代（『昭和62年度匹見地区県営圃場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書』，匹見町教育委員会，1988年）。

12）渡辺友千代（『県営圃場整備事業に伴う下手遺跡発掘調査報告書』，匹見町教育委員会，1993年）。

13）渡辺友千代（『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』Ⅵ，匹見町教育委員会，1994年）。

第3章　層位と遺構

1．調査の方法

調査区　発掘調査は，渡辺友千代氏が遺物を表面採集した１枚の畑の部分的な掘削にとどまるものである。この１筆の畑はかつて作物を栽培するほかに，南西部分の区画を林業用の苗圃として作付けしていたらしいが，７月調査に入った時点の現況は，表面の軟らかい耕作土が全面にわたって削りとられ，北と西の２辺に盛土として処理され，東部分は資材運搬用のトラックを導入するために砕石がまかれていた（図版二ノ１）。また，南の境界は県道工事によってふかく掘削され，露頭となった断面に包含層が現れる。発掘は砕石敷を避け，西の部分にＬ字形の直交トレンチを設けて，層位ごとに掘り下げる方針とした（図版二ノ２）。

まず，２ｍ四方を最小の単位である１区とし，丘陵の尾根の主軸に平行する軸線とそれに直交する軸線とで座標を設定することにした。主軸方向をアルファベット，直交方向をアラビア数字で呼称する。遺跡のひろがりがわからないので，Ａ０区の東南隅に座標原点（０，０）を仮定し，主軸方向のトレンチを南から順に８，９，10，11，12，13，14区と分割命名し，直交トレンチを東から順にＯ，Ｐ，Ｑ，Ｒと分割命名した。すなわち，Ｏ９，Ｐ９，Ｑ９，Ｒ９とＲ８からR14までの都合10区を掘削対象とした。Ｒ８は平面Ｌ字の角に飛び出た１区となる。Ｏ９，Ｐ９，Ｑ９区を，ここでは東西トレンチ，Ｒ８からR14を南北トレンチとしておく。そして，１週間の発掘予定でこの調査区内の切りのよいところで，今回の発掘を終える方針とした（図版三ノ１）。

地形測量　地形測量は匹見町土木課が民間業者に外部発注し，納品された地形図を使用することとした。この地図のトラバース・ポイントが１点（業者の番付では，Ｔ５－１）仮設の木杭として調査区の北辺にのこっているけれども，バック・サイトの利く木杭はとばされてなくなっているか，見当たらなかったので，発掘調査の座標を国土座標に換算できない。作図して分度器で求めると，主軸は真北方向から西に約29度30分傾く。したがって主軸の南北トレンチの方向は真北とも磁北とも関係がない現地での便宜的な呼称をこの報告書でも採用しているので，ご注意いただきたい。

さきの木杭Ｔ５－1はわれわれの座標原点からは，発掘座標で言う西に24.012m，北に34.090mに位置するが，たぶんまもなく腐って消失するであろう。ところがこの畑の東南隅には，もう１つ三角点に連結するとみられる恒久的なコンクリートの測量杭があり，どうもこれを使って業者は多角点に木杭を打ったのではないかとみられるが，肝心な国土座標の成果がわからない。

第３図　発掘調査区の位置（1/600）

しかし，ありがたいことに回りを囲う横木にマジック・インクで299.846と数字が書かれていた。この数値は測量技師の実務慣行と業者納入の地形図ならびに国土地理院の地図に照らして，標高値にあやまりなかろう。すなわち，ただちにこれをベンチ・マークとして発掘に使うことにしたのである。この恒久杭の座標は，今回の発掘調査の座標に置き換えると，西に5.203m，北に20.940mである。調査区の位置図（第３図）は，畑の要所をビニール・テープで測距し，地形図に埋めこんだものである。しかし畑の外形が道路の付設で変わっているので，多少の誤差をふくむとみられる。

層位　畑の工事中の切り通しの断面観察から，堆積土は上から順に，１通称で「黒ボク」と呼ぶ黒色土，２黄色土，３黒色土，４黄色土の順序で基盤の段丘礫層に達する。各層の境界はみごとに明瞭であった。１は現地で「上黒」として簡便して呼称した層で，この報告書では第１黒色土とする。２は現地の「上黄」で，この報告書では第１黄色土，３は現地の「下黒」，この報告書では第２黒色土，４は現地の「下黄」で，この報告書では第２黄色土とする。

切通しの露頭では東の方向に標高が高くなると，黄色土の間層が尖滅して上と下の黒色土が

合体して１枚となる。これはたぶん，東方では第１黄色土以上が浸蝕，流亡してしまったからであろう。畑の西にトレンチを設けたのも，東は砕石敷のため掘削に手間取る理由のほかに，連続層位の発掘には西のほうが適地であったからである。黒色土のなかにイエロー・バンドを介在させるこの独特な層順は，匹見町では最初に埋蔵文化財として発掘された新槇原遺跡で認められた。その後，匹見町内ではいくたの遺跡発掘が実施され，表層地層の断面をとらえたけれども，黒色土と黄色土の交互堆積は認められなかった。今回はからずも，河岸段丘のよりたかい面でふたたび互層の堆積を看取したのである。

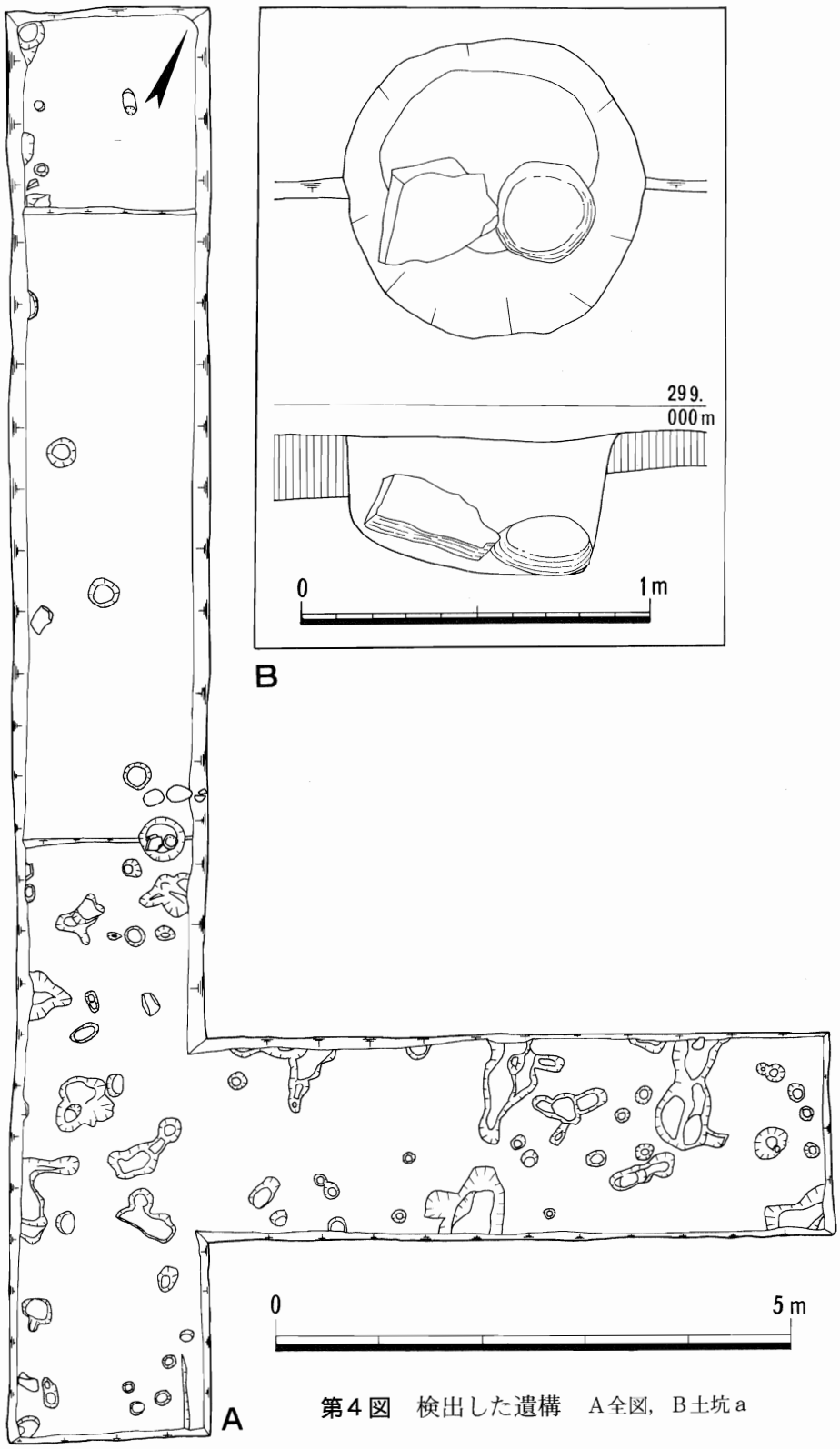
新槇原遺跡の発掘成果から，つぎのように推測できる。第１黒色土は縄紋前期初頭の堆積である。第１黄色土の下部と第２黒色土の上部は縄紋早期の無紋土器が出土し，たぶん押型紋土器の終末ないしい直後の堆積である。第２黄色土は旧石器時代である。新槇原遺跡の調査では，地質学者によるＸ線マイクロ・アナライザーによる火山ガラスの分析が実施された。それによるとアカホヤAh火山灰の堆積は第１黒色土からみられ，第１黄色土以下にはまったく認められなかったという。また，姶良丹沢AT火山灰は基底礫直上の黄色砂層から検出でき，以降の堆積層に連綿として認められると言う。出土遺物とAh，ATの分析結果は新槇原遺跡では矛盾しないから，このたびの上ノ原遺跡の発掘は層位にかんする決定的な予断をもって臨むこととなった。すなわち，不整合面をなす層界をめやすに各調査区を堆積層単位に機械的に掘り進むことにした。

２．東西トレンチ

層位　東からＯ９，Ｐ９，Ｑ９の３区である。長さは６ｍ，幅は２ｍである。西は南北トレンチのＲ９区と連結する（図版三ノ２）。

各堆積層は東から西にゆるく下がる。東では表土が転耕による撹乱により黒色土と第１黄色土が地表で水平にブロック堆積する。第１黄色土層はＰ８区で尖滅して，東には堆積しない。したがってＰ８区から東は上下の黒色土が合体して１枚となる。第２黒色土はＰ９区以東では，ひときわ黒味がつよい漆黒の上部と下部とに２分できる。この漆黒の粘質砂土は下部の黒色土をうすく覆うもので，第１黄色土層のしたにＰ９区でもぐりこんでいる。つまり，Ｏ９区以東では地表にあらわれている表土の基質は，この第２黒色土であろう。第２黒色土の厚さは，20㎝である。

東端のＯ９区を深掘りして，段丘基底礫層の上面を捕捉した。第２黄色土は，黄褐色粘質の上部と明黄褐色で極粘質のしまって固い下部とに分層できる。しかし層界が鮮明でなく，漸移する。上ノ原遺跡では，厳密に言う第２黄色土とは上位の黄褐色粘質土を指示するものとした



第4図　検出した遺構　A全図，B土坑a

い。したの明黄褐色極粘質土からは土器や石器などの遺物は出土しなかった。たぶんこの層は更新世の堆積物であろう。

遺構　第2黒色土と第2黄色土の層界で遺構を検出した。第2黒色土の上面は撹乱穴しか検出できなかった。すなわち第2黒色土の下面で，下層の遺構が検出できた（第5図）。平面が不整形のあさい土坑と差渡しが10cm内外のちいさな柱穴である。柱穴は群をなすが，明瞭に建物を復元することはできない。P9区土坑6は，現表土からの撹乱である。

3．南北トレンチ

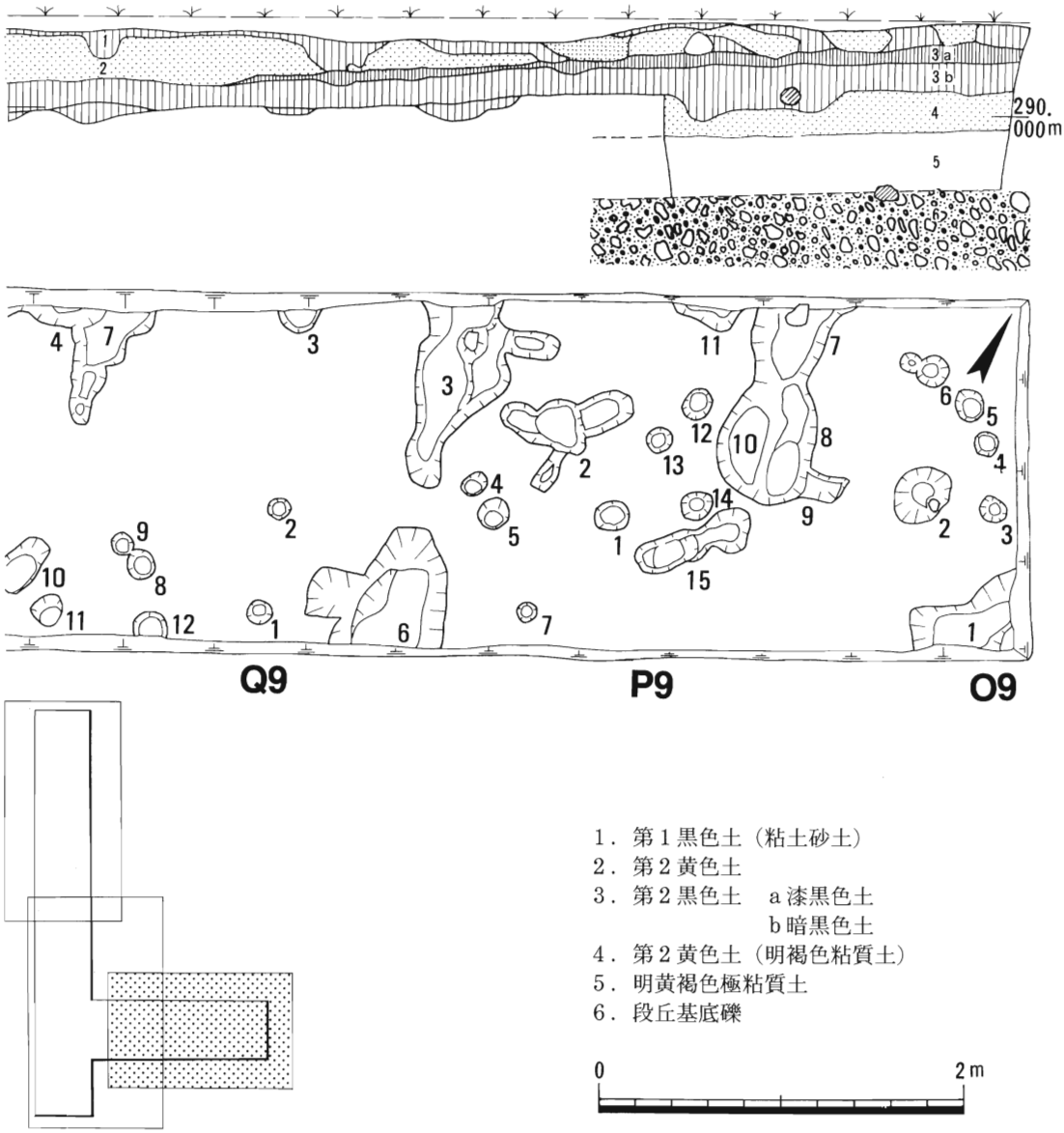
R区を8から14区まで発掘した（図版三ノ3）。層順は，東西トレンチとおなじである。表土は耕作土で，基質は黒色土である。重機で削平されているが，R12以北には残る。発掘の終了面は，R8，R9，R10が第2黄色土の上面，R11，12，13が上の第1黄色土の上面，R14区が第2黄色土の上面である。要するに，完掘していない。予定日数を越えたので中断したのである。

表土はほとんど削平されている。そのしたは第1黄色土が堆積する。第1黄色土は当初，ローム層に似ている印象からして降下堆積物ではないかと考えていた。ところがR11区の東南隅に横並びの自然礫が出てきて，しかも周囲には堀方がない。これは自然の降下堆積では起こりえないであろう。また自然礫は水平ではなく，南に傾斜している。この問題にかんして発掘中に渡辺氏からつぎの指摘をうけた。第1黄色土の断面をよく見ると，層厚が数㎜のうすい灰色の砂質土が無数にかんでいる。すなわち第1黄色土は層利をなしているのである。しかも層利は水平ではなく，ゆるい波状で流利構造をもつ。たぶん第1黄色土は水利作用による二次堆積物であろう。したがって，そのしたの第2黒色土は浸蝕攻撃をうけている。問題のR11区の東南隅の自然礫は，集石炉ないし組石炉が崩壊したものであろうか。

第2黒色土はげんざい層厚が20から30cmを算するが，もともとはもっと厚い包含層だったと推定できる。この第2黒色土は北端のR14区では，黒味のつよい上層と色が薄くなった茶褐色砂質土の下層とに2分できる。上層は，おそらく東西調査区の漆黒土と一連のものであろう。

4．遺　　構

最上層の遺構　第1黄色土の上面で遺構を検出した（図版四ノ1）。これは第1黒色土が残っている調査区で可能であった。差渡しが25cmくらいのこぶりな円形の土坑が5基あり，いずれも規格が似ており柱穴のようである。堀方は鮮明で，壁もしっかりしているが，床は検出面から深さ10cm内外であさい。埋土は第1黒色土とおなじで，まったく区別できなかった。層位



第5図　東西トレンチ（1/40）

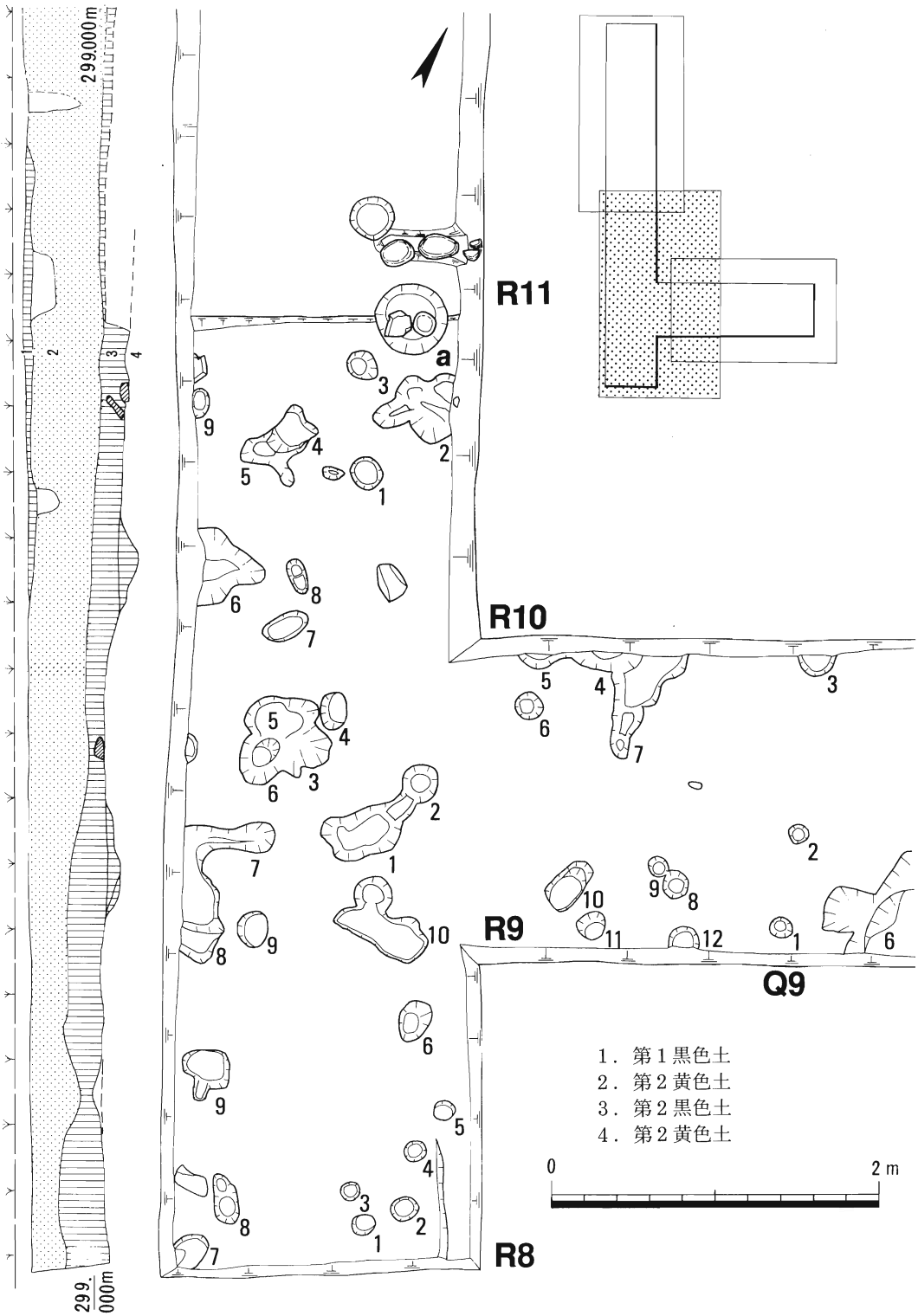
的には遺構年代の上限が縄紋時代となるので記録しておくけれども（第7図），掘立柱建物の柱列でないかと考える。R14区の中央の穴を一連と見なすと桁行ないし梁間の西の柱列4間分が調査区にかかったことになる。埋土からして現表土から掘削された可能性があり，出作のための農作業小屋であったかも知れない。しかし，トレンチによる調査のため遺構の性格は断言できない。

上層の遺構　第２黒色土の上面で３基検出した。R11・12区の境界にある円形土坑ａとR14区の西北隅にかかった掘込みｂと同R14区の西壁にかかる掘込みｃである。東西トレンチではこの面には遺構がなかった。ともに堀方埋土の色調は，周囲より黒味がなく暗褐色で，やや明るく茶味がかり，粘性がおとる。土坑ａ（図版四ノ２，第４図Ｂ）は，平面正円形で，差渡し90㎝。壁は垂直で，深さが40㎝。床はゆるい半球状である。人頭大の円礫と角礫が１つずつ基底に落ち込む。出土遺物はなく，機能は分からない。集石炉の石を廃絶後に抜き取ったにしては，まったく灰の痕跡が認められない。土坑ｂは，平面がはっきりしないが土が柔らかいので掘り進んだ結果，土坑と認定したものである。土器（第10図１）と石鏃（第12図１）が出土した。土坑ｃは，土坑ｂよりも堀方がしっかりしていた。埋土に遺物はない。

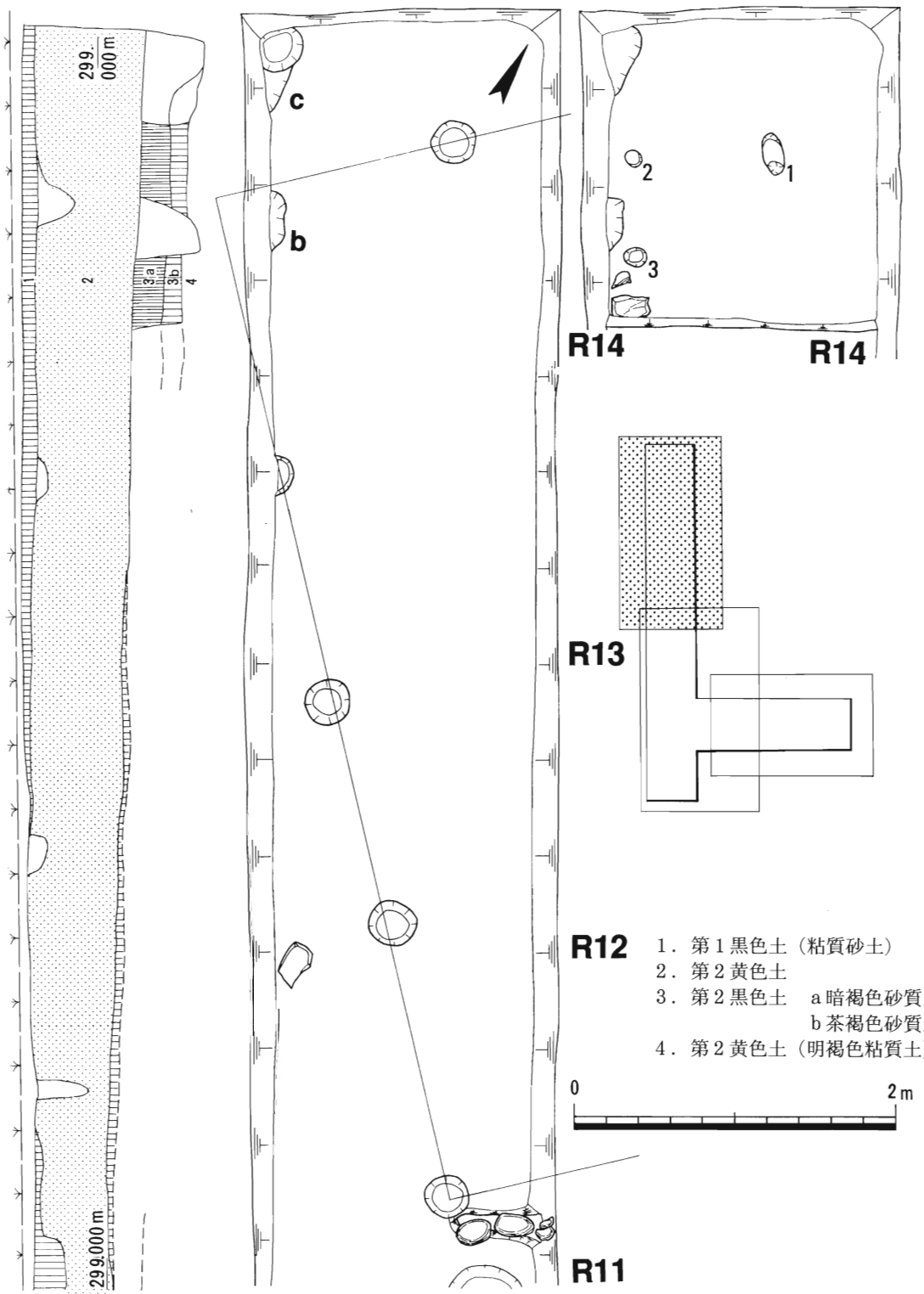
下層の遺構　第２黄色土の上面で不整形な土坑と小穴を無数に検出した（図版五）。不整形な土坑はこの面の全面にわたり顕著である。この遺構検出面は包含層である第２黒色土の下になるけれども，これらの遺構の形成が真に第２黒色土の堆積以前なのかはよくわからない。というのは堀方の埋土が，第２黒色土とほとんど区別できず，要するに第２黄色土を露呈させた段階で黒色土の落ち込みを発見したわけである。したがって，遺構はほんらいもっと上のレヴェルで見えていたのだが，認識しえないまま第２黄色土の上面まで掘り進んでしまった可能性がある。この場合，下層遺構の形成は第２黒色土が堆積した後であって，発掘の手順とは年代が逆転する。ただし，第２黒色土がすべての堆積を終了したのちの時期にまで，下層遺構の年代を下げることはできない。第２黒色土の上面からは上層遺構が形成されるからである。第２黒色土の分層は東西トレンチの一部で漆黒の上面とR14区で明暗差により仕分けたが，下層遺構の輪郭は見出だせなかった。たぶん第２黒色土の中間に堀込み面があったとしても，実務上は検出が無理であろう。

いっぽう下層遺構の時期を第２黒色土の堆積以前とし，発掘の手順が堆積の逆順で進行したとみなすこともできる。なぜなら，第２黄色土と第２黒色土の層界が鮮明で不整合である事実は，第２黄色土のほんらいの上面が浸蝕によって流失し，遺構としては基底部しか残っていない可能性があるからである。この上に再度，遺構の埋土とおなじ第２黒色土が堆積した場合も想定できる。

下層の土坑　土坑の床には起伏がある（図版六ノ１，２）。これは不整合面にありがちな層界の自然起伏ではない。鋭角的に落ち込む部分がある（図版六ノ４）。平面は，俗に言ううなぎの寝床のような形をしていて，長さがだいたい50㎝から100㎝，幅が30㎝から50㎝ぐらい，堀方は深いもので20㎝，あさいもので10㎝ぐらいである。全体として浅い皿状の窪みが連結して１つの土坑ができあがった感じである。遺構の内外に炭，灰，焼土は伴わない。土坑と小穴は続き番号とし，１区ごとに番づけして登録した。ただしＰ９区の土坑６は，現表土からの撹



第6図　南北トレンチの南半部分（1/40）



第7図　南北トレンチの北半部分（1/40）

乱穴である。はっきり上の層からの掘り込みで，撹乱穴と断定できたのはここ１箇所だけである。ほかは早期の遺跡の類例として炉穴の基底部の可能性などがあるけれども，中形動物の巣穴であった可能性もある。

差渡しが10cm内外の無数の円形平面の小穴も全面にわたり分布する（図版六ノ３）。深さはまちまちであるが，あさいものが多い。屋外炉に付設する差掛のような構造の柱穴の可能性があるけれども，断言はできない。小穴のなかにはネズミやモグラのような小動物の営巣痕跡が確実にある。O９区を深掘した結果，小穴のひとつは人間の手がとどかない深さまで達していたからである。

もっとも遺構の検出が容易な黄色土の上面でみられる落ち込みが，遺跡であるのかないのか判断がもっともむずかしいこととなった。押型紋土器に伴う土坑と小穴の組合せは，福岡県福岡市柏原遺跡A－1地区（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第158集，1987年）で密集しており，報告者は住居址と考えている。ここで住居址とする遺構は上ノ原遺跡の不整形土坑よりも平面がおおきく，円形に接近している。しかし，壁が垂直でなく，床面には起伏がある。この住居址が浸蝕されれば，上ノ原遺跡のような不整形の土坑となるであろう。この場合，遺構の形成は第２黒色土が堆積する以前である。いっぽう人の手もとどかない深い小穴があったことは，地面が草原で小型動物が営巣し，食物連鎖でそれを捕食するタヌキ，キツネやウサギなどの中形の動物も巣を造ったであろうから，文字どおりウサギ穴の可能性もある。土坑のいくつかからは，遺物が出土しているけれども，それは動物の巣が包含層を掘り込んだ結果としても説明できる。この場合，遺構にはならないけれども，巣穴が造られたのは，第２黒色土が堆積しはじめてから後になる。

そのほか現地では気づかなかったけれども，最下層の遺構検出面がある可能性を室内作業が示唆した。すなわち，最下層の包含層である第２黄色土はR14区の１マスを掘っただけであるけれども，遺物の垂直分布図を作成したところ，包含層の下位で出土する傾向がでた（第８図B）。現地では風化土壌の漸移帯ぐらいに考えていたが，層界に面のあった可能性がある。生活面の有無にかかわらず，第２黄色土の下面はいずれにせよ遺構検出作業が必要となる。

（中村友博）

第4章　出　土　遺　物

1．はじめに

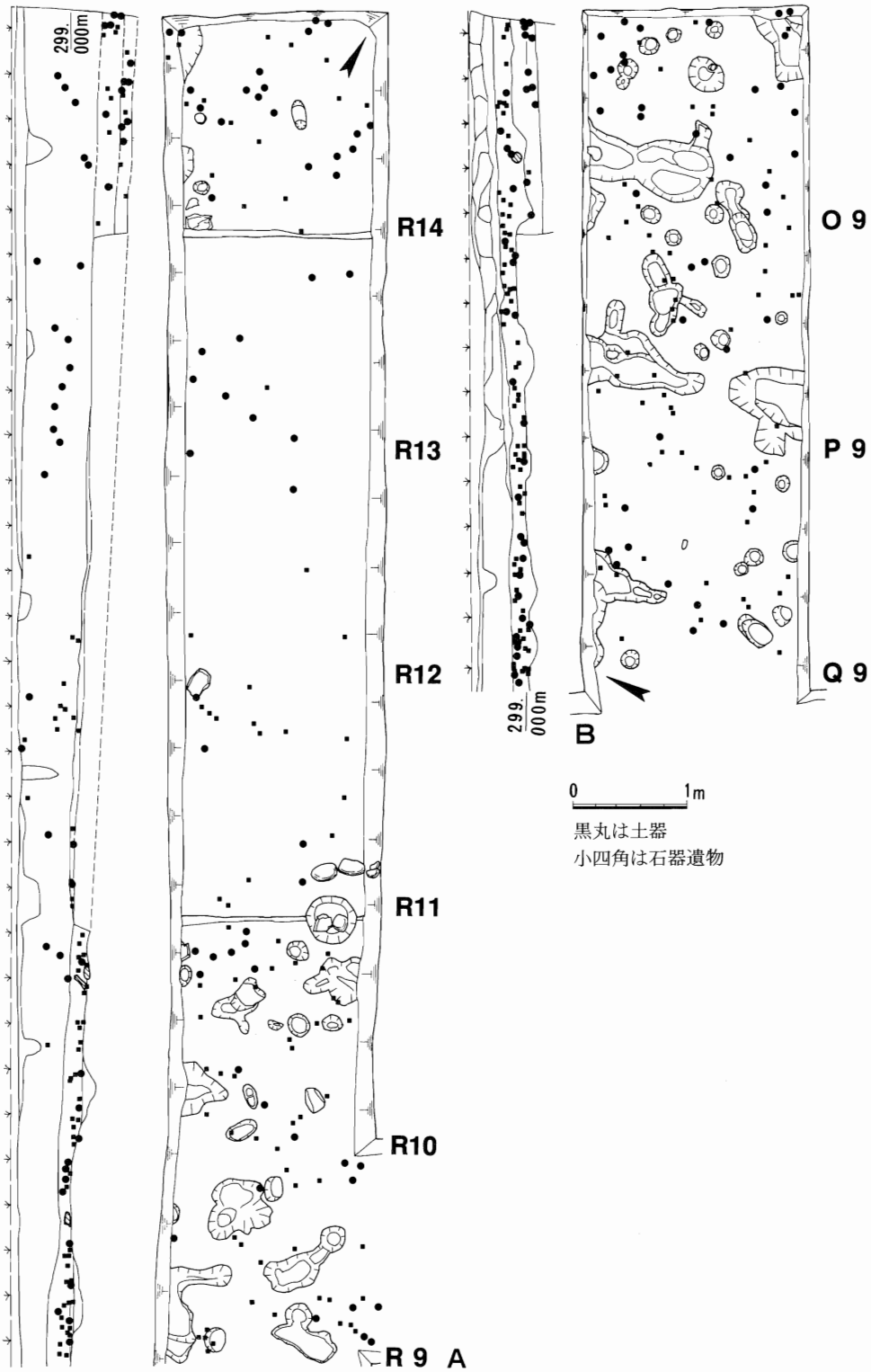
出土遺物は，土器と石器遺物のほかわずかな量の炭化物である。炭化物は文字どおり炭の小片であり，自然物なのか人工品なのか分からないが，試料として捕捉した。遺物は第2黄色土，第2黒色土，第1黄色土，第1黒色土の4層にわたって出土した。そのうち遺物のもっともおおかったのは第2黒色土である。表土である第1黒色土からは，現代の真鍮製の指輪と陶器片が出土した。これは第1黒色土が現代，汚染されている証拠であるけれども，現代遺品はごくごく少量である。土器はすべて押型紋様式で，ほかには一切の先史土器がまじっていない。拓影をできるかぎり収録する。掲載していないのは，したがって小指の爪ぐらいのおおきさの無紋土器である。押型紋土器と無紋土器の量比は挿図に表れるけれども，ちいさな無紋土器には摩滅した押型紋が混在する可能性がある。石器遺物は，型式，石核，剝片からなる。石器遺物のうち型式は指標となりうから，一括して図示（図版十二～十四，第12，13図）し，石核，剝片にかんしてもできるかぎり図示する。剝片はかなり大量の出土をみたが，時間のつごうで分析的な記述をなしえない。石材はとくに記述がないばあいはデイサイト，すなわち考古学の分野で冠山産の安山岩もしくは玄武岩として知られる岩石である。ただし石材の鑑別はあくまで素人の経験的な肉眼による。以下，年代のふるい下層から順に新しい層の発見物を紹介する。

2．第2黄色土から出土した遺物

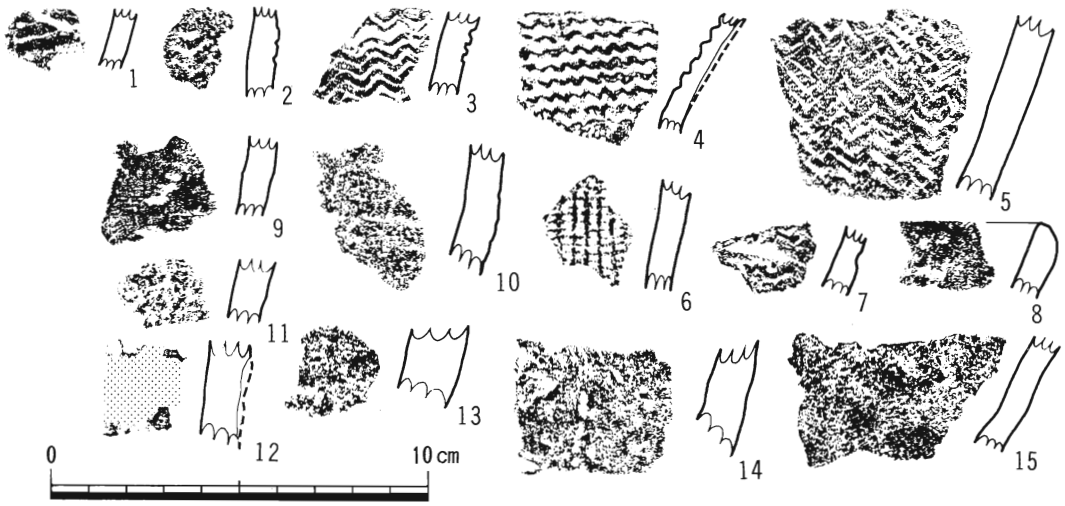
第2黄色土の上面を最終の遺構検出面と考えていたので，この層には遺物がないだろうと思っていた。しかし，発掘の最終日にO9の1区4平方mを深堀した結果，この層の上部には遺物が包含され，しかも旧石器時代ではなく縄紋時代早期の堆積であることがわかった。この層はしたになると土が固くしまるけれども，上部と下部の層界は不整合でなく漸移し，層中に遺構検出面はなかった。

1区分にしては，上位の層にくらべて遺物が多いから，第2黄色土には全体としてかなり多量の遺物が包含されているものと推測できる。1区の調査範囲の全面にわたり遺物は分布するが，東北隅にやや多かった。また垂直分布では，第2黄色土の上よりも下のほうから，すなわち漸移帯ちかくから遺物はおおく出土する。

土器（図版十ノ1）は押型紋土器と無紋土器があわせて15片出土した。押型紋土器が7片で，



第８図　遺物の分布図（1/60）　A南北トレンチ，B東西トレンチ

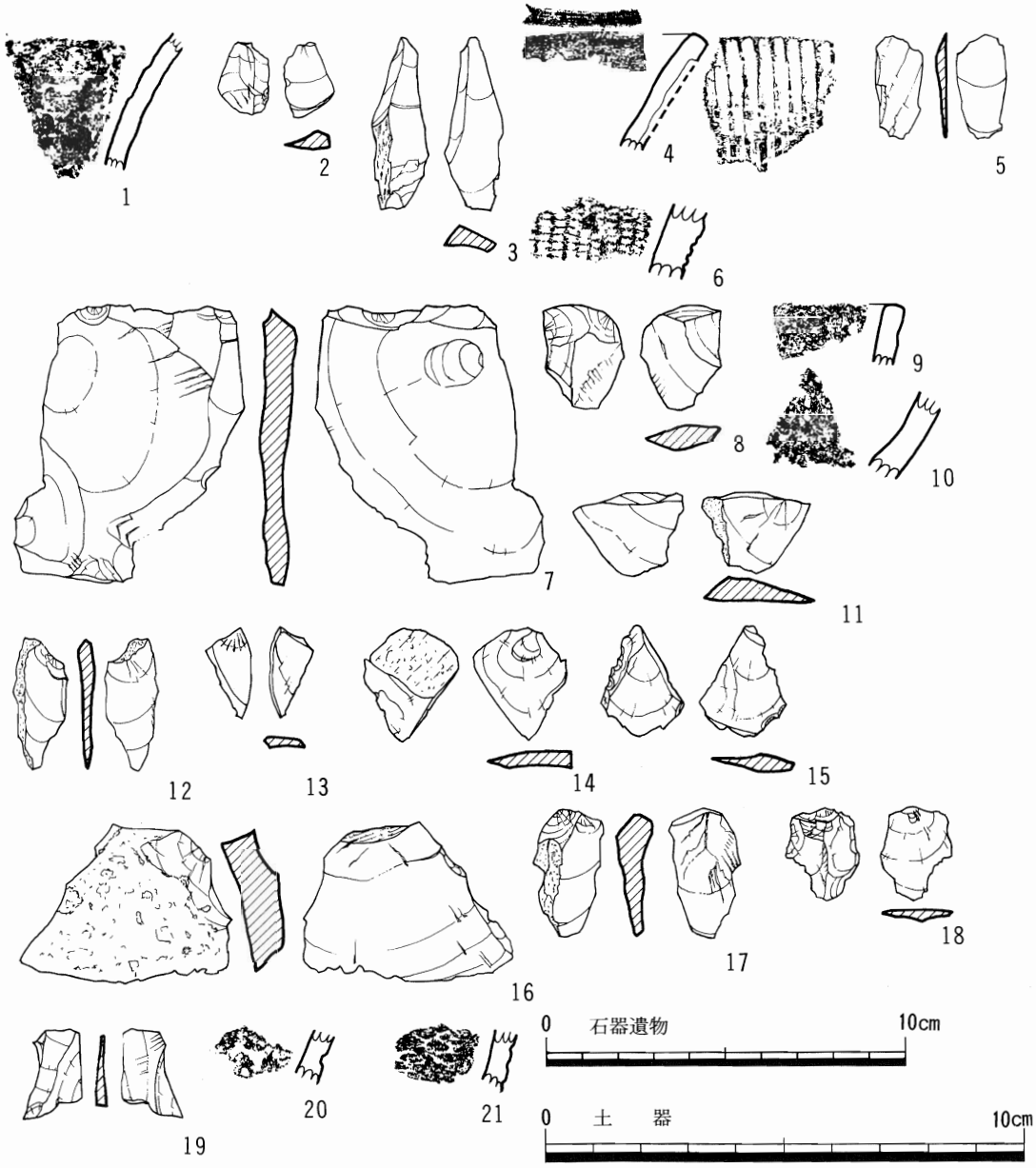


第９図　第２黄色土から出土した土器（1/2）

無紋土器は12片である。押型紋は山形紋（第９図１～５，７）がおおく，ほかには格子目紋が１点（第９図６）まじる。器壁は８，９㎜のものがおおいけれども，やや厚いもの（第９図５）は11，12㎜を測る。厚手の破片には砂が混じり，山の振幅が大きく，鋭角的である。第９図４は口縁外面の押型紋が剝落して，内面の山形紋を残す。原体下端の切り口は斜めであるが，鋭くない。山の波長はつよくなく，凸部より凹部がひろい。砂をほとんど含まない。13㎜間隔でおなじ山が再現する。第９図３は，凸部より凹部がせまく，波長がながい。ふるい山形紋であろうか。これも，砂をほとんど含まない。第９図１，２，７も山形紋だが，風化磨滅している。これらも，砂をほとんど含まない。格子目紋の１点（第９図６）は，目がこまかい。格子は菱形や正方形ではなく，長方形で凸線の１方がふとく，１方がほそい。この破片も砂がない。砂の有無は，案外と破片の大小のせいかも知れない。色調は３だけが暗褐色で，ほかは黄褐色である。

無紋の土器も，器壁が黄島式のごとき７，８㎜前後の厚さと12㎜程度のやや厚手のもの（第９図12，13）との２種類がある。色は，ぜんたいに淡い黄褐色である。８は口縁で，うすく丸みをもたせる。どの破片も砂を含む。調整の残っている無紋土器は，ナゼによるものである。

石器遺物は石錐（第12図13）の１点だけである。この層の掘削はうえの包含層と違えたバチでおこなったから，小型の剝片などを見逃しているおそれがある。石器は天地逆にすると彫器のようにみえるが，彫刻刀打撃ではなく，打面も造り出されていない。したがって，周縁が折れた，もしくは折取られたものである。意図的ならノッチである可能性もあるし，たんに調整剝片が事故で折れたものであるかもしれない。部分的な亜鋭角で短い細部調整が対向縁にある



第10図　土坑から出土した遺物（1/2，2/3）

から石錐としておく。ただし錐とすると，機能部分の軸が細すぎる。また，使用による磨耗も肉眼でみえない。

３．第２黒色土から出土した遺物

第２黒色土から出土した遺物には，遺構に伴った遺物と包含層から出土した遺物とがある。前文で記したごとく，両者の先後関係はよくわからないので，ご注意いただきたい。

ａ．遺構に伴った遺物

土坑の埋土から出土した遺物がある（図版九ノ２，第10図）。すべての土坑が遺物を含んでいたわけではない。また，意図的に埋められた状態であったと観察できた例もないので，土坑の埋没時に包含層からまじったものとみられる。

Ｏ９区の東南隅の土坑１からは石刃状剥片が１点（第10図３）出土した。最大長は3.6㎝，最大幅は1.2㎝である。打面は点状である。石の目にそった先行剥離面が両面にあるが，表面は主剥離と同時の垂直割れかもしれない。中央の土坑８からは押型紋土器１点（第10図４）と石刃状剥片が１点（第10図５）出土した。押型紋土器は外面がはがれる。内面の平行短線は２帯以上だが，下の平行短線はわずかしか残っていない。施紋の方法は，原体の横方向回転による。平行短線の末端は，水平である。外面の剥離のうえ，口縁にかかる部分はナゼによる無紋である。内面に紋様帯をもつ無紋土器はまずありえないから，たぶん横位回転の壁圧の差が剥落の原因となったのではないか。口縁の無紋帯の幅がせまいが，こうした口縁の外面に無紋帯をもうける押型紋土器は福岡県柏原遺跡群で９割を占め，類型的に存在するという[1)]。土坑10からは格子目紋の押型紋土器１点（第10図６）が出土した。格子の目はこまかい。第２黄色土から出土した格子目紋土器（第９図６）とたいへん似ているが，わずかに目が大きいので同一個体ではない。土坑11からは安山岩の小さい剥片が出土したが，図示していない。

Ｐ９区の中央の土坑２からは，無紋土器の小片１点と剥片２点が出土し，そのうち剥片１点（第10図８）を図示する。石の目からなる板状の剥片を小さく折ったものである。北壁にかかる土坑３からは，剥片１点（第10図７）と無紋土器の口縁（第10図９）が出土した。剥片は最大長が5.8㎝，最大幅も5.8㎝の方形平面で，打撃の方向と剥離の方向とがずれている。打面は調整打面で，裏面に傾く。主剥離面は波状で，先端は両面から折取る。無紋土器の口縁（第10図９）は風化しており，色は茶褐色である。

Ｑ９区の南の小穴12からは剥片の先端が１点（第10図11）出土した。

Ｒ８区では西南隅の小穴７から，無紋土器（第10図10）が１片出土した。調整はナゼで，色は灰褐色である。

Ｒ９区の土坑５からは石刃状剥片１点と剥片１点が出土した。石刃状剥片（第10図12）は最大長2.7㎝，最大幅1.1㎝で，自然面打面である。剥片（第10図13）は，基端が折れて打面を失う。西壁にかかる土坑８からは剥片５点が出土し，おおきい順に２点を図示した。第10図14は

点状打面で，先端が折れる。第10図15は基端が折れて失われてる。

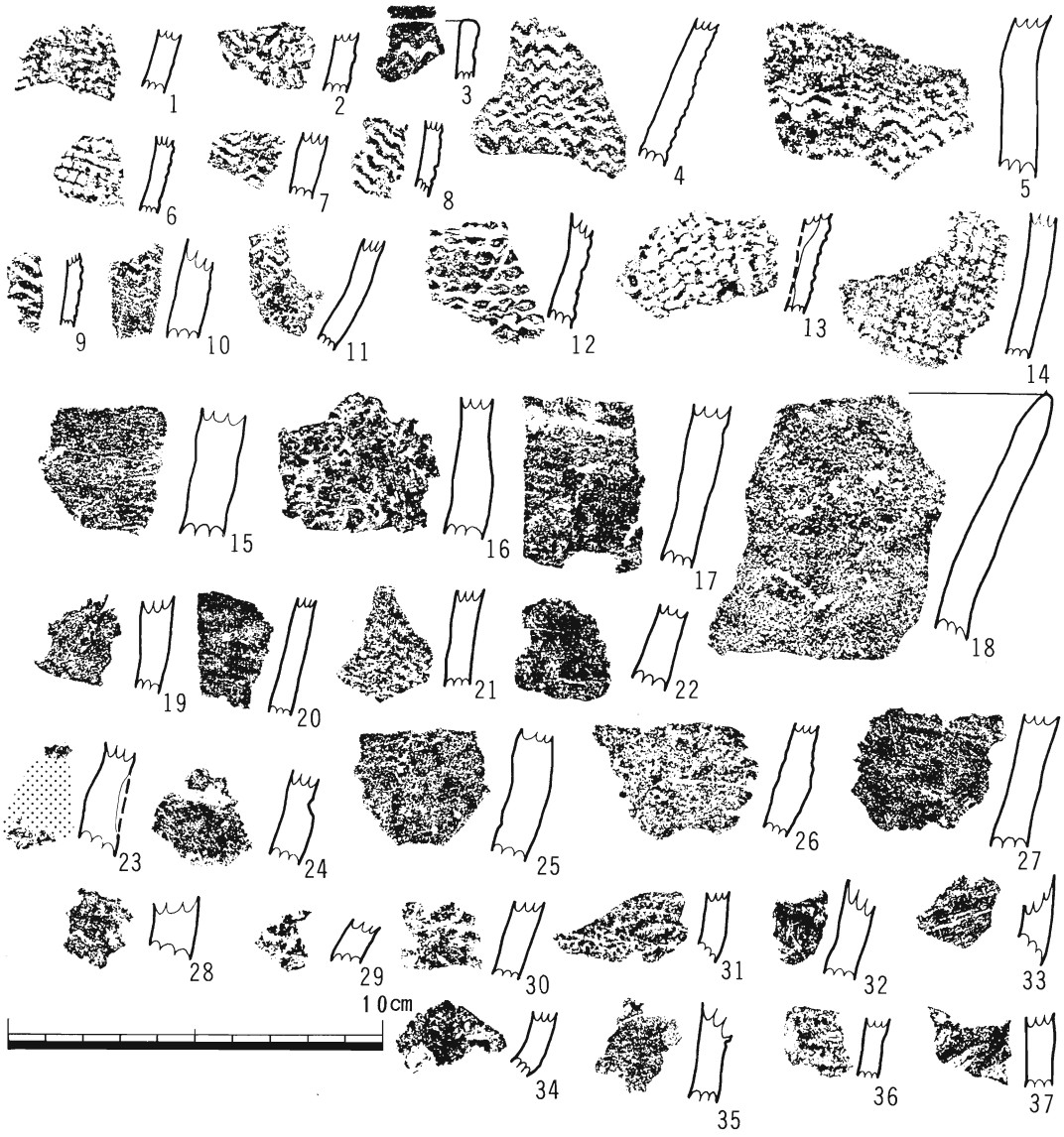
R10区の土坑１からは押型紋土器１点，削器１点，打製石斧１点が出土した。押型紋土器（第10図21）は，楕円紋である。凹部があさく，つぶれているのは，ナゼ調整による摩滅と思われる。きわめて細かい砂を含み，色は淡茶色である。削器（第12図16）は，裏面にふかい階段状の細部調整で凸刃を造る（図版十ノ３）。打面は自然面である。この削器は押型紋土器文化にともなう円形掻器の未製品でもありうる。打製石斧（第13図１）は，上下の両端が折れる。緑色変岩製である。土坑４からは押型紋の小破片１点，石刃状剝片１点，剝片３点が出土した。押型紋土器（第10図20）は山形紋で，山形の凹部と凸部の幅が等しい。１㎜ほどの砂をおおく含み，赤褐色である。石刃状剝片（第10図17）は稜上打撃で，最大長2.7㎝，最大幅1.6㎝である。平面が台形の剝片（第10図16）は単打面で，主剝離面まで石に気泡が入っており，石質がきわめてわるい。ほかの剝片は，第10図18が点状打面の薄いもの，第10図19は基部が折れている。R10区では，そのほか小穴５からは剝片１点，土坑６からは剝片２点，土坑７からは土器片１点が出土したが，小さすぎて特徴がない。

以上の遺構よりあたらしく，また下文で述べる第２黒色土の包含層の上に掘り込まれた土坑から出土した遺物がある。新旧関係が前後するが，ここで紹介しておく。この中層の遺構では，R14区の西北隅の土坑ｃから無紋土器１点，石鏃１点，剝片１点が出土した。無紋土器（第10図１）は口縁の外反する部分で，磨滅がいちじるしい。石鏃（第12図１）は双脚の極凹基で，中央横断面はアーモンド形である。きわめて精巧な造りである。全長2.7㎝，最大幅1.4㎝，重量1.0ｇを測る。剝片（第10図２）は，点打面のこぶりなものである。

ｂ．包含層の土器

包含層の全面にわたり遺物が出土し，集中箇所はなかった（図版七）。ただ土器にかんしてはR10区の西北に小規模なまとまりがある。押型紋は山形紋（第11図１～５，７～11）がおおく，ついで格子目紋（第11図６，13，14）の順で，楕円紋はただ１例（第11図12）しかない。

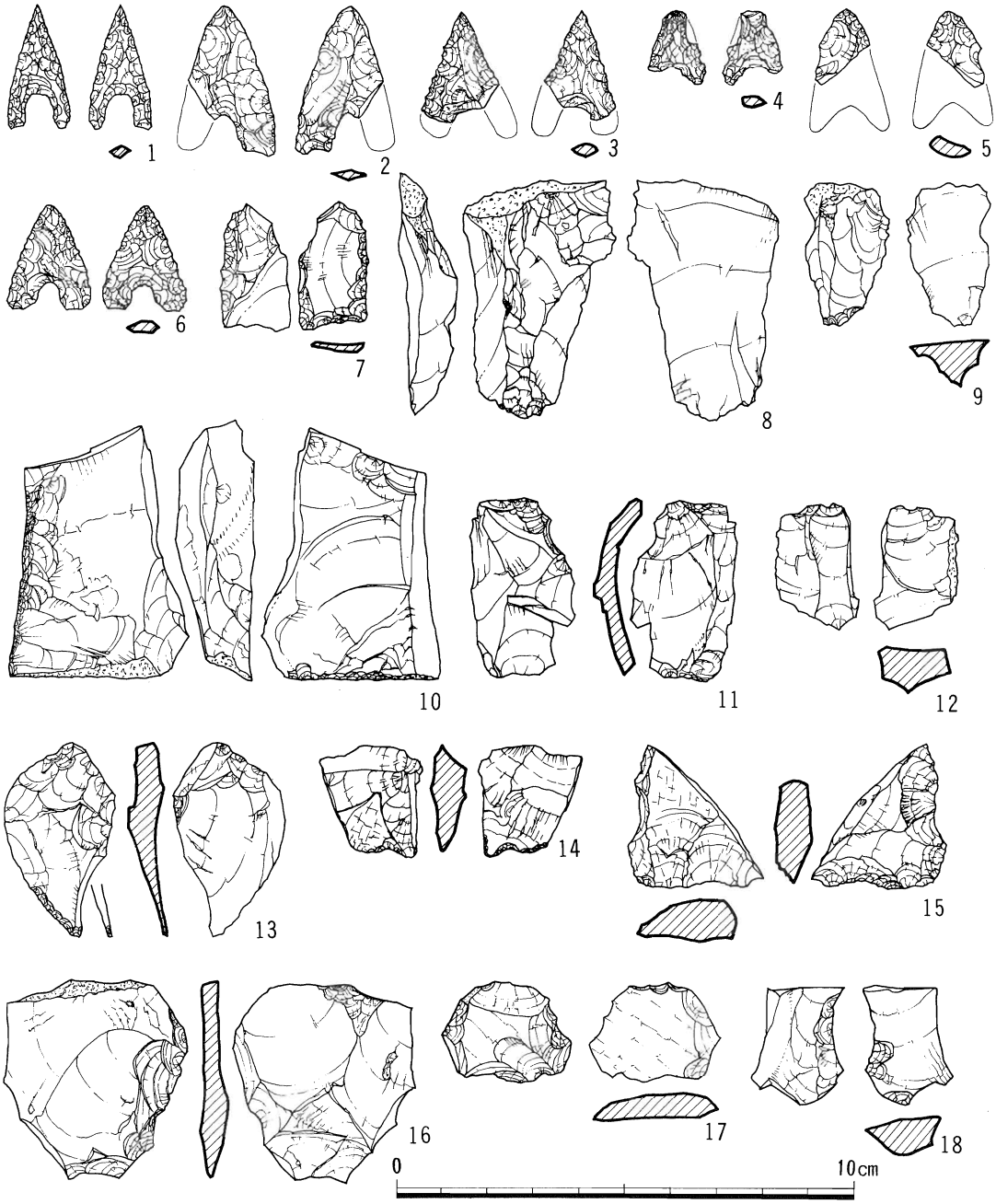
押型紋ではっきり厚手と呼べるものは，１点の山形紋（第11図５）で，器壁が12㎜を算する。山形の回転方向は横で，その上に無紋部がある。しかし原体の端部の押捺がはっきりせず，外面はやや摩滅する。帯状施紋であれば興味ふかいが，断定をさしひかえる。色は黄褐色で，素地に砂が混じる。第11図３は，この層から出土した唯一の口縁である。外面は山形紋のうえをナゼる。内面には紋様帯をもたない。５㎜ほどの薄手である。小破片の山形紋（第11図１，２）は，押捺が鮮明でない。これは施紋後にナゼられたためで，凹部がオバーハングしている。格子目紋のうち１例（第11図６）はきわめて薄手で，４㎜を測る。目は正方形である。第11図14の目も正方形である。第11図13の格子目は長方形であるが，押捺が重複する。内壁は剝落している。楕円紋（第11図12）は，山形との折衷とも言うべき形で楕円形が独立せずに連なってい



第11図　第２黒色土から出土した土器（1/2）

る。以上の押型紋は第11図４，６が暗褐色であるほかは，黄褐色ないし茶褐色の明るい感じの色調である。

無紋土器は押型紋にくらべて，素地に砂がある。器壁のもっとも厚いもの（第11図25）は14㎜を測り，薄いもの（第11図20）は５㎜を算する。無紋土器には10㎜前後の厚手の破片がおおい。口縁の破片（第11図18）は，端を内外両面からおさえてナゼる。そのため口端がとがる。この個体の素地には，ながく太い繊維が混じっている。ほかにも繊維を混和した無紋土器の破片が２片（第11図17，22）ある。繊維土器の色は，灰褐色である。黄褐色ないし茶褐色の明る



第12図　出土した石器の型式（2/3）

い感じの無紋土器には，繊維を混入したスジが認められない。第11図34は，底部の破片である。無紋土器は，微粉状に自然淘汰された角閃石をふくむ土器とそうでないものとがある。なお，図示できていないけれども，第11図37には格子目紋の端らしきものが１列みえて，ちょうどそ

の部分で破面となる。[2)]

ｃ．包含層の石器

石器はつぎの型式が出土した（第12，13図）。石鏃，楔形石器，掻器，削器，打製石斧，敲石である。そのほか型式として，半月形の削器（第17図４，第20図１）があるかもしれないが，意図的な形態なのか細部調整品がぐうぜん折れたものなのか，わからないので剝片のほうで扱う。

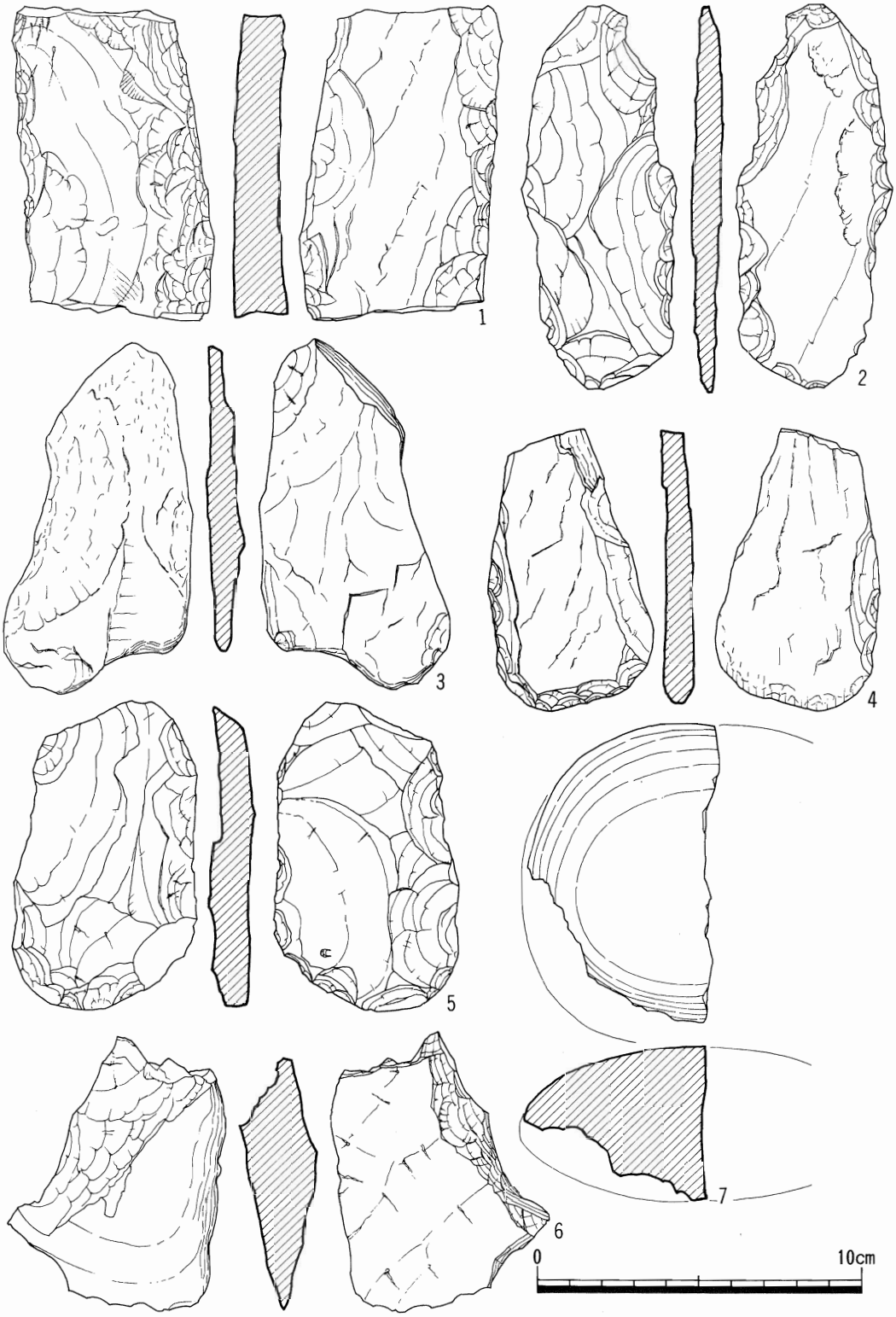
石鏃は，総数７点のうち第２黒色土の包含層からは４点（第12図２～５）が出土した。基部の残るものはすべて凹基である。いずれも造りはきわめて精巧である。R10区から出土した第12図２は，全長3.2㎝を測り，１脚が欠損する（図版八ノ１）。出土した７点の石鏃では最大である。断面は極薄の偏平である。Ｒ９区から出土した第12図３は，両縁とも鋸歯縁の細部調整である。１脚がわずかに，もう１脚は完全に欠損する。中央横断面は半月形である。R14区から出土した第12図４は，脚が非対称である。全長1.4㎝，最大幅1,3㎝を測る。出土した７点の石鏃では最小である。Ｒ９区から出土した第12図５の石鏃は石英製で，尖端がのこる。これは搬入品であろうか。

３点の掻器（第12図８，９，17）が出土した。円刃の第12図８はR11区，第12図９はＯ９区から出土したが，造りがともに似ている。先端は表面に肉厚な自然面をのこし，打面である基端の表面を凸縁に細部調整で亜鋭角の刃づけをする。第12図８の調整は深いが，第12図９は短い。ともに調整幅がせまく，あたかも掻器の退化した型式のような印象をうける。第12図17は円形掻器で，Ｒ８区から出土した。水晶製である。裏面からも平角の調整がくわえられている。外縁は部分的に折れる。

削器２点が，この包含層から出土した。第12図15は平面が三角形で，短い２偏に両面からの細部調整がある。のこりの長辺は折取りによる裁断面であるけれども，外縁を挟み打ちする両端打法ではない。R14区から出土した。第12図18は凹刃削器である。剝片の基端を裏面から折取る。先端は裏面から調整して丸く仕上げるが，折れがある。Ｐ９区から出土した。

３点の楔形石器のうち１点（第12図12）が，この包含層から出土した。平面は板状で，中央横断面は５角形である。両面は，挟み打ちした垂直の剝離面からなる。側縁は自然面と垂直の折れ面からなる。１辺だけピエス・エスキーエに似た刃をもつ。Ｏ９区から出土した。

打製石斧は総数６点のうち，３点（第13図２，３，４）がこの包含層から出土した。第13図２は薄手の打製石斧で，両端ともほとんど摩耗していない。あきらかにいわゆる冠山産ではないけれども，安山岩製である。第11図３は，先端が両面とも摩耗する。上端に自然円礫面をのこす。パチナが発達するが，たぶん安山岩。Ｒ９区から出土した（図版八ノ２）。第13図４は，ちいさな打製石斧で，先端の片面は使用によって摩耗する。上端は折れ面である。緑色変岩製



第13図　打製石斧ほか（1/2）

で，Ｒ８区から出土した。

敲石がＰ９区から１点出土した。握り飯ほどの花崗斑岩製の丸石で，重量は423ｇである。自然礫の両端が損耗し，１端にはふかいひび割れがある。室内作業で抽出したが，文字とおり，自然礫の可能性もある。

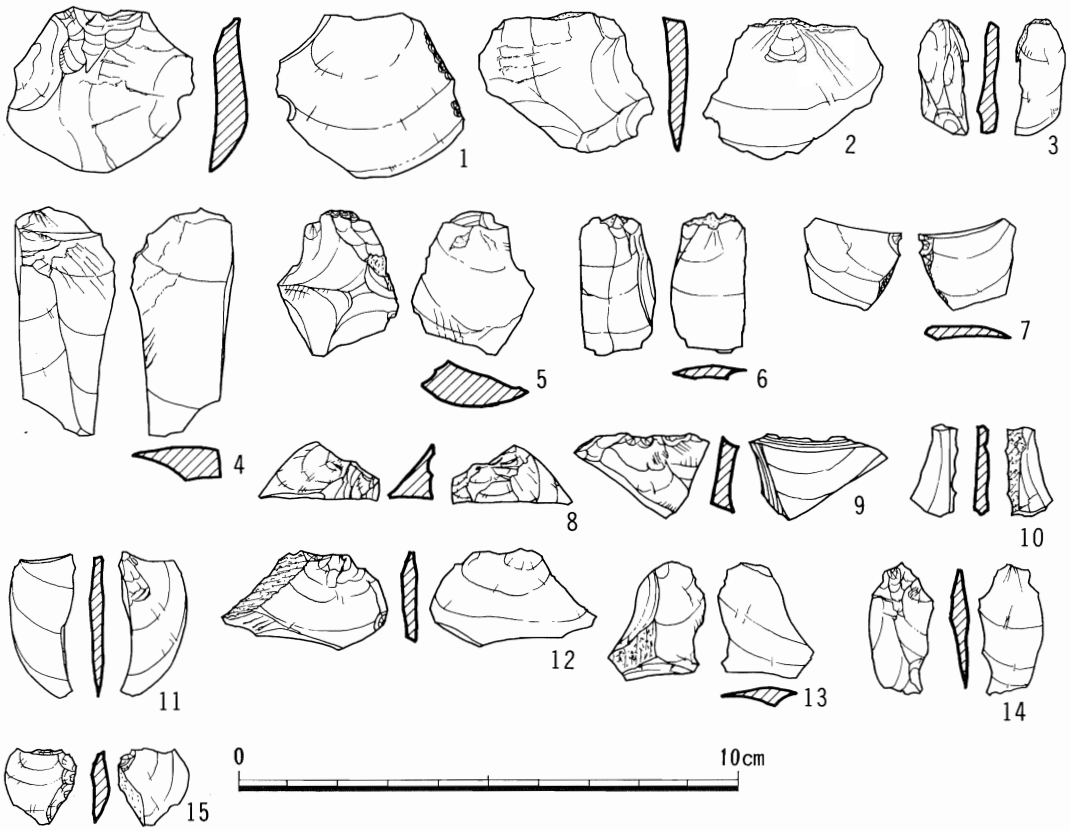
ｄ．包含層の剥片

第２黒色土からは多量の剥片と石核が少量出土した。剥片にはおおきなものがなく，接合関係をじゅうぶん検討しえない。以下，地区ごとに列記する。

Ｏ９区の剥片（図版十五ノ１，第14図）　第14図１は貝殻状の剥片である。基端の表面に非連続・斜角・深い細部調整があるので，打面はない。主剥離面の先端は波状に隆起する。２は平坦な自然面が打面である。表面は先行剥離のおおきな面をもち，うすくて鋭利な剥片である。３の石刃状剥片はせまい自然面が打面である。先端はヒンジで，厚い。４の石刃状剥片は石の目のため主剥離が２面ある。側縁は垂直折れではなく，表から一撃による折取りである。基端の表面にはそれより古いひび割れがあり，打面はない。５は厚手だが石核ではなく，剥片である。いちじるしく裏面に傾斜した単打面をもつ。６の石刃状剥片は，水平な自然面が打面である。表面は先行剥離の稜が右縁によるので，きわめて薄手の仕上がりである。７は裏面の左縁に細部調整をもつ剥片である。細部調整は連続・短形・斜角である。先端と基端は，折れて失われている。８は厚手で，三角形をなす剥片である。自然被損とみられる折れ面がある。９はおもてにネガ面があるが，ほかの面は温度被損で，パチナが濃い。11は基端が折れて打面がない。側縁は垂直割れと思われる。12は，点打面の極めて薄手の剥片である。13も点打面の極めて薄手の剥片である。14の石刃状剥片も点打面で極薄である。15は，この遺跡の石器にはめずらしいチャート製で，色は淡い緑がかった茶色で，透明度がすこしある。表面の基端を短形・連続・斜め角で細部調整する剥片である。打面は水平な自然面であるが，主剥離面にいちじるく傾く。

Ｐ９区の剥片（図版十五ノ２，第15図１～７）　第15図１は円礫を剥がした石刃状剥片である。表面は自然面である。主剥離は先行する単打面から打撃する。打面はいちじるしく裏面に傾き，打撃角が鈍い。２は平面が長方形の薄手の剥片である。基端は折れて，失う。先端は自然面である。３は４角柱状の剥片である。４は横形の剥片である。打面は調整打面で表面に傾く。５は薄手の剥片で，自然面が打面である。６は剥片の先端部で，表面から折取る。７は貝殻状の薄い剥片でる。打面は線状である。

Ｑ９区の剥片（図版十六ノ１，第15図８－26）　第15図８は極薄のきわめて良好な剥片である。主剥離面は平坦で，打面がよくわからない。９は厚手の剥片の先端部である。主剥離面には石の目による段差がある。10の打面は線状である。１側縁は石の目にそった剥離である。11



第14図　第２黒色土Ｏ９区から出土した剝片（2/3）

は薄手の剝片で，主剝離面は波状である。12は点状打面の薄手の剝片である。13は薄い貝殻状の剝片である。打面は粉砕している。14は調整打面をもつ剝片である。15は主剝離のバルブがいちじるしく発達し，捩じれている。16は台形の薄手の剝片である。打面は点状である。17は自然面が打面である。18は石刃状剝片である。基端が折れて打面を失う。19は剝片の基端部で，先端は折れて失う。表面左縁の突起は，主剝離のあとの両面からの孤立した調整による。20は薄手の剝片で，線状打面である。21も線状打面のちいさい剝片である。22は薄い台形の剝片で，せまい単打面をもつ。23は自然面を打面とする貝殻状の剝片である。24は，チャート製の極薄の剝片である。基端は折れて，失う。単先端の水平縁は自然面である。25の貝殻状剝片は，調整打面をもつ。打面は裏面に傾く。26の貝殻状剝片は２面調整の打面をもつ。

Ｒ８区の剝片（図版十六ノ２，第16図）　第16図１はこの遺跡ではおおぶりな剝片である，自然面を打面とし，主剝離面には階段状の段差がある。剝離面の先端は波状になって，縁が丸くなる（図版十一ノ４）。表面の先行剝離も波状面があるから，石の目が原因である。２は調整打面をもつ横形の剝片である。打面再生品かもしれない。３は石刃状剝片で，調整打面をも

つ。４は単打面の薄手の剝片である。先端は折れではなく，ヒンジである。５は稜上を打撃した剝片である。６は自然面を打面とする薄手の剝片である。先端は折れ面である。７は自然面が打面である。１側縁は垂直折れの可能性がある。

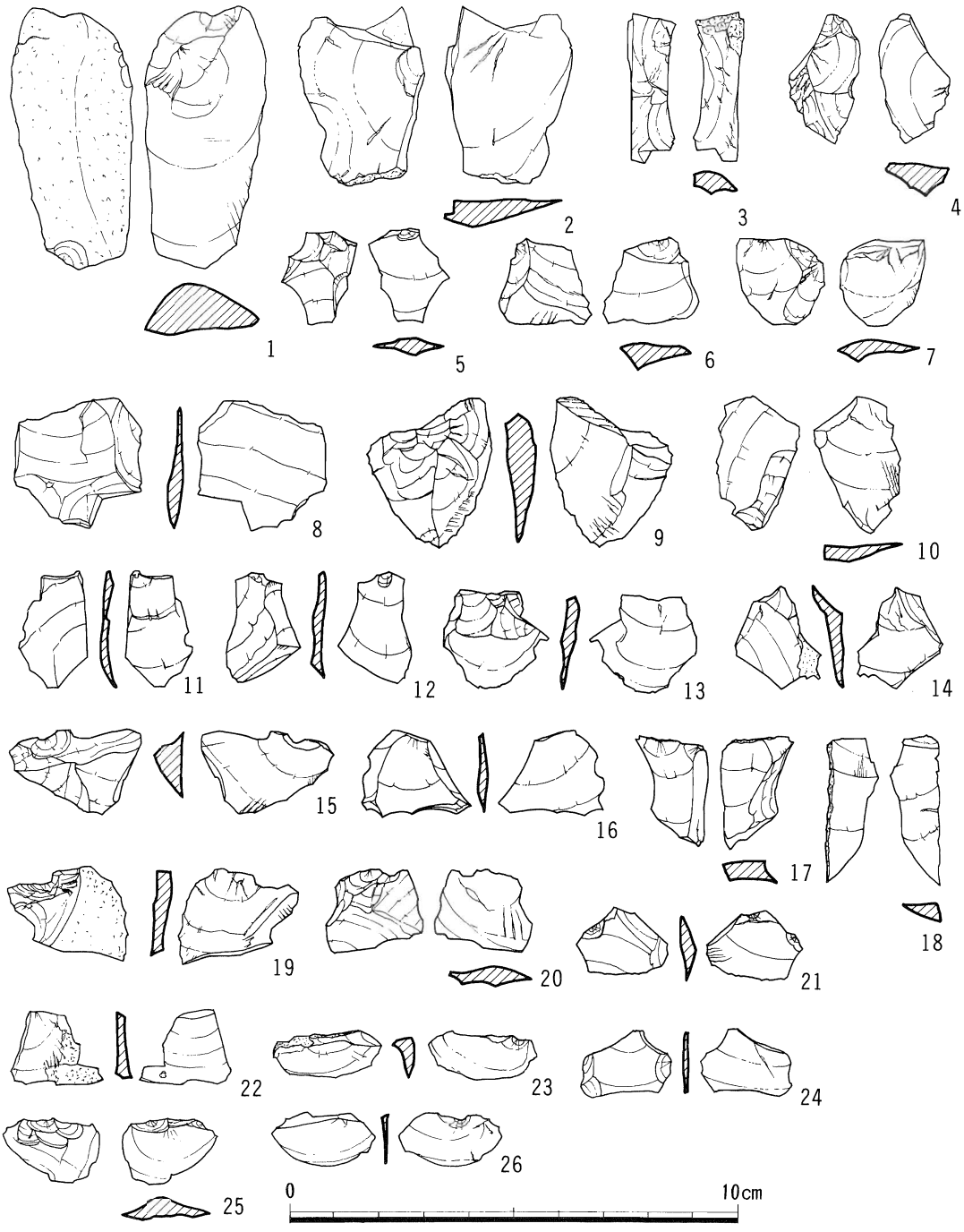
Ｒ９区の剝片（図版十七ノ１，第17図）　１の石刃は線上打面である。表面に両端打撃の剝離面がある。表面左縁は表裏面に直交する先行剝離面である。２の打面は折れて，失われている。剝片の先端部分にあ，り，主剝離面は波状となる。３は石核である。５面体からなる。縞の入った石材で，縞目に対して斜めに進行する剝離は，フィシャーの発達が著しい。４の細部調整剝片は半円形に折れているから，円形掻器の欠損品かも知れな。打面はない。表面の調整は部分的で，斜角・深形である。のこりは石の目の割れ面である。裏面の調整は平角，魚鱗状でたぶん連続する。５は厚いけれども残核ではなく，剝片である。打面は単打面である。表も裏も器軸が平行してく字状にねじれるのは，石材の質が原因であろう。６は，打面が表面から折られて残らないが，ふるい主剝離面がのこる。７は単打面の横形剝片である。階段状剝離のポジの剝片である。８の石刃状剝片は稜上打面である。器軸が，ねじれている。９は自然面が打面である。表面の左縁は垂直折れである。10は線上打面である。先端は先行するふるい折れ面である。11の石刃状剝片は上と下で折れている。12は折れて打面が欠損する。パチナが発達する。

R10区の剝片（図版十七ノ２，第18図）　第18図１の剝片は，基端と先端が折れている。また，１側縁も表面から折取る。２は基端が折れ，打面が失われている。パチナは発達する。３は自然面の稜上を打面とする。４は薄手の剝片の先端のヒンジの部分である。裏面から折る。５は，先端を欠く剝片である。打撃面はせまい単打面である。６は打面と表面が自然面である。７は粉砕打面だが，剝片が厚い。８は薄手の剝片の先端である。

R11・12・13区の剝片（図版十七ノ２下段，第19図）　この３つの調査区は第２黒色土の上面で掘削を中止したので，表面にあさくめりこんだ遺物を採集したにすぎない。

第19図１は自然面打面で，先端が波状にうねる。２は柱状の剝片で，先端と基端は折れて失われている。３は貝殻状の剝片で，点打面である。表面の基端に細かく何回も叩いた打撃痕跡がある。４は，石の目で捩じれた剝片となっている。折れ面が多い。以上はR11区から出土した。５は，基端が折れて打面がない。主剝離面の先端には階段状の段差がある。R13区から出土した。６は三角錐状の剝片で，自然被損と折れ面からなる。７は表面に，石の目による剝離面がある。以上はＲ12区から出土した。

R14区の剝片（第20図）　１は半円形の細部調整剝片である。第17図４の剝片が似ていて，意図的な型式かもしれない。剝片の先端を折取ったもので，打点を失う。主剝離面に細部調整がある。凸縁の刃部は，侵形・薄形の調整による造りだしである。２は柱状の剝片で，主剝離



第15図　第２黒色土Ｐ９区（１～７）とＱ９区（８～26）から出土した剝片（2/3）

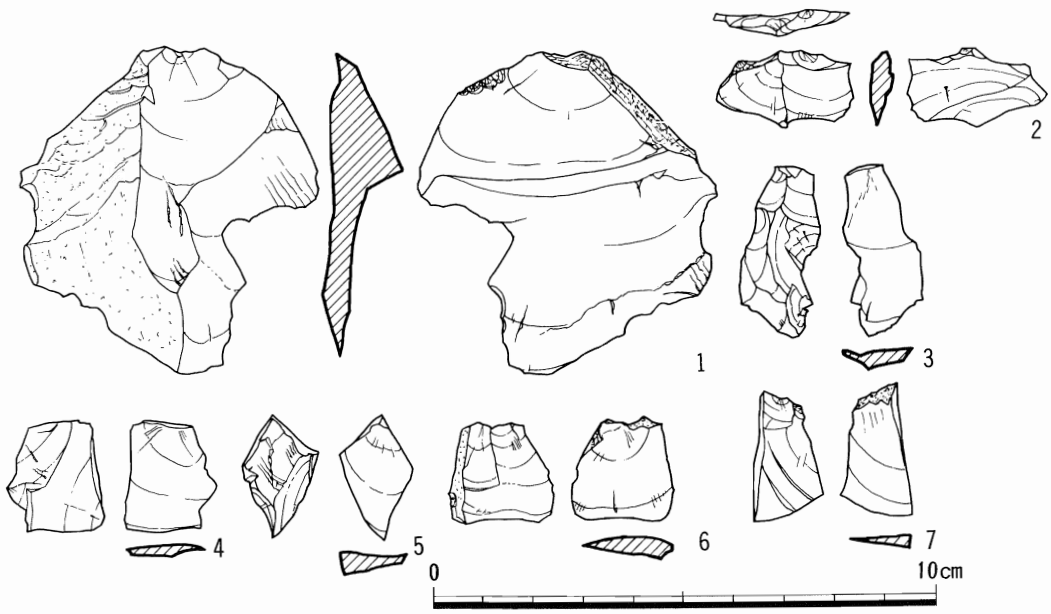
面が２面からなる。両側縁は両端打撃である。楔形石器のスポールか。３は極薄の剝片で，先端と基端が折れる。４は点状打面の，薄いちいさい剝片である。５は線条打面で，側縁に自然面がある。

４．第１黄色土から出土した遺物

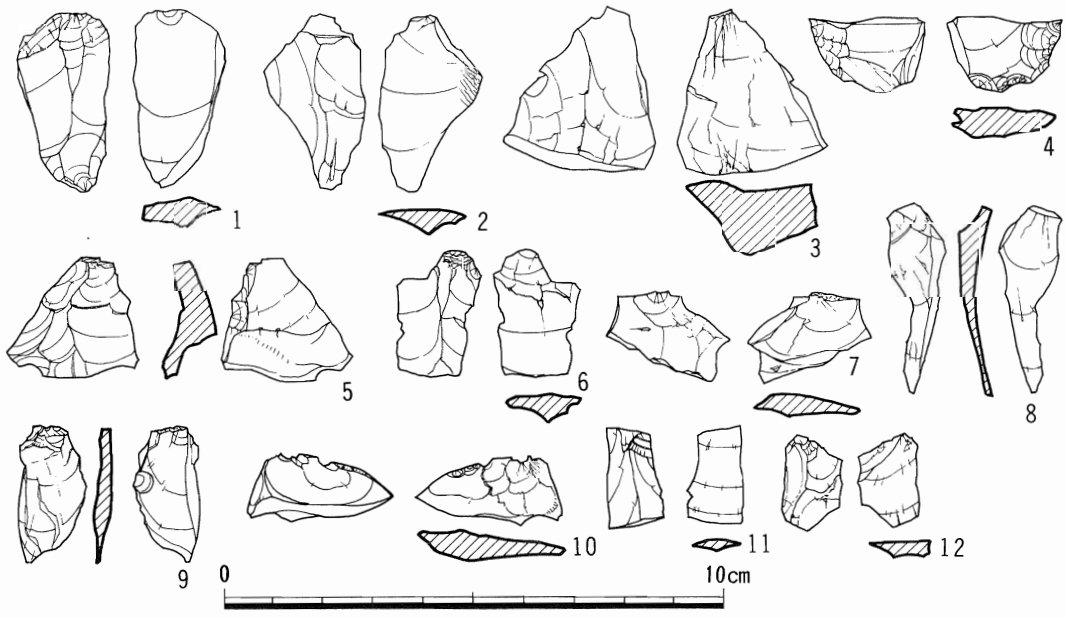
第１黄色土の層厚は，第２黒色土よりもあついけれども，出土した遺物の量では少ない。遺物は全面にわたり出土した。しかし，東西トレンチの東半では包含層がなくなるので，とうぜん遺物の分布がない。この包含層は北側にあつく堆積するから，遺物も北側に多くなるはずであるけれども，調査区内ではそうした傾向はない。南北トレンチの南に石器遺物がおおく，北に土器がおおい（図版八ノ６）。この現象は人為的な結果，もっとも起こりうる。すなわち人間の活動面が包含層のなかに介在した場合である。しかし，掘削した感じでは，生活址があるとは思えず，包含層として一括した。ただ，R11区で人頭大の石が包含層のなかばに並ぶのは不自然な気がする。たぶん集石炉があって，それが水に流されたものであろう。

土器　押型紋と無紋土器が出土した（図版十一ノ１，第21図）。押型紋土器はほとんどが山形紋である。第21図１と２は同１個体で，３も無紋だがその個体である。R13区から出土した。これらは内壁を削って仕上げており，横方向にこまかい線条痕がつく。表面の山形紋の走行は横方向である。色は外面が暗黒褐色，内面が茶褐色である。小破片で，器壁が窪んで原体が当たらなかった部分なのかもしれないが，第21図３が無紋であることを注意しておく。R14区から出土した第21図８もその個体である可能性がきわめてたかい。鋭角的な山形，器壁の厚さ，内面の削り調整がおなじである。ただし，外面は灰褐色，内面は赤褐色で，内壁の削り方があらい。第21図４は胎土はよいが焼きがわるく，摩滅している。内面の紋様帯の原体の端は斜めの切り口である。第21図６はこまかい山形文で，山の頂部がまるい。さらにそのうえをナゼるために図紋がつぶれている。内面はナゼ調整である。１点（第21図５）だけ，平行刻みのたいへん特殊な押型紋がある。内面に平行短線がのこるので口縁ちかくの断片であるが，口端は欠損する。内外面の平行短線は表面では凹凸幅がひとしく，裏面では凹部の幅が凸部よりひろい。表面は押型紋のうえにナゼ風の条痕を下から上に付加する。R11区から出土した（図版八ノ４）。

無紋土器で外面の調整のわかるものは，すべてナゼである。内壁に指の凹凸がみられるのは，第21図10，11，17，23，22，16である。器壁のもっとも厚いもので14㎜（第21図20），薄いもの（第21図13）で８㎜であるが，９割がたの無紋土器は並厚の器壁で10㎜ぐらいを算する。口縁の部分の２片はこの層では薄手の部類で，先端を尖らすもの（第21図13）とまるく造るもの



第16図　第２黒色土Ｒ８区から出土した剝片（2/3）



第17図　第２黒色土Ｒ９区から出土した剝片（2/3）

（第21図14）とがある。第21図13は素地に砂がおおいが，第21図14は砂のすくない良質な胎土である。第21図11には少量の繊維がまじる。第21図24の外面には，小動物の噛み跡とおぼしき傷がある。

石器　第１黄色土から出土した石器の型式は，楔形石器２点と打製石斧１点だけである。

楔形石器の第12図10は平面長方形で，板のように４偏に小口となる面がある。そのうち短偏の１面が自然面である。ほかの面は，挟み打ちした垂直の折取り面である。面が交わる８つの稜のうち，２偏に連続した階段状の細部調整がある。この細部調整（図版十ノ４）は肉眼でもはげしい使用の痕跡が混じっていることがわかる。R10区から出土した（図版八ノ３）。第12図11の楔形石器は，上端と下端の２短偏が面ではなく，刃縁である。つぶれたような魚鱗状の細部調整が両面にある。両側面は両端打法による折れ面である。石の目のため，表裏両面にたいして折取り面がはすに捩じれている。Q９区から出土した。

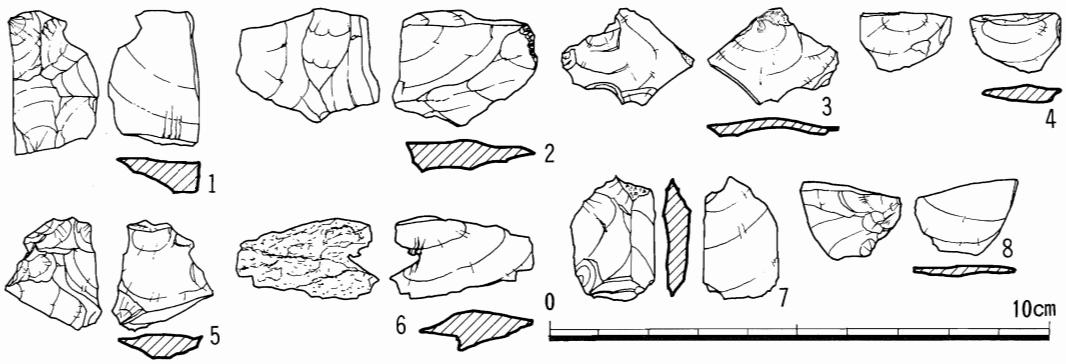
打製石斧（第13図５）は，厚く重量のある端部のほうを刃先にする。先端には両面からの摩耗がある。いわゆる冠山産ではないけれども，安山岩製である。Q９区から出土した。

剝片（図版十八ノ１，第22図）　第22図１はおおきな剝片の先端を正方形に折取たものである。折取りは表面からの打撃である。２は厚手の剝片の一部で，主剝離面はリングよりもフィシャーが発達する。温度被損の剝離面が側縁で，対抗縁は折れ面である。３は厚手の剝片の先端を表面から折取ったものである。４は調整打面で，表面に自然面がある。５は貝殻状の横形剝片である。主剝離は，裏面に傾く単打面の打撃で，剝離角がきわめて鈍い。表面のステップは主剝離の前か後なのかわからない。６は薄い長方形の剝片で，細部調整の縁部を剝離したものである。７の石材は安山岩であるけれども，冠山産かどうかわからない。白味があって，粉っぽい感じである。石の目にそった両面の剝離を折ったものである。８は三角形の薄い剝片である。表面にある先行剝離面３面のうち１面のパチナが発達する。９は，細長い剝片の先端である。10は点状打面である。11は厚い剝片の先端である。裏面から折取る。

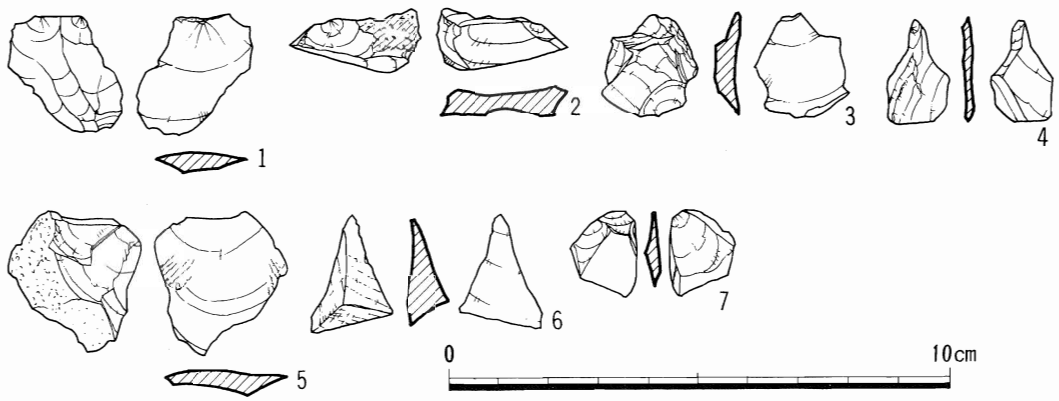
５．第１黒色土から出土した遺物

第１黒色土は表土を構成する。しかし，削除されている調査区がおおい。P９区東半とO９区の第１黒色土は堆積の層位では第２黒色土であるけれども，現代の汚染があるので表土としてここで扱う。

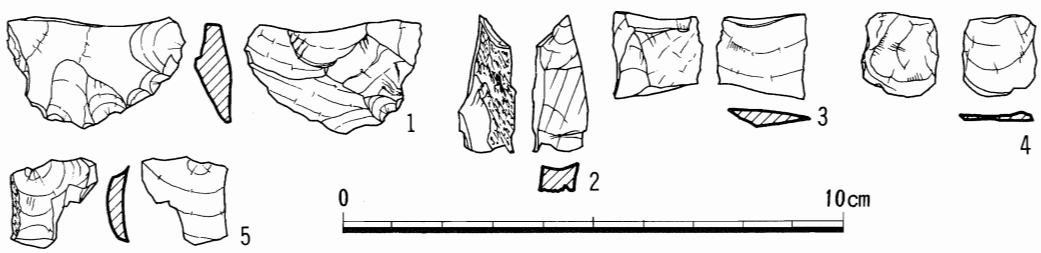
押型紋と無紋土器（図版十一ノ２，第24図）が少量出土したほか，現代陶器が混在した。土器は１点（第24図１）をのぞいて，すべて摩滅している。押型紋では山形紋（第24図２）と格子目紋（第24図１，６）がある。とくに第24図１の器壁は６㎜を測り，薄い。無紋土器は10㎜



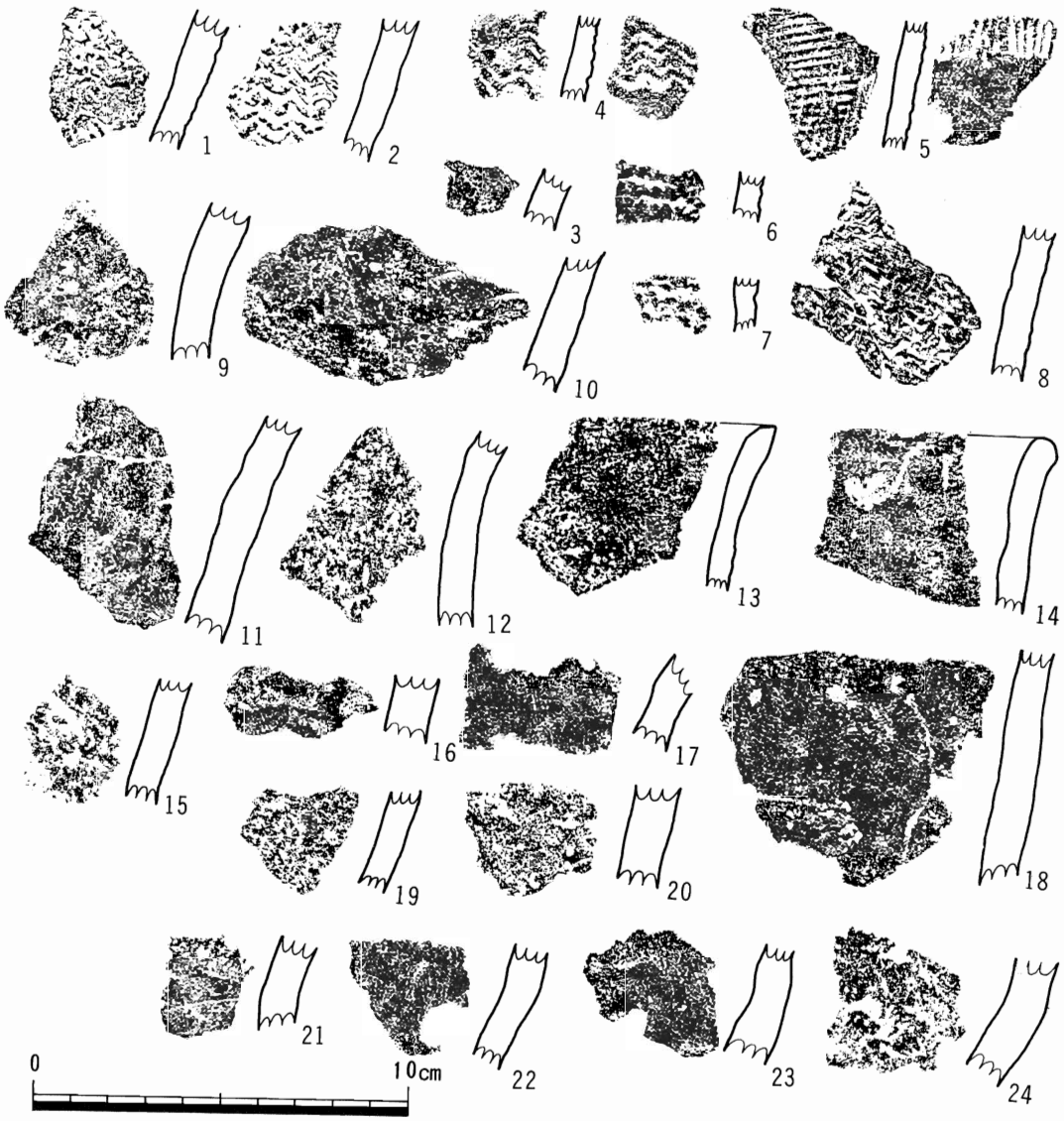
第18図　第２黒色土Ｒ10区から出土した剥片（2/3）



第19図　第２黒色土Ｒ11区（１～４），Ｒ12区（６,７），Ｒ13区（５）から出土した剥片(2/3)



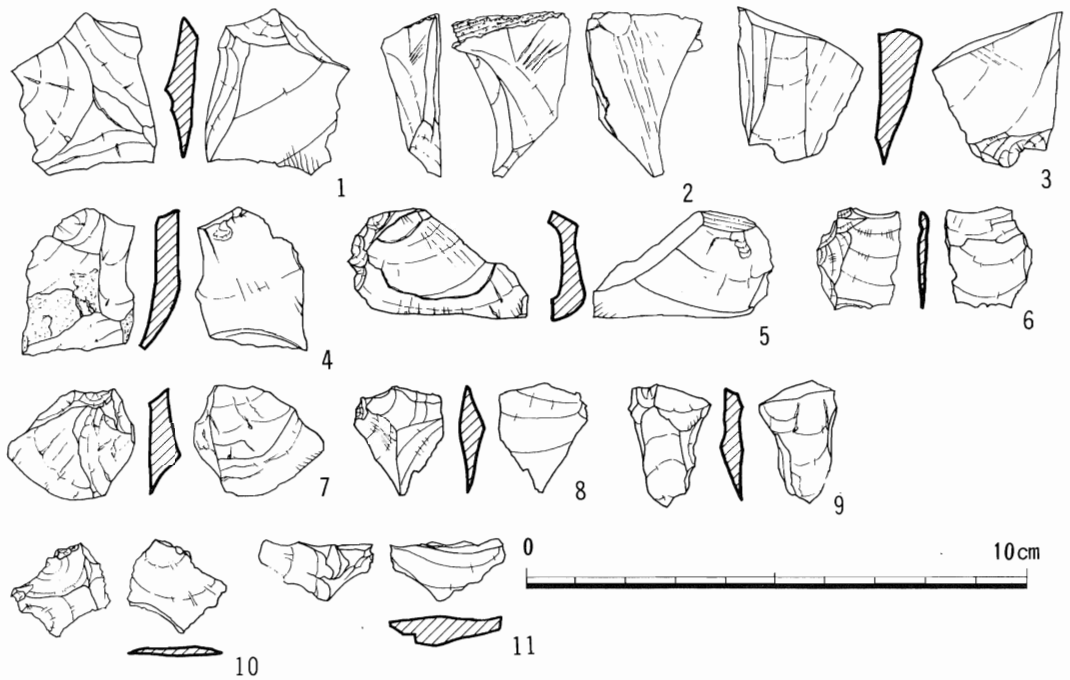
第20図　第２黒色土Ｒ14区から出土した剥片（2/3）



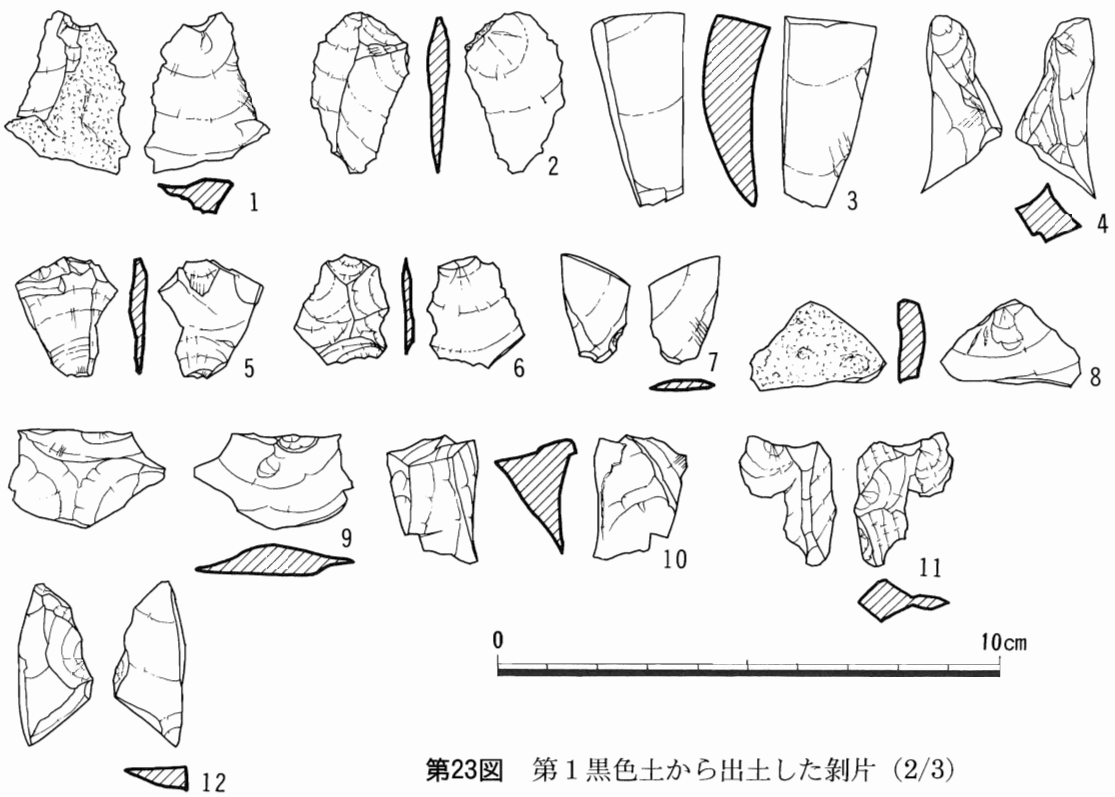
第21図　第１黄色土から出土した土器（1/2）

前後の並厚のものである。この層でも無紋の土器の壁のほうが押型紋土器よりも厚い。口縁が厚く造られる破片（第24図５）は，端部をけずって面取りする。この無紋土器の破片にはほとんど砂が含まれておらず，外面にはあさい条痕がある。この層の押型紋と無紋土器の素地にはまず砂がある。

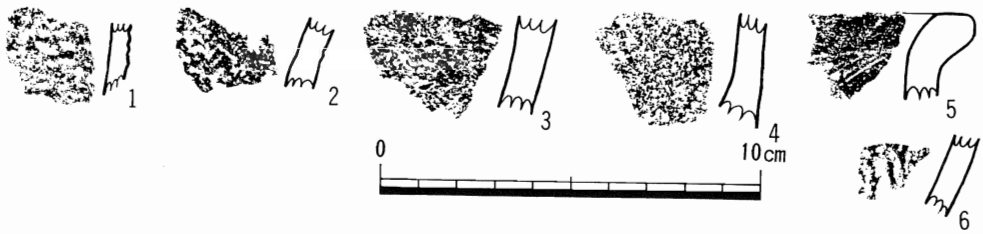
第１黒色土から出土した石器の型式は，石鏃１点，石錐１点ならびに石鏃の未成品が１点である。石鏃（第12図６）は，基辺が極凹の双脚鏃で，中央横断面は半月形である。全長2.2cm，



第22図　第１黄色土から出土した剝片（2/3）



第23図　第１黒色土から出土した剝片（2/3）



第24図　第１黒色土から出土した土器（1/2）

最大幅1.8cm，重量0.3ｇを測る。R14区から出土した。石鏃の未成品（第12図７）とおもわれるものは，薄い三角形の剝片で，周縁に連続細部調整がある。細部調整は表面では浅くふかいが，裏面は短い。R14区から出土した。石錐（第12図14）は，四角形の剝片の角に４㎜ほどのみじかい軸状の尖頭を造りだしものである。軸は表面，裏面と１側面の３面からなり，表裏に短い細部調整をする。つまみの上端は，側面からの折取り面である。R12区から出土した。

剝片（図版十八ノ２，第23図）　第23図１は，表面のほとんどが自然面である。線状の打面で主剝離面の先端は波状である。２は自然面打面で，打撃軸と剝離の長軸がずれている。うすでの剝片である。３は四角柱状の石核である。温度被損でできた原材の基端を折取ったようにみえる。４はねじれた剝片で，打面調整品かもしれない。５は薄手の剝片で，両端打撃である。６も薄手の剝片で，稜上から打撃する。打面は裏面に傾く。７は基端が折れていて打面がない。８は自然面が打面である。先端は折れる。９は貝殻状の剝片で，線状の打面をもつ。10は三角柱状の石核である。11は原材としては希な水晶製である（図版十一ノ３）。残核とおもわれる。多方向からの剝離は，うすい剝片をとる意図よりも結晶で素材が硬く割れにくかったためであろう。12は大型の剝片が折れたものである。

６．表　採　品

発掘調査中に土器片と剝片を若干ならびに打製石斧１点，磨石１点を表面採集した。打製石斧（第13図６）は自然礫の半截品で，主剝離面は石の目のようであり，自然被損かもしれない。主剝離は自然面の厚みを打ち欠いて，器体をうすくしている。先端の刃は磨耗していない。パチナの発達がいちじるしい。いわゆる冠山産ではないけれども，安山岩製である。磨石（第13図７）は発掘の癈土から採集したが，自然礫かもしれない。ふるくから半欠したとみえ，全面，粉のようなパチナでおおわれる。敲打痕跡はない。安山岩製である。

7．層位との比較

上ノ原遺跡は押型紋土器文化としては，開地遺跡としてきわめてまれな連続層位をもつ。層位ごとの遺物の内容は上文のごとくである。包含層は4層にわたるが，最上層は表土をかねるので，第1黄色土が上層，第1黒色土が中層，第2黄色土が下層の，結極3層の自然現象の重複が信頼できる分期の基準となる。3層のいずれからも押型紋土器が出土し，無紋土器がこれに共伴した。また表面採集品も，すべて押型紋土器の関連遺物であって，その前後にも人為的な痕跡がない。すなわち，この遺跡はきわめて短期間の居住地である。

土器はちいさな破片ばかりで，完形に復元できるものはない。しかし包含層が明確に3分できるから，入手資料が量の分野でおおければ，こんご型式の細別的研究には良好な成果がえられるであろう。

（中村友博）

注

1）山崎純男「九州地方における押型文文化の諸問題」（帝塚山考古学研究所『縄紋早期を考える』，1988年）413ページ。山崎氏はちかくの深原遺跡とひかくして，年代とはかかわらない地域集団の差ととらえる

2）格子目紋のほかに，可能性として脈肋のある貝殻の腹縁の押捺紋がありうるが，ようするにわからない。太田正康「上福万遺跡」（『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第一遺跡・石州府古墳群』，鳥取県教育文化財団，1985年）挿図140。

第5章　ま　と　め

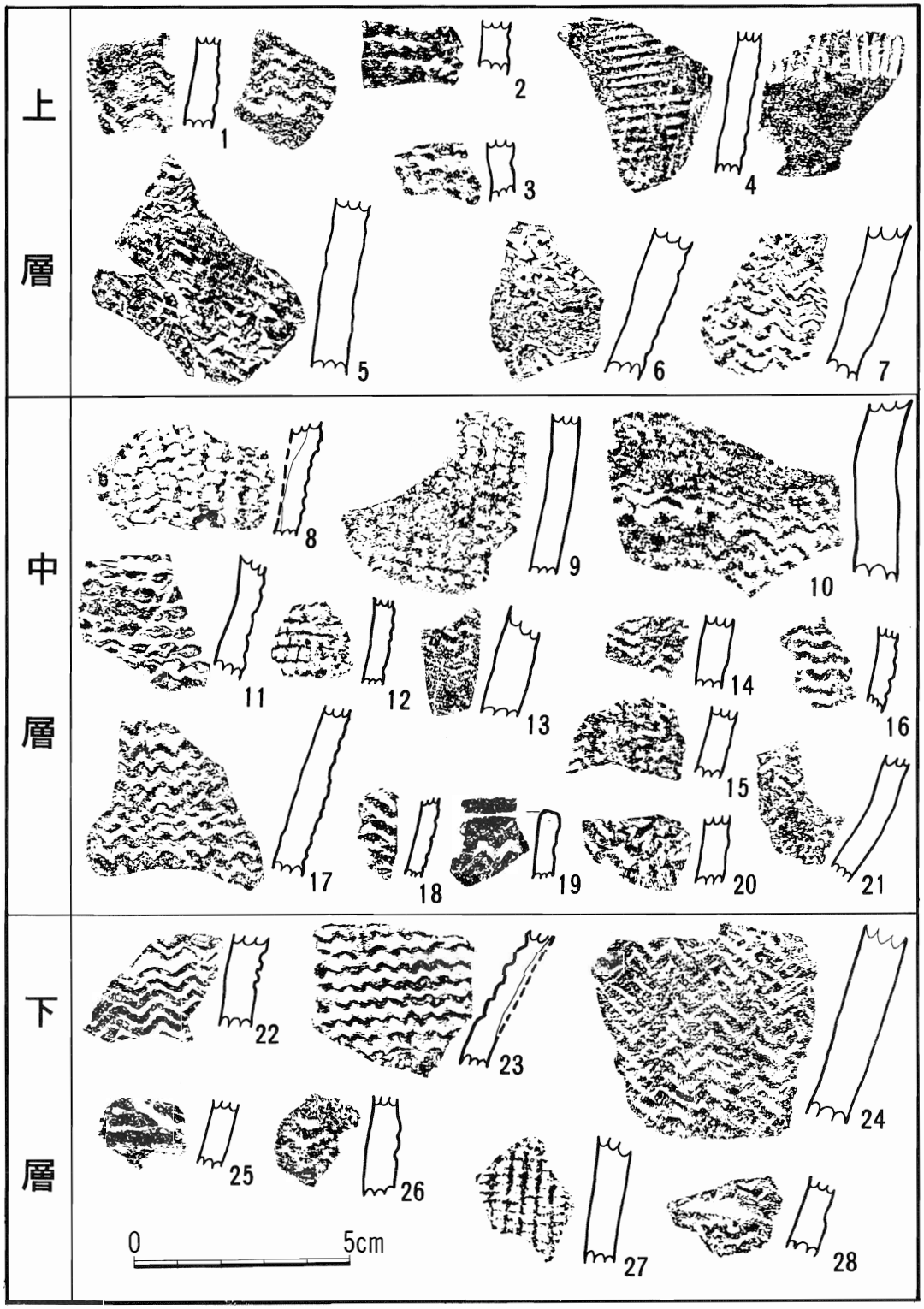
1．土器について

この遺跡から出土した土器はすべて押型紋とそれに共伴する無紋土器である。中国・四国地方の既成の細別型式では，縄紋早期の黄島式土器にあたる。この型式以後の押型紋土器である高山寺式の特徴は皆無である。また，初期の押型紋土器の特徴であるネガティヴな連続圧痕もない。黄島式土器の年代は，放射性炭素年代測定法では8,393±350年前（M－237）の計測値がでているので，参考にすることができる。

上ノ原遺跡の押型紋土器と黄島式の標式遺跡である黄島貝塚の土器はぴったり一致して瓜二つというわけではない。黄島貝塚にあって，上ノ原遺跡にないものがある。たとえば撚糸紋の土器である。しかし撚糸紋土器は押型紋土器にわずかな量しか伴わないものだから，上ノ原遺跡のように発掘面積がせまく土器の量がすくない場合には，その相違を比較することはできない。いっぽう黄島貝塚から相当量が出土する楕円紋の押型紋が上ノ原遺跡では極少で，山形紋がおおい。この事実は，上ノ原遺跡の土器を閲覧いただいた中越利夫氏によって御注意いただいたもので，いわゆる黄島式を広義にとらえた場合のふるい様相であろうというのが氏の評価であった。

遺跡は不整合面によって明瞭に上中下の3層に分層できるので，押型紋土器を層別の一覧表に編成してみた（第25図）。資料の数がすくないこともあって，層位を基準に土器を編年を細分することはできない。しいて言えば，波の長い山形紋（第25図22）が最下層から出土した事実である。しかし鋭角的な山形紋も最下層から出土している。むしろ，第2黄色土，第2黒色土，第1黄色土の3層はきわめて短期間，すなわち土器型式の細別1型式の時間内に堆積したと今回の発掘からは推測できる。

山形紋は，施紋の方向がだいたいわかる。判定できる山形紋は，原体を横に転がしたもので，縦方向とはっきりわかるものはない。格子目紋にかんしては，原体の移動方向がわからない。はっきり原体を縦方向に回転した押型紋は，平行短線の図紋が1例（第21図5，第25図4）ある。そもそも平行短線を器表に付することは，異常であるから，これはたいへん特殊な孤例である。しかし，特殊であるために年代交差の遺物としては独特の意義がある。外面に平行短線を回転によって施紋するこの型式は，長野県飯田市立野遺跡では「長方形格子目文」と報告されており，内面紋様帯こそないが口縁部の破片[1)]はたいへん酷似する。立野遺跡の押型紋土器を立野式と命名する研究者はかなりおり，長野県飯島町赤坂遺跡[2)]ならびに岐阜県高山市糠塚遺跡



第25図　層位分けした押型紋土器（2/3）

から出土した押型紋土器のなかにも，たしかにこの土器[3]が混じっており，この2遺跡のほかの土器も立野遺跡の土器とよく一致する。近畿地方では，大阪府東大阪市神並遺跡の「Ⅱ－B2群」ないし「Ⅱ－B4群」の1部[4]と奈良県山添村大川遺跡の「格子目文5[5]」にいわゆる立野式の長方形格子目紋と近似した土器があるけれども，口縁になめの刻目短線があって，立野式とまったくおなじ土器ではない。すなわち，黄島式のふるい段階は，中部地方のいわゆる立野式と同時か，近接した年代で，その中間の近畿地方では神並遺跡で代表される神宮寺式とやや類縁性がある。中国地方にも黄島式以前に島根県瑞穂町堀田上遺跡[6]のように神宮寺式が分布する事実を重視するならば，神宮寺式の直後に黄島式のふるい段階を位置づけて，立野式と同時代とみなすのがよい。おおくの論者は神宮寺式と立野式の同時性を主張している[7]けれども，神宮寺式に顕著な口端のはすの刻目列が立野遺跡の押型紋土器にはない事実を無視して，拡大解釈した立野式をもって神宮寺式と並行させているのである。神宮寺式と同時代のいわゆる立野式は，立野式の祖型にほかならない。

上ノ原遺跡の押型紋土器に，九州方面の要素を適格に抽出することは，今後の課題である。剝落した部分があってよくわからないけれども，どうも口縁の外面を無地にする押型紋土器（第12図4）がある。口外面が無紋の押型紋土器は，福岡県柏原遺跡で類型的な存在であり[8]，大分県菅無田遺跡でも報告者がⅡf類として狭義の早水台式の主体とみなした土器[9]がそうである。上ノ原遺跡において，黄島式のような薄手の土器とともに並厚の器壁で，鋭角的な山形紋がまじるのは九州地方の影響かどうかも今後問題となろう。

おなじく漠然とした問題に，押型紋の帯状施紋の評価がある。上ノ原遺跡の押型紋土器には，断言するほど明確ではないけれども帯状施紋が混在している気配がある。帯状施紋の押型紋は，川原田式として九州地方で最古の押型紋土器に編年されている[10]けれども，全面施紋の押型紋土器が共伴するのではないだろうか。と言うよりも，むしろ理窟のうえでは，九州地方で最古の押型紋土器は全面施紋する類型となるはずである。なぜなら，中部山岳地帯の帯状施紋をもつ沢式・樋沢式ならびに細久保式と近畿・中国地方で同時代の押型紋土器は，いずれを並行させるにせよ全面施紋の押型紋を主体とする遺跡しか実在していない。中間地帯を飛び越えて，九州で帯状施紋が単独で再現される必然性はないからである。

今回の発掘は，面積もせまく入手した土器の量がすくないので，なにも断定的なことは言えないけれども，発掘の面積をふやせば今後上記の課題に接近できるであろう。

2．石器について

上ノ原遺跡の石器にかんしては，土器とことなり研究に寄与することがあろうと思い，剝片

をできるだけ収録した。石器の型式にかんしては，まず種類のすくないことが注目される。たとえば，博多平野や大分県内陸の押型紋文化は削器，尖頭状石器，礫器，石匙，環状石器などの型式の種類がおおい。いっぽう上ノ原遺跡では楔形石器が顕著であり，細部調整をする剝片もすくない。この現象は楔形石器の機能の問題にかかわるのではないかとみられるけれども，いまは解答が引き出せない。

上ノ原遺跡で顕著なもう１つの型式は打製石斧である。上ノ原遺跡の打製石斧は，薄手であり，分厚くない。打製石斧は，ジネンジョなどの根茎類を採掘する掘り棒の先に付けた刃先なのか，落とし穴猟の掘削具なのかはよくわからないが，一般には掘り棒としての用途が想定されており[11]，縄紋早期の生業にかかわる遺物である。押型紋土器に打製石斧がともなう事例はまだすくなく，むしろ一般的には伴わないと言ってよかろう。しかし，西は福岡県福岡市深原遺跡[12]でまとまった出土がみられ，東は静岡県沼津市大谷津遺跡[13]でもまとまって打製石斧がみられる。報告者が中期に比定した福井県勝山市破入遺跡[14]の打製石斧も状況からして押型紋土器との共伴関係をふたたび考えねばならないだろう。

剝片の多量の出土は，上ノ原遺跡でもっとも注目すべき事実である。押型紋土器の遺跡には不定形の剝片がおおいことは通説となっているが，上ノ原遺跡はとくに石材の原産地にちかいという立地を考慮しなければならない。押型紋土器の共伴石器を検索してもこれほど多量な剝片は報告書に掲載されておらず，おおぶりな剝片が散見できるだけであった。このことが遺跡の真の実態なのか報告担当者の方針により未報告に終わっているのかは，事情に精通していないのでなんとも言えない。ただ，上ノ原遺跡の石器遺物を観察してわかることは，主材に石の目があって，剝片剝離法にかなりの頻度で事故を引き起こしていることである。つまり，石質が石器にはあまりよくない。一般に冠山産の安山岩はサヌカイトにくらべて石質がおとるといわれ，じっさいの観察もそれとまったくおなじ印象である。石の目が縞として入っているために，剝離の衝撃波が縞に斜交すると段やヒビが剝離面に生じやすい。また剝片に折れ面がおおいのも特徴であり，縞目にそった被損事故が頻発している。この折れ面は石質がよければ，孤立した鋭角の細部調整としての偶発事故となるであろう[15]。縞目に平行する衝撃は，とくにおおきな剝離面の１部である場合，自然被損と区別つかないことがある。こうした事故発生率のたかさは，型式生産効率をわるくするから，多量の剝片を生ずることになる。

上ノ原遺跡がどのように石材交易にかかわっていたのかは，押型紋土器と同時代の周辺の遺跡がわからないと様子がつかめない。新槇原遺跡の第４，５層から出土した無紋土器は上ノ原遺跡とほぼ同時代かすこし時期のくだるものである。上ノ原の集団が新槇原に移動したのか，別個の集団であったのかわからないけれども，ともに谷間が交差する地点に立地していることは注目できる。この立地は匹見町にある縄紋後期の配石遺跡のいくつかが谷筋のなかにある環

境と対照的である。石材交易が撰地の決定的要因とまではまだ言い切れないけれども，後期の縄紋遺跡にくらべれば比重はたかかったのではないか。しかし，遺物のなかには交易用の石材としての石の塊はなかったし，板状石材[16]も出土しなかった。石鏃がきわめて優品であることから，これが交易品となったことも考えておかなくてはならない。

3．遺構について

下層の土坑と小穴群については，現状では生活痕跡と動物痕跡の2とおりの解釈ができることは前文でのべた。押型紋土器にかぎらないが縄紋早期の遺跡には，なぜかこうした理解がむずかしい土坑群がおおい気がするけれども，ひろい面積を発掘すれば人為的な遺構かどうかはおのずと決着するものである。明確な構造をもって押型紋土器にともなう遺構は炉跡だけである。石組炉，トンネル炉，集石炉の種類が知られているが，中国・四国地方では炉址の構造がまだよくわかっていない。今回検出した土坑には焼土がないので，遺構との断定をさけたが，たぶん炉址は遺跡のどこかに埋没しているであろう。

中層の土坑aは，構造と規模から押型紋土器にともなう事例がいくつか知られている。大分県九重町二日市洞穴遺跡[17]では墓穴と報告されている。また押型紋土器の直後とみられる熊本県大津町瀬田裏遺跡の第Ⅲ層[18]からも無数に検出されており，たぶん墓穴であろう。トレンチの壁が障害でよくわからないけれども土坑b，cが中層にあることは，墓穴がほかの遺跡のように群在することを示唆している。

（中村友博）

注

1）松島透「長野県立野遺跡の捺型文土器」（石器文化研究会『石器時代』No.4，1957年）第3図9。

2）遮那藤麻呂「上伊那郡赤坂遺跡における押型文土器と遺構」（『長野県考古学会誌』16，1973年）第7図11。

3）関野哲夫「東海地方における押型紋段階の様相」（『縄文早期を考える』帝塚山考古学研究所，1988年）p.275 第99図下段。

4）下村晴文（東大阪市教育委員会『神並遺跡』Ⅱ，1987年）。

5）松田慎一（奈良県橿原考古学研究所『大川遺跡』山添村教育委員会，1989年）。

6）角田徳幸「堀田上遺跡」（島根県教育委員会『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』，1991年）。

7）岡本東三「立野式土器の出自とその系統をめぐって」（阿佐ヶ谷先史学研究会『先史考古学研究』第2号，1989年）。中島宏「立野式土器についての一考察」（埼玉県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』第7号，1990年）。矢野健一「押型文土器の起源と変遷」『考古学雑誌』第78巻第4号，1993年。

8）木下修『深原遺跡の調査』（福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第8集，1978年）。

9）坂本嘉弘『菅無田遺跡』(『野津川流域の遺跡』Ⅶ，野津町教育委員会，1986年)。ほか大分県では，下菅生B遺跡（高橋徹・後藤一重『菅生台地と周辺の遺跡』Ⅺ，竹田市教育委員会，1986年）第32図ならびに栗田勝弘「新生遺跡」(『野津川流域の遺跡』Ⅴ，野津町教育委員会，1984年）39ページでもこの類型が指摘されている。熊本県では（緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告』資料Ⅱ，大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団1992年）第14,15図。多々良友博「九州地方の押型文土器」『金立開拓遺跡』(佐賀県教育委員会『九州横断道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』4，1984年）の論文で体系的に検索することができる。

10）坂本嘉弘「押型文土器の変遷」(大分県総務部『大分県史』先史編Ⅰ，1982年)。

11）鈴木次郎「打製石斧」(加藤晋平ほか編『縄文文化の研究』7，雄山閣出版，1983年)。

12）注8におなじ。

13）鈴木裕篤・早弓友子『大谷津遺跡発掘調査報告書』(『沼津市文化財報告書』第50集，1990年)。鈴木裕篤『大谷津遺跡・井出丸山古墳発掘調査報告書』(『沼津市文化財報告書』第55集，1994年)。

14）仁科章編『破入遺跡』(『勝山市文化財調査報告』第Ⅱ集，勝山市教育委員会，1997年)

15）西秋良宏「石器製作時に生じる偶発剝離の問題」(『東海大学校地内遺跡調査団報告』4，1994年）を参照させていただいた。ただし西秋氏が引くニューカマーの「偶発剝離は,」「細かいものなら非常に高い頻度で生じる」との指摘は，剝離する剝片が細かい場合を指すのか，それとも剝離した剝片に浅く短いmarginal細部調整が発生することの意味なのか，原文がないのでよくわからない。それとも英語は日本語どうようにあいまいな言い回しがきく言葉だから，どちらにもとれるのであろうか。つづいてニューカマーが言う意図的「二次加工石器」との混同は100の剝離につき1度というのは英国産フリントの実験であるから，個人差にくわえて石材がちがえばかなり変わるはずである。この主題は石器製作の技術論の分野であって，剝片剝離による偶発や事故と言えどもその原因の根源は人為によるものであるから，石器型式学において意図か事故かをあらかじめ区別することはできないし，また無意味である。

16）竹広文明「縄文時代の石器原材獲得」(潮見浩先生退官記念事業会『考古論集』，1993年）のなかで，金山東麓産のサヌカイトが縄紋時代には板状石材で交易され，その始まりを前期以降とみなしている。

17）橘正昌信（『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』，別府大学付属博物館，1980年)。

18）緒方勉（大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団『瀬田裏遺跡調査報告』Ⅰ，1991年)。

付篇

遺物取り上げ明細

＊1．取上番号は、野外でのポリエチレン製の1袋に記された符号である。
＊2．登録の「無紋土器」には、小破片で磨滅した押型紋が混じっている可能性もある。
＊3．レヴェルの数値は標高300.00mからの－cmである。
＊4．重量単位は、gである。

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
O9	No.1	剝　片	－83	第2黒色土	安山岩	4.9	930719	第14図5
	2	剝　片	－77	第2黒色土	安山岩	0.9	930719	第14図7
	3	石刃状	－76	第2黒色土	安山岩	5.6	930719	第14図4
	4	格子目紋	－80	第2黒色土	－	－	930719	第11図14
	5	剝　片	－78	第2黒色土	安山岩	0.4	930719	第14図10
	6	楔形石器	－82	第2黒色土	安山岩	5.0	930719	第12図12
	7	剝　片	－82	第2黒色土	チャート	0.6	930719	第14図15
	8	掻　器	－82	第2黒色土	安山岩	3.9	930719	第12図9
	9	剝　片	－78	第2黒色土	安山岩	1.0	930719	第11図13
	10	自然石	なし	な　し	不　明	517.4	930719	
	11	剝　片	－90	第2黒色土	安山岩	1.9	930720	第14図12
	12	石刃状	－85	第2黒色土	安山岩	1.0	930720	第14図11
	13	自然石	－78	第2黒色土	不　明	20.8	930720	
	14	山形紋	－88	第2黒色土	－	－	930720	第11図5
	15	剝　片	－89	第2黒色土	安山岩	4.0	930720	第14図2
	16	無紋土器	－84	第2黒色土	－	－	930720	第11図21
	17	無紋土器	－88	第2黒色土	－	－	930720	第11図31
	18	剝　片	－86	第2黒色土	安山岩	1.5	930720	第14図6
	19	無紋土器	－86	第2黒色土	－	－	930720	第11図18
	20	山形紋	－86	第2黒色土	－	－	930720	第11図2
	21	剝　片	－92	第2黒色土	安山岩	9.7	930720	第14図1
	22	無紋土器	－91	第2黒色土	－	－	930720	
	23	剝　片	－88	第2黒色土	安山岩	1.0	930720	
	24	剝　片	－86	第2黒色土	安山岩	1.8	930720	第14図8
	25	石刃状	－84	第2黒色土	安山岩	0.8	930720	第14図3
	26	無紋土器	－89	第2黒色土	－	－	930721	
	27	剝　片	－85	第2黒色土	安山岩	2.2	930721	第14図9
	28	剝　片	－84	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	
	29	自然石	－80	第2黒色土	流紋岩	0.3	930721	
	30	石刃状	－84	第2黒色土	安山岩	0.8	930721	第14図14
	31	山形紋	－86	第2黒色土	－	－	930721	
	101	無紋土器	－111	第2黄色土	－	－	930723	第9図14

遺物取り上げ明細

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
O9	No.102	山形紋	−106	第2黄色土	−	−	930723	第9図1
	103	山形紋	−107	第2黄色土	−	−	930723	第9図2
	104	無紋土器	−107	第2黄色土	−	−	930723	第9図13
	105	山形紋	−108	第2黄色土	−	−	930723	第9図3
	106	山形紋	−104	第2黄色土	−	−	930723	第9図7
	107	無紋土器	−104	第2黄色土	−	−	930723	第9図10
	108	山形紋	−107	第2黄色土	−	−	930723	第9図4
	109	無紋土器	−103	第2黄色土	−	−	930723	第9図11
	110	自然石	−109	第2黄色土	花崗岩	51.1	930723	
	111	格子目紋	−107	第2黄色土	−	−	930723	第9図6
	112	無紋土器	−102	第2黄色土	−	−	930723	第9図15
	113	山形紋	−109	第2黄色土	−	−	930723	第9図5
	114	自然石	−98	第2黄色土	不　明	3.3	930723	
	115	自然石	−105	第2黄色土	不　明	2.8	930723	
	116	石　錐	−110	第2黄色土	安山岩	5.7	930723	第12図13
	117	無紋土器	−103	第2黄色土	−	−	930723	第9図8
	118	無紋土器	−105	第2黄色土	−	−	930723	第9図12
	119	無紋土器	−105	第2黄色土	−	−	930723	第9図9
	番外1	石刃状		土坑1	安山岩	1.8	930721	第10図3
	番外2−1	押型紋		土坑8				第10図4
	−1	剝　片		土坑8	安山岩	0.4		第10図5
	番外3	格子目紋		土坑10	−	−		第10図6
	番外4	剝　片		土坑11	安山岩	0.4	930721	
	番外5−1	無紋土器	なし	「第1黒色土」	−	−	930713	
	−2	木　炭	なし	「第1黒色土」	−	2.6	930713	
	−3	剝　片	なし	「第1黒色土」	水　晶	3.0	930713	第23図11
	−4	剝　片	なし	「第1黒色土」	安山岩	3.7	930713	第23図1
	−5	石　器	なし	「第1黒色土」	安山岩	0.7	930713	
	−6	自然石	なし	「第1黒色土」	不　明	1.9	930713	
	番外6	無紋土器	なし	「第1黒色土」	−	−	930713	第24図4
P9	No.1	剝　片	−84	第2黒色土	安山岩	0.2	930719	
	2	剝　片	−81	第2黒色土	安山岩	5.8	930719	第15図2
	3	石刃状	−81	第2黒色土	安山岩か	18.6	930719	第15図1
	4	剝　片	−78	第2黒色土	安山岩	0.4	930719	
	5	剝　片	−85	第2黒色土	安山岩	0.2	930720	
	6−1	剝　片	−88	第2黒色土	安山岩	0.6	930720	
	−2	剝　片	−88	第2黒色土	安山岩	0.4	930720	
	7	剝　片	−86	第2黒色土	安山岩	0.9	930720	
	8	剝　片	−87	第2黒色土	安山岩	2.1	930720	第15図4
	9	剝　片	−87	第2黒色土	安山岩	0.2	930720	
	10	剝　片	−93	第2黒色土	安山岩	0.3	930720	

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　　位	石　材	重　量	日　付	挿　　図
P9	No.11	剥　片	−92	第2黒色土	安山岩	2.9	930720	第15図3
	12	無紋土器	−89	第2黒色土	−	−	930720	
	13	剥　片	−95	第2黒色土	安山岩	0.2	930720	
	14	剥　片	−90	第2黒色土	安山岩	1.4	930720	第15図7
	15	剥　片	−93	第2黒色土	安山岩	0.1	930720	
	16	削　器	−90	第2黒色土	安山岩	3.6	930720	第12図18
	17	木　炭	−94	第2黒色土	−	0.1	930720	
	18	剥　片	−92	第2黒色土	安山岩か	0.9	930720	第15図5
	19	剥　片	−100	第2黒色土	安山岩	0.8	930720	
	20	剥　片	−90	第2黒色土	安山岩	1.7	930720	第15図6
	21	無紋土器	−84	第2黒色土	−	−	930720	
	22	剥　片	−83	第2黒色土	安山岩	0.2	930720	
	23	無紋土器	−85	第2黒色土	−	−	930720	
	24	敲　石	−80	第2黒色土	花崗斑岩	423.4	なし	
	25	無紋土器	−93	第2黒色土	−	−	930721	
	26	山形紋	−93	第2黒色土	−	−	930721	第11図4
	27	山形紋	−93	第2黒色土	−	−	930721	第11図10
	28	無紋土器	−99	第2黒色土	−	−	930721	第11図28
	29	剥　片	−95	第2黒色土	安山岩	0.5	930721	
	30	自然石	−95	第2黒色土	不　明	2.2	930721	
	31	格子目紋	−99	第2黒色土	−	−	930721	第11図6
	32	剥　片	−98	第2黒色土	安山岩	0.8	930721	
	33	土　器	−96	第2黒色土	−	−	930721	
	34	石　鏃	−95	第2黒色土	石　英	−	930721	
	番外1−1	無紋土器	なし	「第1黒色土」	−	−	930713	
	−2	無紋土器	なし	「第1黒色土」	−	−	930713	
	−3	無紋土器	なし	「第1黒色土」	−	−	930713	
	−4	無紋土器	なし	「第1黒色土」	−	−	930713	
	−5	剥　片	なし	「第1黒色土」	安山岩	11.5	930713	第23図3
	−6	剥　片	なし	「第1黒色土」	安山岩	3.5	930713	第23図9
	−7	剥　片	なし	「第1黒色土」	安山岩	3.7	930713	第23図8
	−8	剥　片	なし	「第1黒色土」	安山岩	2.3	930713	第23図12
	−9	剥　片	なし	「第1黒色土」	安山岩	0.6	930713	
	−10	剥　片	なし	「第1黒色土」	安山岩	0.4	930713	
	番外2	無紋土器	なし	第2黒色土	−	−		
	番外3−1	無紋土器	なし	小土坑2	−	−		
	−2	剥　片	なし	小土坑2	安山岩	1.8	930721	第10図8
	−3	剥　片	なし	小土坑2	安山岩	0.6	930721	
	番外4−1	無紋土器	なし	土坑3	−	−	第10図9	
	−2	剥　片	なし	土坑3	安山岩	23.2	930721	第10図7
	番外5	剥　片	なし	第2黒色土a	安山岩	0.3	930713	

遺物取り上げ明細

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
Q9	No.1	無紋土器	−92	第2黒色土	−	−	930720	
	2	剝　片	−88	第2黒色土	安山岩	0.5	930720	
	3	剝　片	−95	第2黒色土	安山岩	1.6	930720	第15図13
	4	自然石	−91	第2黒色土	不　明	2.5	930720	
	5	剝　片	−90	第2黒色土	安山岩	0.5	930720	
	6	無紋土器	−87	第2黒色土	−	−	930720	第11図19
	7	剝　片	−91	第2黒色土	安山岩	0.4	930720	
	8	剝　片	−81	第2黒色土	安山岩	1.0	930720	第15図25
	9	剝　片	−81	第2黒色土	安山岩	1.0	930720	第15図11
	10	剝　片	−90	第2黒色土	安山岩	1.5	930720	第15図17
	11	剝　片	−94	第2黒色土	安山岩	0.1	930720	
	12	自然石	−90	第2黒色土	不　明	0.5	930720	
	13	剝　片	−89	第2黒色土	安山岩	2.6	930720	第15図19
	14	剝　片	−90	第2黒色土	安山岩	0.3	930720	
	15	無紋土器	−84	第2黒色土	−	−	なし	第11図35
	16	無紋土器	−92	第2黒色土	−	−	930720	
	17	楕円紋	−93	第2黒色土	−	−	930720	第11図12
	18	剝　片	−89	第2黒色土	チャート	0.6	930720	第15図24
	19−1	剝　片	−90	第2黒色土	安山岩	1.5	930720	第15図20
	−2	剝　片	−90	第2黒色土	安山岩	0.1	930720	
	20	剝　片	−87	第2黒色土	安山岩	2.8	930720	第15図15
	21	剝　片	−93	第2黒色土	安山岩	0.7	930720	第15図26
	22	剝　片	−88	第2黒色土	安山岩	0.5	930720	
	23	山形紋	−84	第2黒色土	−	−	930720	第11図8
	24	剝　片	−96	第2黒色土	安山岩	1.0	930720	第15図21
	25	無紋土器	−91	第2黒色土	−	−	930720	
	26	剝　片	−95	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	
	27	剝　片	−96	第2黒色土	安山岩	0.3	930721	
	28	無紋土器	−96	第2黒色土	−	−	930721	第11図32
	29	剝　片	−96	第2黒色土	安山岩	0.2	930721	
	30	無紋土器	−97	第2黒色土	−	−	930721	第11図33
	31	剝　片	−94	第2黒色土	安山岩	0.2	930721	
	32	木　炭	−95	第2黒色土	−	0.2	930721	
	33	剝　片	−96	第2黒色土	安山岩	1.0	930721	第15図14
	34	格子目紋	−96	第2黒色土	−	−	930721	第11図37
	35	剝　片	−92	第2黒色土	安山岩	0.8	930721	第15図22
	36	無紋土器	−96	第2黒色土	−	−	930721	第11図23
	37	剝　片	−96	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	
	38	剝　片	−96	第2黒色土	安山岩	1.0	930721	
	39	剝　片	−93	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	
	40	自然石	−101	第2黒色土	不　明	2.7	930721	

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
Q9	No.41	剝　片	−101	第2黒色土	安山岩	1.0	930721	第15図23
	42	石刃状	−102	第2黒色土	安山岩	1.4	930721	第15図18
	43	無紋土器	−103	第2黒色土	−	−	930721	第11図30
	44	剝　片	−100	第2黒色土	安山岩	2.4	930721	第15図10
	45	剝　片	−98	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	
	46	山形紋	−102	第2黒色土	−	−	なし	第11図9
	47	剝　片	−102	第2黒色土	安山岩	0.3	930721	
	48	格子目紋	−98	第2黒色土	−	−	930721	
	49	無紋土器	−98	第2黒色土	−	−	930721	第11図15
	50	剝　片	−97	第2黒色土	安山岩	0.8	930721	
	51	無紋土器	−97	第2黒色土	−	−	930721	第11図29
	52	自然石	−93	第2黒色土	−	−	930721	
	53–1	剝　片	−100	第2黒色土	安山岩	1.0	930721	第15図12
	–2	剝　片	−100	第2黒色土	安山岩	0.9	930721	第15図16
	54	剝　片	−98	第2黒色土	安山岩	5.2	930721	第15図9
	55	剝　片	−100	第2黒色土	安山岩	3.1	930721	第15図8
	番外1	自然石	なし	土坑10	不　明	2.8	930721	
	番外2	剝　片	なし	小土坑12	安山岩	1.2	930721	第10図11
	番外3−1	石　核	なし	第1黒色土	安山岩	5.6	930713	第23図10
	−2	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.6	930713	
	番外4−1	無紋土器	なし	第1黄色土	−	−	930713	第21図15
	−2	打製石斧	なし	第1黄色土	安山岩	115.8	930713	第13図5
	−3	楔形石器	なし	第1黄色土	安山岩	7.3	930713	第12図11
R8	No.1	打製石斧	−81	第2黒色土	安山岩	66.7	930713	第13図4
	2	無紋土器	−86	なし	−	−	930713	
	番外1−1	無紋土器	なし	第2黒色土	−	−	930713	第11図17
	−2	山形紋	なし	第2黒色土	−	−	930713	第11図1
	−3	無紋土器	なし	第2黒色土	−	−	930713	第11図22
	−4	無紋土器	なし	第2黒色土	−	−	930713	第11図34
	−5	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	31.9	930713	第16図1
	−6	剝　片	なし	第2黒色土	不　明	11.1	930713	
	−7	円形掻器	なし	第2黒色土	石　英	3.8	930713	第12図17
	−8	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	1.7	930713	第16図7
	−9	石刃状	なし	第2黒色土	安山岩	1.8	930713	第16図3
	−10	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	1.6	930713	第16図6
	−11	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	1.5	930713	第16図2
	−12	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	1.2	930713	第16図5
	−13	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	1.2	930713	第16図4
	−14	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	1.3	930713	
	−15	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	0.8	930713	
	−16	剝　片	なし	第2黒色土	安山岩	1.2	930713	

遺物取り上げ明細

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
R8	番外1-17	剥　片	なし	第2黒色土	安山岩	0.6	930713	
	-18	剥　片	なし	第2黒色土	安山岩	0.6	930713	
	-19	剥　片	なし	第2黒色土	安山岩	0.6	930713	
	-20	剥　片	なし	第2黒色土	安山岩	0.5	930713	
	番外2	無紋土器	なし	土坑7	－	－		第10図10
R9	No.1	石刃状	－87	第2黒色土	安山岩	4.4	930716	第17図1
	2	無紋土器	－92	第2黒色土	－	－	930720	
	3	剥　片	－94	第2黒色土	不　明	0.7	930720	
	4	剥　片	－97	第2黒色土	安山岩	1.6	930720	第17図7
	5	石　核	－99	第2黒色土	安山岩	14.0	930720	第17図3
	6	剥　片	－95	第2黒色土	安山岩	0.9	930720	
	7	無紋土器	－98	第2黒色土	－	－	930720	
	8	無紋土器	－94	第2黒色土	－	－	930720	
	9	石　鏃	－95	第2黒色土	安山岩	1.1	930720	第12図3
	10	剥　片	－92	第2黒色土	安山岩	1.0	930720	
	11	剥　片	－91	第2黒色土	安山岩	1.6	930720	第17図9
	12	剥　片	－94	第2黒色土	安山岩	1.7	930720	
	13	自然石	－91	第2黒色土	不　明	1.4	930720	
	14	剥　片	－90	第2黒色土	安山岩	0.8	930720	第17図12
	15	剥　片	－89	第2黒色土	安山岩	2.3	930720	第17図4
	16	打製石斧	－91	第2黒色土	不　明	81.5	930720	第13図3
	17	剥　片	－88	第2黒色土	安山岩	0.5	930720	
	18	剥　片	－86	第2黒色土	安山岩	1.5	930720	第17図10
	19	剥　片	－87	第2黒色土	安山岩	1.8	930720	第17図6
	20	剥　片	－85	第2黒色土	安山岩	0.4	930720	
	21	石刃状	－94	第2黒色土	安山岩	1.7	930720	第17図8
	22	剥　片	－93	第2黒色土	安山岩	0.9	930720	
	23	山形紋	－85	第2黒色土	－	－	930720	第11図7
	24	剥　片	－84	第2黒色土	安山岩	0.3	930720	
	25	剥　片	－86	第2黒色土	安山岩	0.7	930720	第17図11
	26	剥　片	－87	第2黒色土	安山岩	0.4	930720	
	27	剥　片	－92	第2黒色土	安山岩	0.2	930721	
	28	剥　片	－93	第2黒色土	安山岩	0.2	930721	
	29	無紋土器	－93	第2黒色土	－	－	930721	
	30	剥　片	－96	第2黒色土	安山岩	0.1	930721	
	31	木　炭	－100	第2黒色土	－	0.2	930721	
	32	剥　片	－100	第2黒色土	安山岩	2.8	930721	第17図2
	33	剥　片	－92	第2黒色土	水　晶	0.2	930721	
	34	剥　片	－91	第2黒色土	安山岩	0.7	930721	第17図5
	35	山形紋	－102	第2黒色	－	－	930721	第11図13
	36	無紋土器	－102	第2黒色土	－	－	930721	第11図36

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　　位	石　材	重　量	日　付	挿　　図
R9	No.37	山形紋	−90	第2黒色土	−	−	930721	第11図11
	38	石　核	−92	第2黒色土	安山岩	3.3	930721	第17図5
	39	山形紋	−91	第2黒色土	−	−	930721	第11図3
	番外1−1	陶　器	なし	第1黒色土	−	−	930714	
	−2	方格紋	なし	第1黒色土	−	−	930714	第24図1
	−3	方格紋	なし	第1黒色土	−	−	930714	第24図6
	番外2	酸化鉄	なし	土坑2				
	番外3−1	石刃状	なし	土坑5	安山岩	0.8	930721	第10図13
	−2	剥　片	なし	土坑5	安山岩	0.4	930721	第10図12
	番外4−1	剥　片	なし	土坑8	安山岩	1.4	930721	第10図14
	番外5−2	剥　片	なし	土坑8	安山岩	1.3	930721	第10図15
	−3	剥　片	なし	土坑8	安山岩	0.8	930721	
	−4	剥　片	なし	土坑8	安山岩	0.4	930721	
	−5	剥　片	なし	土坑8	安山岩	0.2	930721	
R10	No.1	無紋土器	−65	第1黄色土	−	−	930715	第21図9
	2	無紋土器	−71	第1黄色土	−	−	930715	第21図10
	3	楔形石器	−71	第1黄色土	安山岩	45.1	930715	
	4	自然石	−66	第1黄色土	不　明	100.0	930715	
	5	無紋土器	−89	第1黄色土	−	−	930716	第21図24
	6	剥　片	−71	第2黒色土	安山岩	3.1	930716	第18図1
	7	無紋土器	−102	第2黒色土	−	−	930716	
	8	剥　片	−93	第2黒色土	安山岩	4.1	930719	第18図2
	9	無紋土器	−100	第2黒色土	−	−	930719	第11図27
	10	剥　片	−93	第2黒色土	安山岩	0.3	930720	
	11	剥　片	−95	第2黒色土	安山岩	0.6	930720	第18図4
	12	剥　片	−97	第2黒色土	安山岩	0.2	930720	
	13	剥　片	−95	第2黒色土	安山岩	0.2	930720	
	14	剥　片	−94	第2黒色土	安山岩	0.4	930720	
	15	自然石	−98	第2黒色土			930720	
	16	剥　片	−97	第2黒色土	安山岩	1.2	930720	
	17	剥　片	−101	第2黒色土	安山岩	0.3	930720	
	18	石　鏃	−100	第2黒色土	安山岩	1.9	930720	第12図2
	19	剥　片	−100	第2黒色土	安山岩	1.0	930720	第18図8
	20	剥　片	−103	第2黒色土	安山岩	0.3	930720	
	21	剥　片	−97	第2黒色土	安山岩	0.2	930720	
	22−1	剥　片	−107	第2黒色土	安山岩	0.1	930721	
	−2	剥　片	−107	第2黒色土	安山岩	0.1	930721	
	23	剥　片	−107	第2黒色土	安山岩	0.3	930721	
	24	無紋土器	−108	第2黒色土	−	−	930721	第11図16
	25	無紋土器	−103	第2黒色土	−	−	930721	
	26	剥　片	−103	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	

遺物取り上げ明細

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
R10	No.27	剝　片	−103	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	
	28	剝　片	−109	第2黒色土	安山岩	0.2	930721	
	29	剝　片	−107	第2黒色土	安山岩	2.4	930721	第18図6
	30	無紋土器	−110	第2黒色土	−	−	930721	
	31	剝　片	−100	第2黒色土	安山岩	0.9	930721	
	32	剝　片	−107	第2黒色土	安山岩	0.3	930721	
	33	剝　片	−105	第2黒色土	安山岩	1.6	930721	第18図5
	34	無紋土器	−95	第2黒色土	−	−	930721	
	35	無紋土器	−106	第2黒色土	−	−	930721	
	36	剝　片	−114	第2黒色土	安山岩	2.6	930721	第18図7
	37	剝　片	−111	第2黒色土	安山岩	1.7	930721	第18図3
	番外1−1	打製石斧	なし	土坑1	緑色片岩	153.1	930721	第13図1
	−2	削　器	なし	土坑1	安山岩	16.5	930721	第12図16
	−3	楕円紋	なし	土坑1	−	−	930721	第10図21
	番外2	自然石	なし	土坑2	不　明	2.1	930721	
	番外3−1	剝　片	なし	土坑6	安山岩	0.2	930721	
	−2	剝　片	なし	土坑6	安山岩	0.1	930712	
	番外4−1	山形紋	なし	土坑4	−	−	930721	第10図20
	−2	剝　片	なし	土坑4	安山岩	9.9	930721	第10図16
	−3	石刃状	なし	土坑4	安山岩	2.4	930721	第10図17
	−4	剝　片	なし	土坑4	安山岩	0.6	930721	第10図18
	−5	剝　片	なし	土坑4	安山岩	0.6	930721	第10図19
	番外5	無紋土器	なし	土坑7	−	−	930721	
	番外6	剝　片	なし	土坑5	安山岩	0.9	930721	
	番外7−1	剝　片	なし	第1黄色土	安山岩	3.4	930715	第22図4
	−2	剝　片	なし	第1黄色土	安山岩	1.3	930715	第22図9
	番外8−1	陶　器	なし	第1黒色土	−	−	930714	
	−2	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.3	930714	
R11	No.1	打製石斧	−63	第1黒色土	安山岩	79.4	930715	第13図2
	2	剝　片	−68	第1黄色土	安山岩	6.3	930715	第22図1
	3	平行紋	−67	第1黄色土	−	−	930715	第21図5
	4	無紋土器	−77	第1黄色土	−	−	930715	第21図20
	5	剝　片	−99	第1黄色土			930715	第22図11
	6	山形紋	−83	第1黄色土	−	−	930715	第21図7
	7	自然礫	−98	第1黄色土			930715	
	8	剝　片	−98	第1黄色土	安山岩	2.9	930716	第22図7
	9	自然石	−97	なし	不　明	31.2	930716	
	10	剝　片	−112	第2黒色土	安山岩	0.6	930716	
	11	剝　片	−109	第2黒色土	安山岩	1.8	930719	第19図1
	12	剝　片	−104	第2黒色土	安山岩	1.6	930719	第19図2
	13	掻　器	−103	第2黒色土	安山岩	20.9	930719	第12図8

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　　位	石　材	重　量	日　付	挿　　図
R11	No.14	剝　片	−102	第2黒色土	水　晶	0.5	930719	
	15	剝　片	−103	第2黒色土	安山岩	0.8	930719	
	16	剝　片	−113	第2黒色土	安山岩	1.6	930719	第19図3
	17	剝　片	−112	第2黒色土	安山岩	0.5	930719	第19図4
	18	無紋土器	−114	第2黒色土	−	−	930721	
	番外1−1	木　炭	なし	第1黒色土	−	−	930713	
	−2	山形紋	なし	第1黒色土	−	−	930713	第24図2
	−3	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	3.2	930713	第23図4
	−4	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.7	930713	第23図7
	−5	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.4	930713	
	−6	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.5	930713	
	−7	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.3	930713	
	番外2−1	無紋土器	なし	第1黄色土	−	−	930714	
	−2	無紋土器	なし	第1黄色土	−	−	930714	
	−3	剝　片	なし	第1黄色土	安山岩	0.1	930714	
	番外3	自然石	なし	第1黄色土	安山岩	3.5	930715	
R12	No.1	無紋土器	−89	第1黄色土	−	−	930715	第21図13
	2	剝　片	−78	第1黄色土	安山岩	1.2	930716	第22図8
	3	剝　片	なし	第1黄色土	安山岩	1.1	930716	
	4	自然礫	−84	第1黄色土			930715	
	5	剝　片	−111	なし	安山岩	1.5	930719	第19図6
	6	剝　片	−113	第2黒色土	安山岩	0.5	930719	第19図7
	番外1	剝　片	なし	第1黄色土	安山岩	0.8	930713	第22図10
	番外2	剝　片	なし	第1黄色土	安山岩	0.9	930715	第22図6
	番外3−1	無紋土器	なし	第1黒色土	−	−	930713	第24図3
	−2	石　錐	なし	第1黒色土	安山岩	3.7	930713	第12図14
	−3	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	1.7	930713	第23図5
	−4	剝　片	なし	第1黒色土	不　明	2.6	930713	
	−5	木　炭	なし	第1黒色土	−	5.5	930713	
	−6	無紋土器	なし	第1黒色土	−	−	930713	
R13	No.1	山形紋	−84	第1黄色土	−	−	930715	第21図2
	2	無紋土器	−99	第1黄色土	−	−	930715	第21図16
	3	山形紋	−97	第1黄色土	−	−	930715	第21図1
	4	無紋土器	−98	第1黄色土	−	−	930715	第21図22
	5	無紋土器	−103	第1黄色土	−	−	930716	第21図23
	6	山形紋	−102	第1黄色土	−	−	930716	第21図4
	7	無紋土器	−119	第1黄色土	−	−	930716	第21図14
	8	無紋土器	−110	第1黄色土	−	−	930716	第21図17
	9	無紋土器	−111	第1黄色土	−	−	930716	第21図11
	10	剝　片	−121	第2黒色土	安山岩	2.5	930719	第19図5
	番外1−1	無紋土器	なし	第1黒色土	−	−	930713	第24図5

遺物取り上げ明細

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
R13	番外1－2	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.7	930713	
	－3	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.4	930713	
	－4	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.4	930713	
	－5	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.4	930713	
	－6	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.2	930713	
	－7	剝　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.1	930713	
	－8	木　炭	なし	第1黒色土	－	2.6	930713	
	番外2	無紋土器	なし	第1黄色土	－	－	930713	第21図18
	番外3	無紋土器	なし	第1黄色土	－	－	なし	第21図3
R14	No.1	山形紋	－109	第1黄色土	－	－	930716	第21図8
	2	無紋土器	－116	第1黄色土	－	－	930716	第21図19
	3	無紋土器	－108	第1黄色土	－	－	930716	
	4	山形紋	－103	第1黄色土	－	－	930716	第21図6
	5	無紋土器	－122	第1黄色土	－	－	930716	第21図12
	6	剝　片	－111	第1黄色土	安山岩	6.2	930716	第22図3
	7	（欠　番）						
	8	無紋土器	－128	第1黄色土	－	－	930716	
	9	山形紋	－125	第1黄色土	－	－	930719	第21図8
	10	山形紋	－125	第1黄色土	－	－	930719	
	11–1	剝　片	－126	第2黒色土	安山岩	0.8	930721	
	–2	剝　片		第2黒色土	安山岩	0.5	930721	
	12	無紋土器	－135	第2黒色土	－	－	930721	
	13	剝　片	－147	第2黒色土	安山岩	2.3	930721	第20図2
	14	剝　片	－137	第2黒色土	安山岩	0.4	930721	
	15–1	剝　片	－135	第2黒色土	安山岩	0.8	930721	第20図5
	–2	剝　片		第2黒色土	安山岩	0.3	930721	
	16	無紋土器	－137	第2黒色土	－	－	930721	
	17	無紋土器	－133	第2黒色土	－	－	930721	第11図25
	18	木　炭	－128	第2黒色土	－	0.4	930721	
	19–1	剝　片	－133	第2黒色土	安山岩	0.2	930721	
	–2	剝　片		第2黒色土	安山岩	0.2	930721	
	20	無紋土器	－137	第2黒色土	－	－	930721	第11図24
	21	剝　片	－144	第2黒色土	安山岩	0.8	930721	
	22	無紋土器	－139	第2黒色土	－	－	930721	
	23	酸化鉄	－128	第2黒色土	－		930721	
	24	剝　片	－132	第2黒色土	安山岩	0.7	930721	
	25	剝　片	－139	第2黒色土	安山岩	0.6	930721	
	26	山形紋	－147	第2黒色土	－	－	930721	
	27	石　鏃	－152	土坑c	－	1.0	930721	第12図1
	28–1	無紋土器	－154	土坑c	－	－	930721	第10図1
	–2	剝　片	－154	土坑c	－	－	930721	第10図2

地区	取上番号	石／土器	レヴェル	層　位	石　材	重　量	日　付	挿　図
R14	No.29	剥　片	−151	第2黒色土	安山岩	0.6	930721	第20図4
	30	剥　片	−145	第2黒色土	安山岩	5.3	930721	第20図1
	31	無紋土器	−155	第2黒色土	−	−	930721	
	32–1	無紋土器	−150	第2黒色土	−	−	930721	第11図26
	–2	無紋土器	−150	第2黒色土	−	−	930721	第11図20
	32	無紋土器	−150	第2黒色土	−	−	930721	第11図20
	33	無紋土器	−149	第2黒色土	−	−	930721	
	34	削　器	−151	第2黒色土	安山岩	6.2	930721	第12図15
	35	酸化鉄	−146	なし		3.5	930721	
	36	無紋土器	−161	なし	−	−	930721	
	37	無紋土器	−147	第2黒色土	−	−	930721	
	38	石　鏃	−150	第2黒色土	安山岩	0.5	930721	第12図4
	39	剥　片	−150	第2黒色土	安山岩	1.1	930721	第20図3
	番外1−1	無紋土器	なし	第1黄色土	−	−	930715	第21図21
	−2	剥　片	なし	第1黄色土	安山岩	5.8	930715	第22図2
	−3	剥　片	なし	第1黄色土	安山岩	4.5	930715	第22図5
	番外2−1	無紋土器	なし	第1黒色土	−	−	930713	
	−2	石　鏃	なし	第1黒色土	安山岩	1.2	930713	第12図7
	−3	石　鏃	なし	第1黒色土	安山岩	0.3	930713	第12図6
	−4	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	2.5	930713	
	−5	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	2.1	930713	第23図2
	−6	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	1.8	930713	
	−7	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.9	930713	
	−8	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	1.0	930713	第23図6
	−9	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	1.1	930713	
	−10	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.7	930713	
	−11	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.8	930713	
	−12	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.7	930713	
	−13	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.7	930713	
	−14	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.6	930713	
	−15	剥　片	なし	第1黒色土	安山岩	0.3	930713	
	−16	指　輪	なし	第1黒色土	真　鍮	1.7	930713	
なし	No.1	擦　石	なし	廃　土	安山岩	258.8	930721	第13図7
	2	打製石斧	なし	表　採	安山岩	97.0	930715	第13図6
	3–1	無紋土器	なし	表　採	−	−	930714	
	–2	無紋土器	なし	表　採	−	−		
	–3	剥　片	なし	表　採	安山岩	6.3		
	–4	剥　片	なし	表　採	安山岩	1.7		
	–5	剥　片	なし	表　採	安山岩	0.9		
	4	剥　片	なし	廃　土	安山岩	3.3	930723	

図　　版

1．上ノ原遺跡の遠影

2．上ノ原遺跡の近影

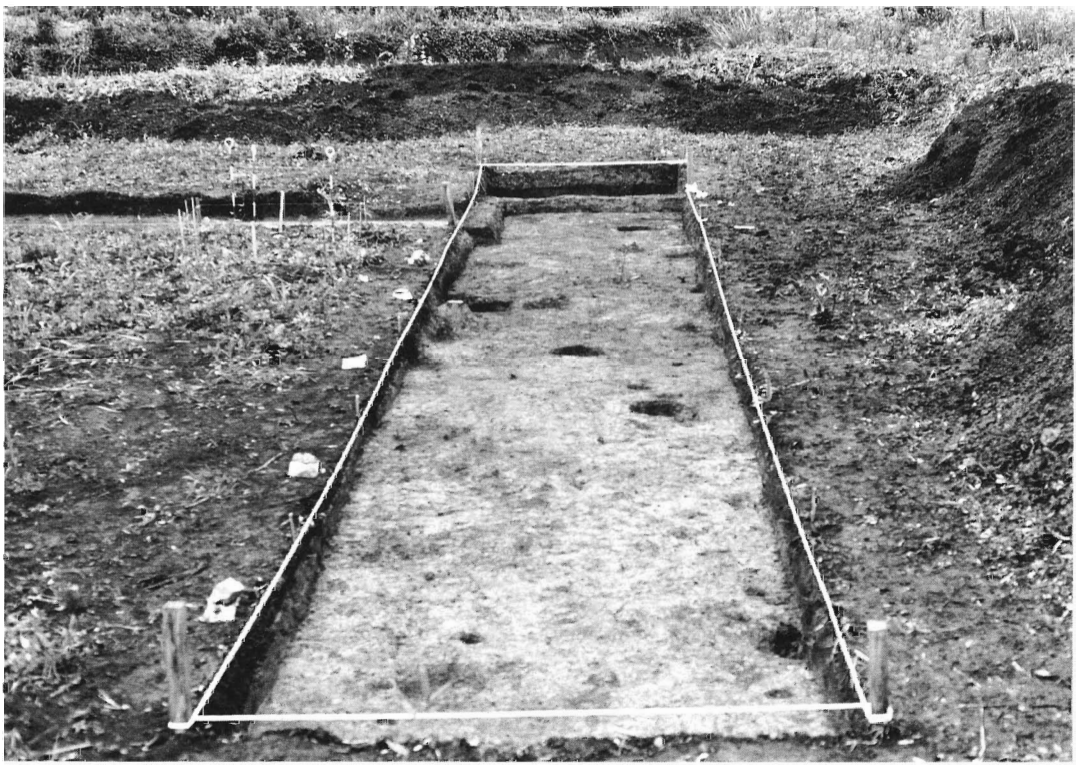
1．発掘調査の前の状況

2．発掘中の上ノ原遺跡

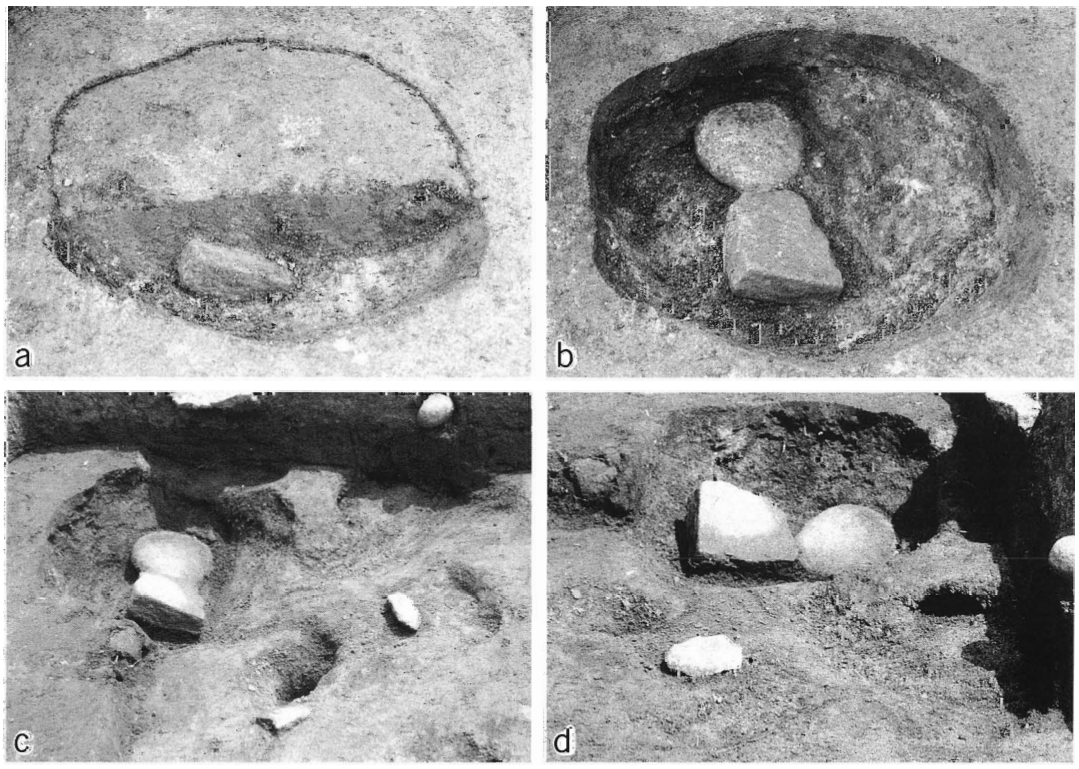
1．終了直前の遺跡

2．東西トレンチ

3．南北トレンチ



1．第１黒色土の基底面（南北トレンチを北から撮る）



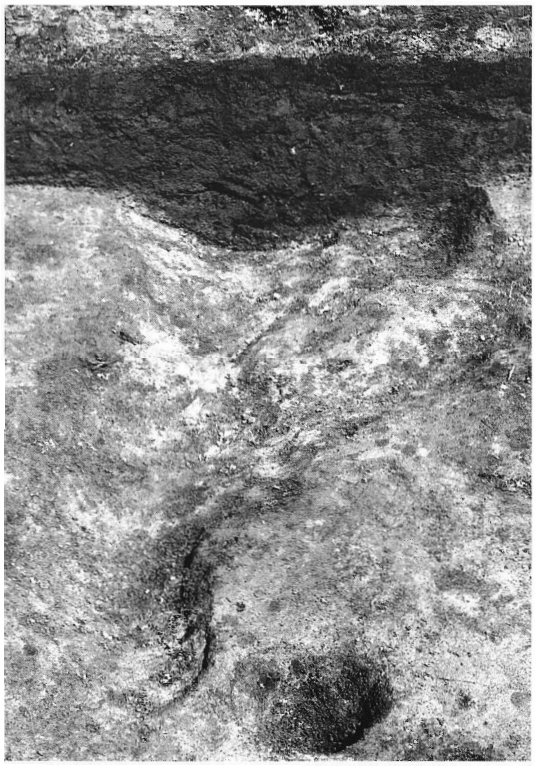
2．第１黒色土の基底で出土した土坑ａ

1．東西トレンチ（西から）

2．東西トレンチ（東から）

3．南北トレンチ（北から）

4．南北トレンチ（南から）

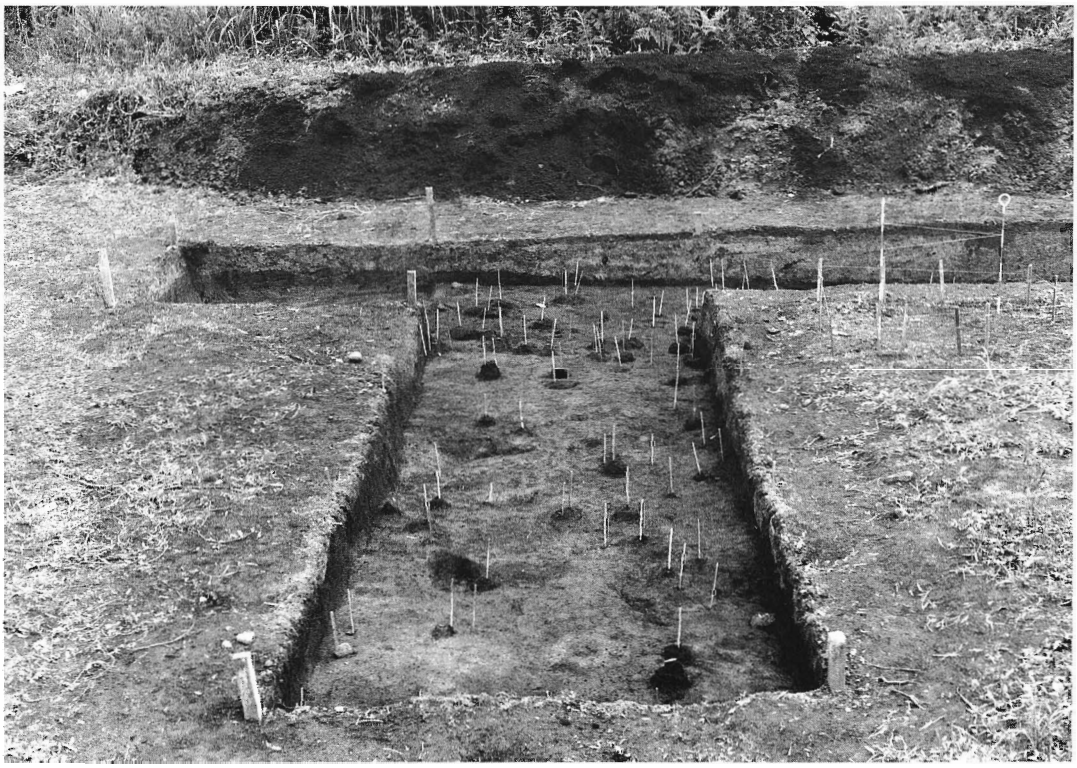


1．P９区の土坑３

2．O９区の土坑７～10

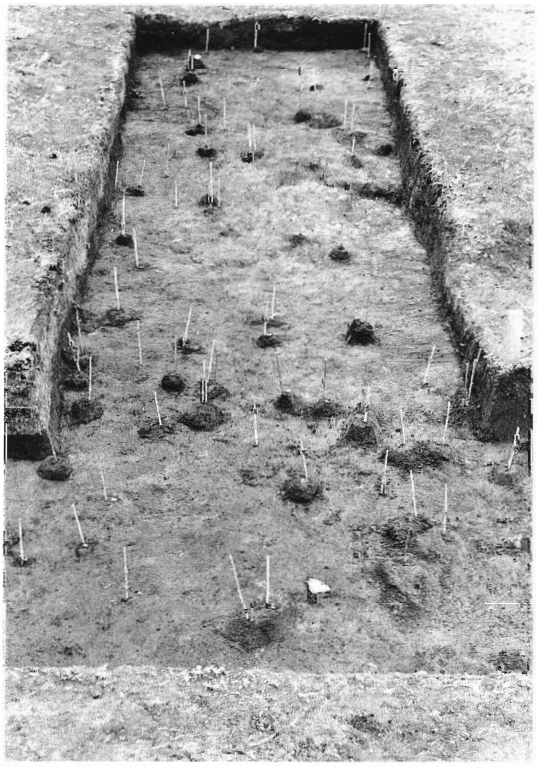
3．R14区の西半

4．R９区の土坑１，２



1．第２黒色土中の遺物の散布（東から）

2．R14区の遺物の散布（南から）



3．東西トレンチにおける遺物の散布（西から）

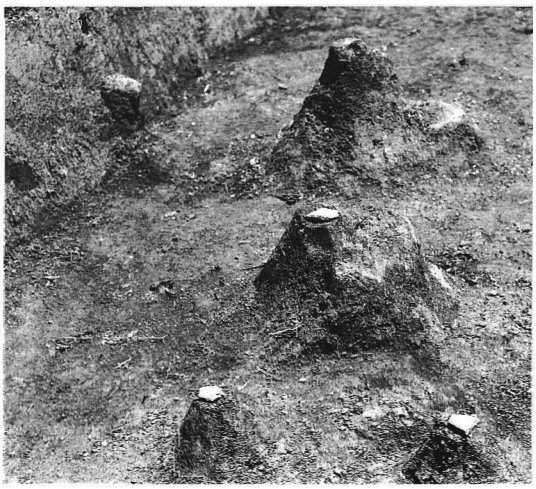
1．第２黒色土の石鏃（R10区）

2．第２黒色土の打製石斧（R９区）

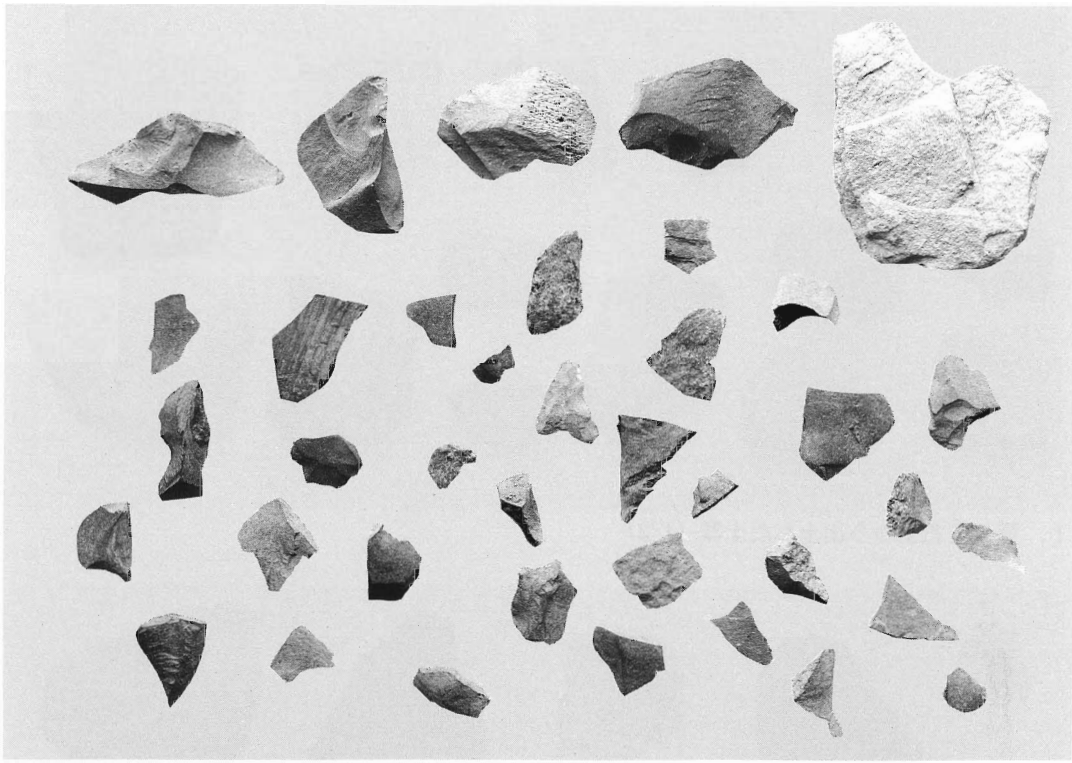
3．第１黄色土の楔形石器（R10区）

4．第１黄色土の土器（R11区）

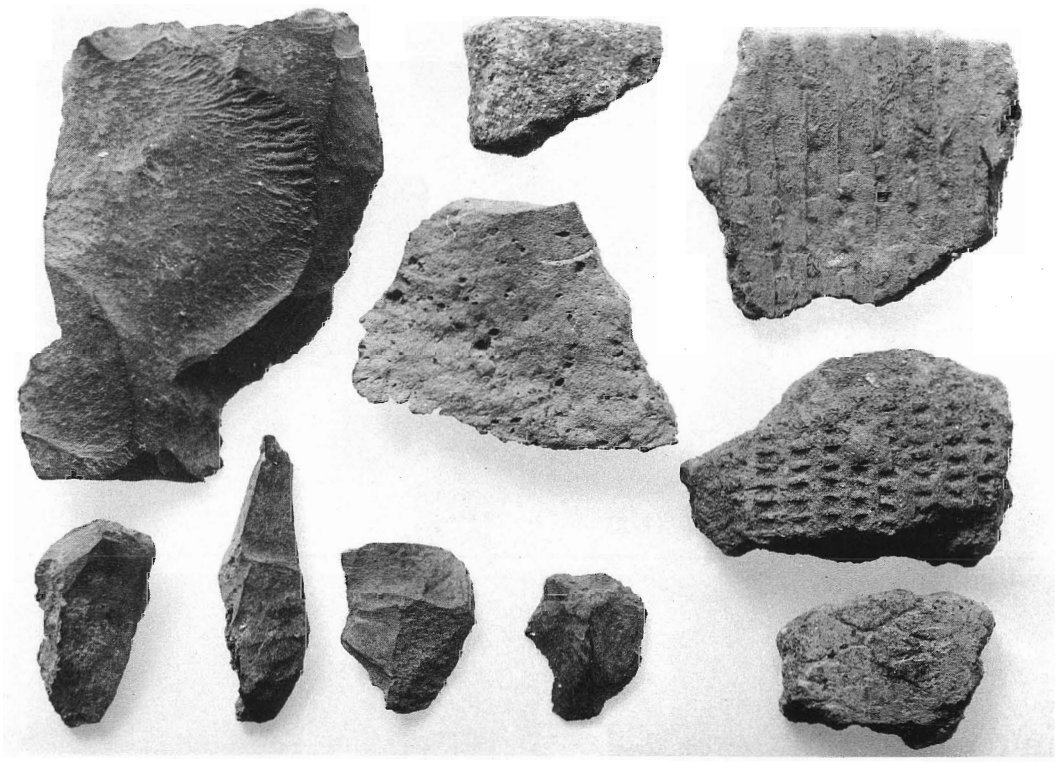
5．第１黄色土の土器（R10区）



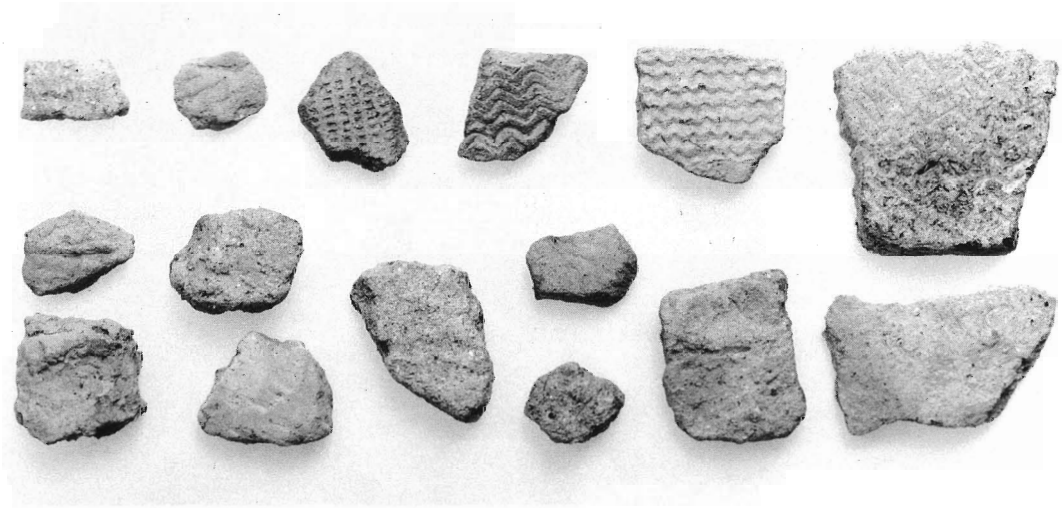
6．第１黄色土の土器（R13区）



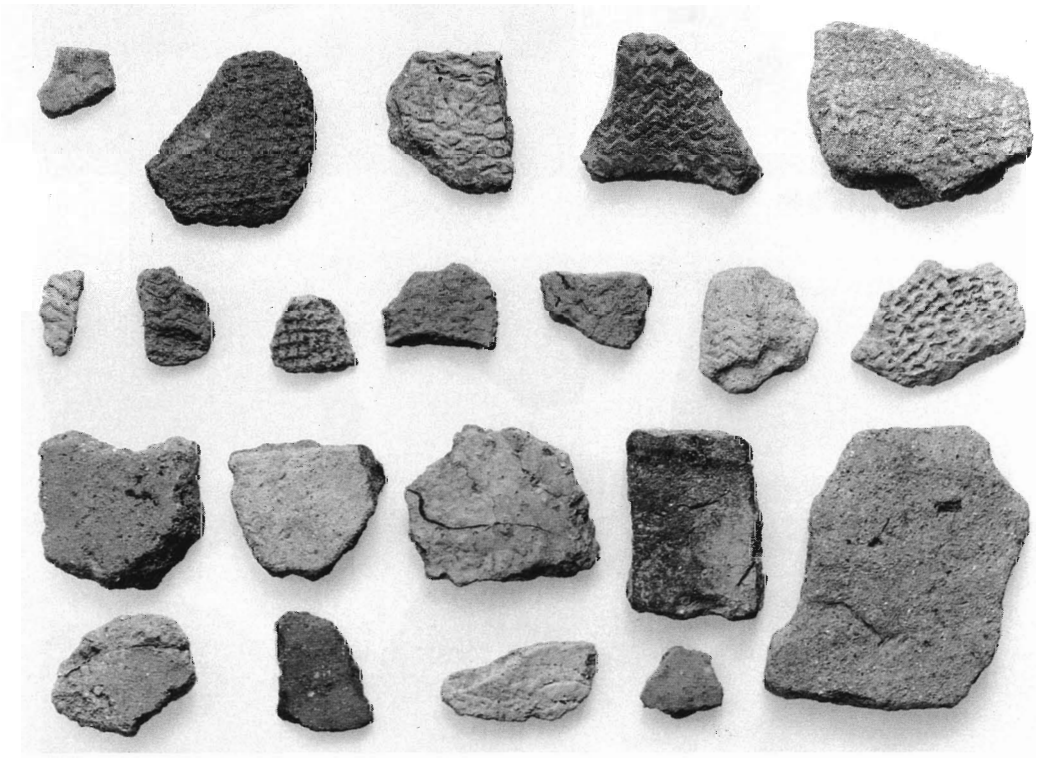
1．発掘以前の表採遺物



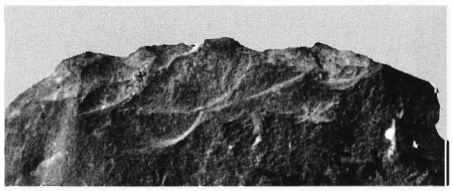
2．土坑出土の遺物（1/1）



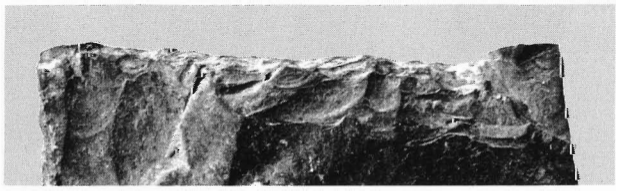
1．第２黄色土から出土した土器（1/2）



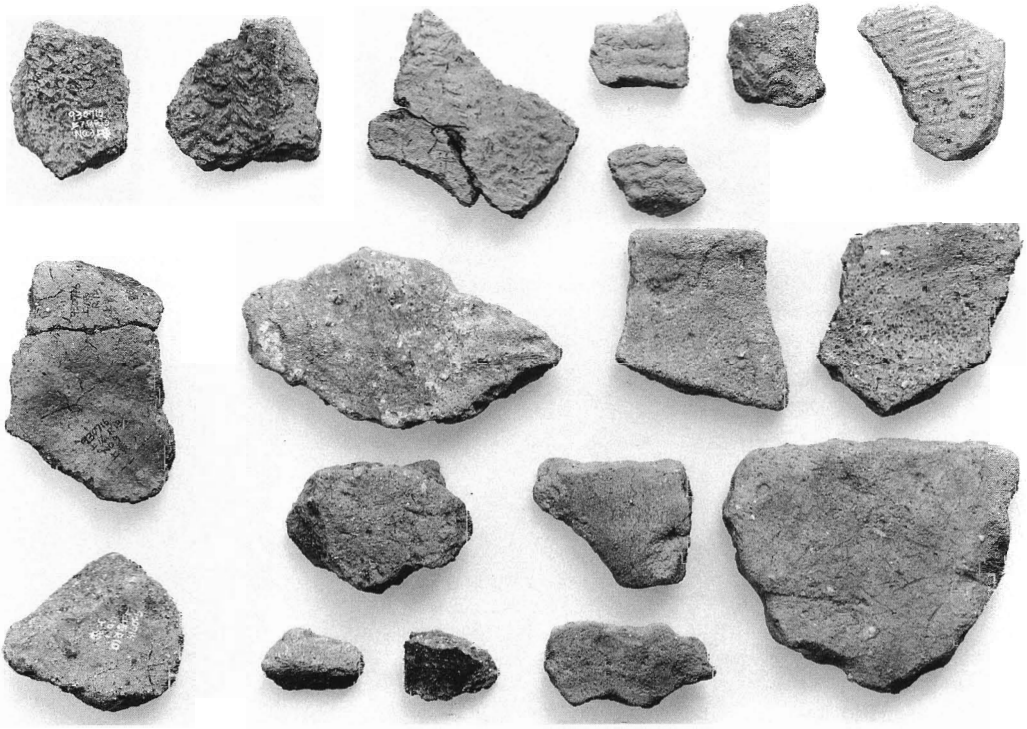
2．第２黒色土から出土した土器（1/2）



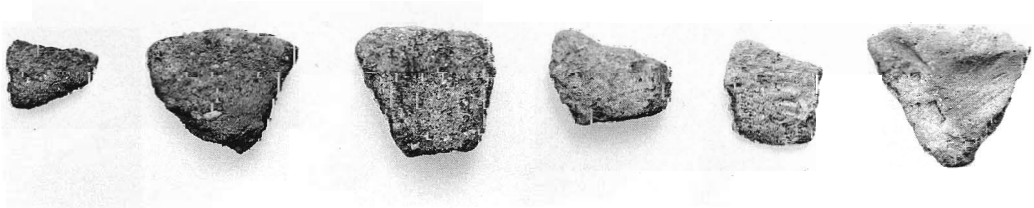
3．削器の凸刃（R10区；×1.5）



4．楔形石器の縁部（R10区；×1.5）

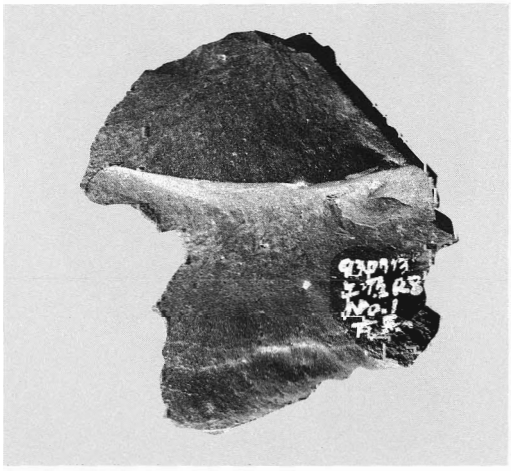


1．第１黒色土から出土した土器（1/2）



2．第１黒色土から出土した土器（1/2）

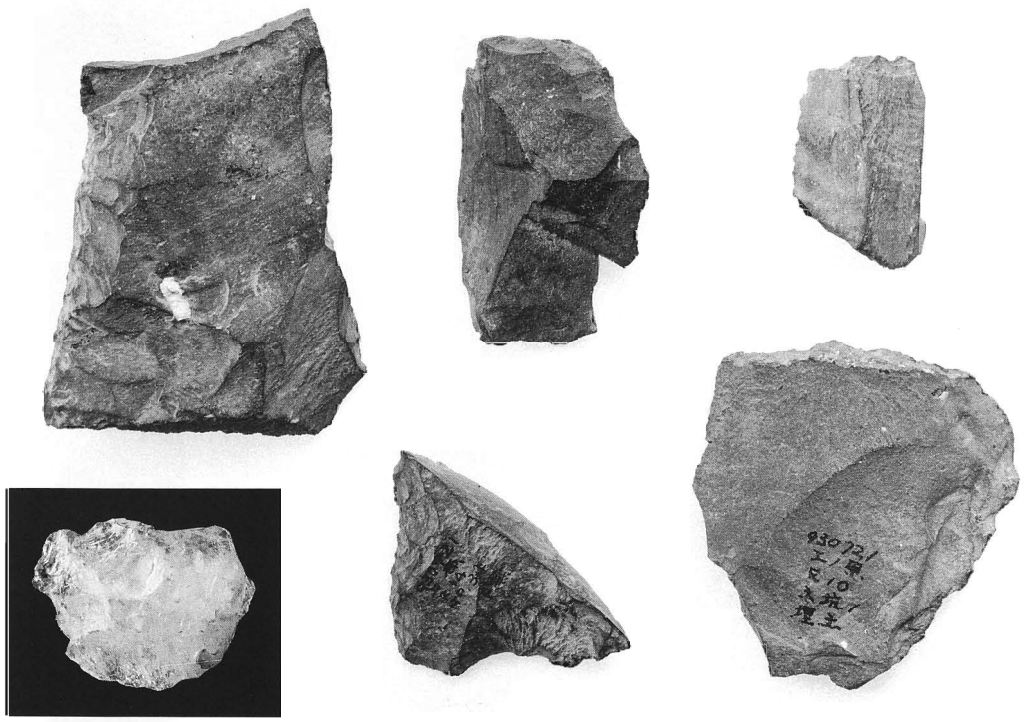
3．水晶製の剥片（c.1/1）



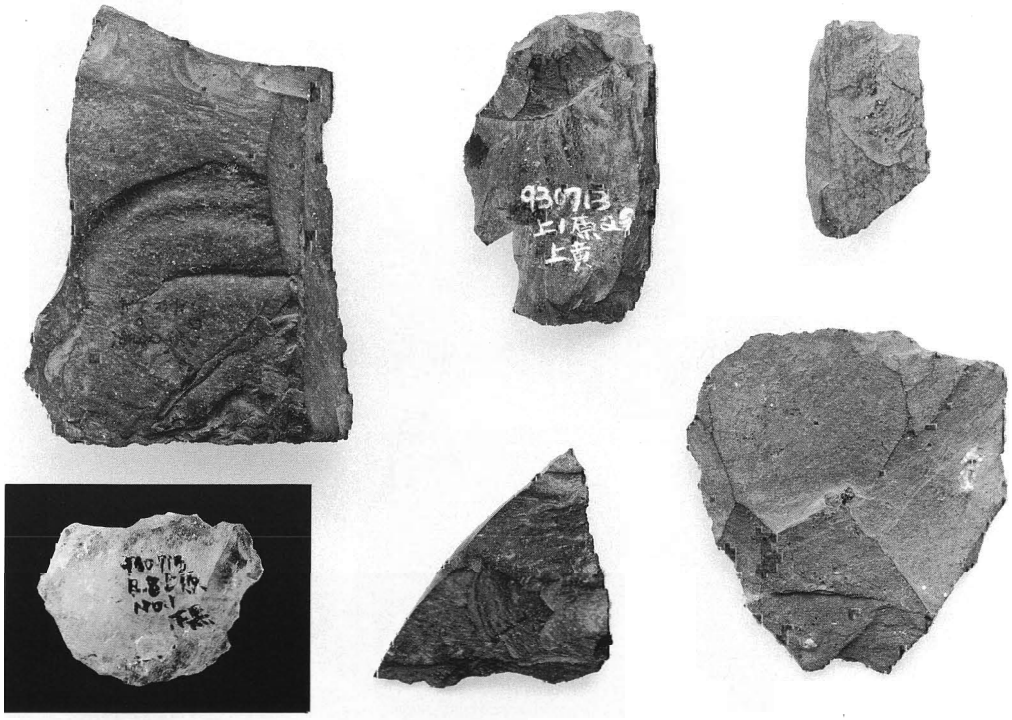
4．石の目による階段剥離（Ｒ８区）

1．石鏃・削器・石錐・掻器（表面；1/1）

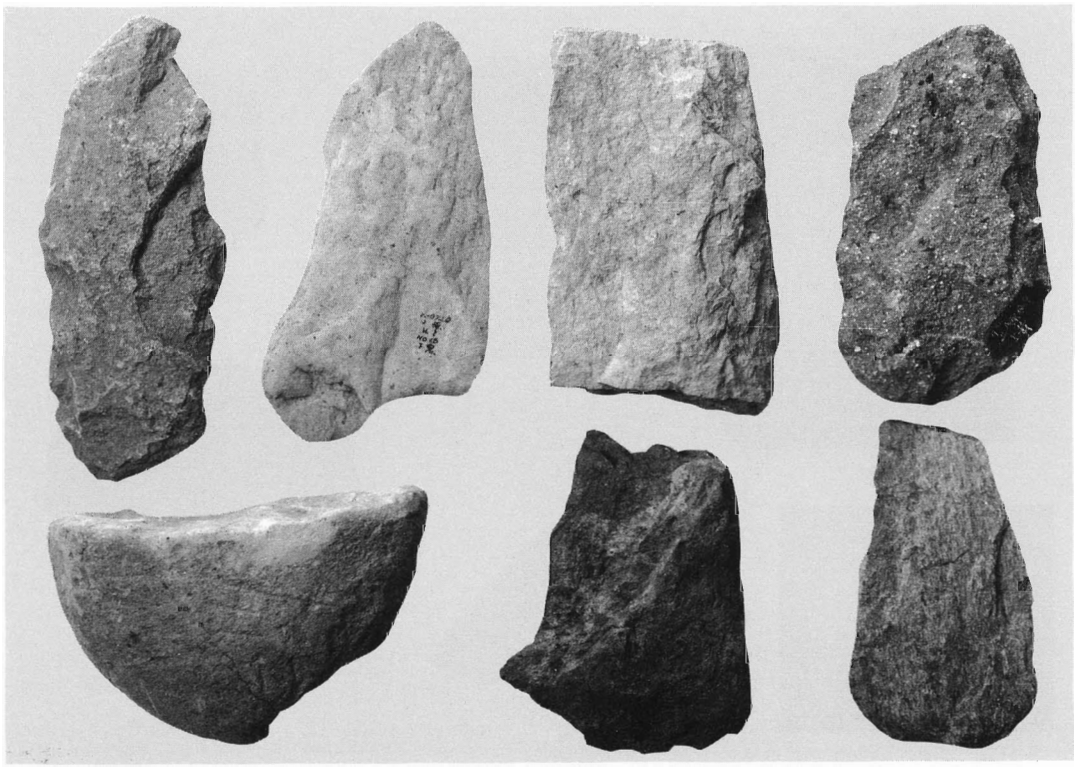
2．石鏃・削器・石錐・掻器（裏面；1/1）



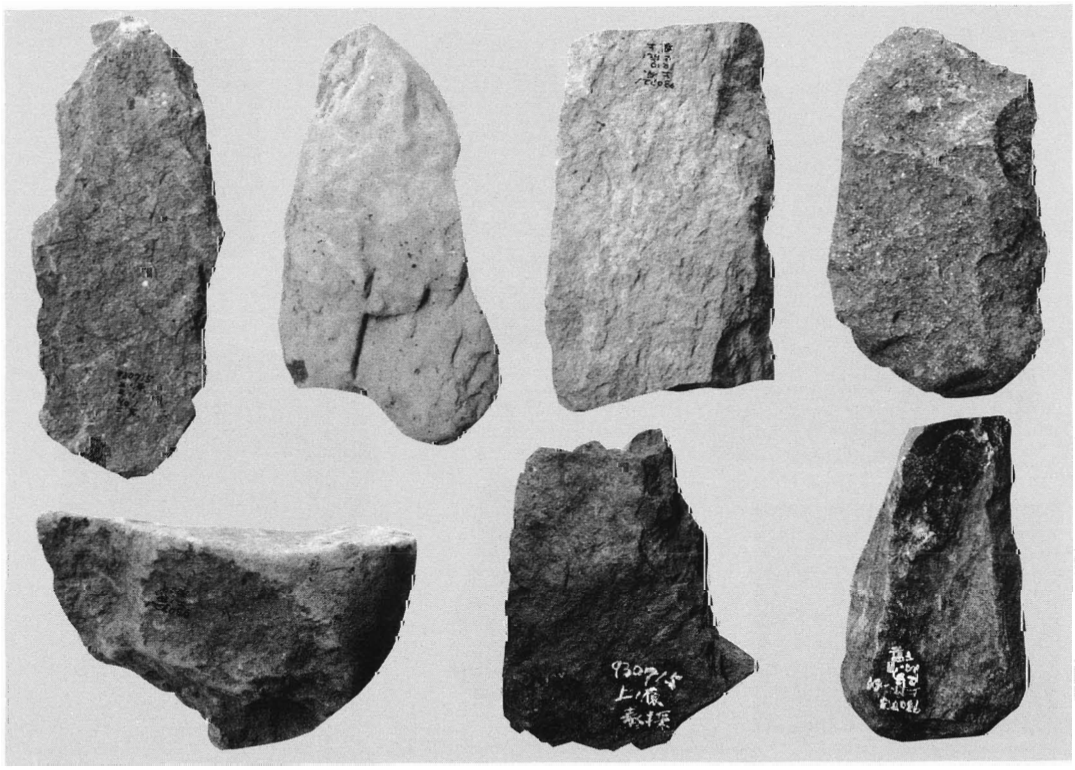
1．楔形石器・円形掻器・削器（表面；1/1）



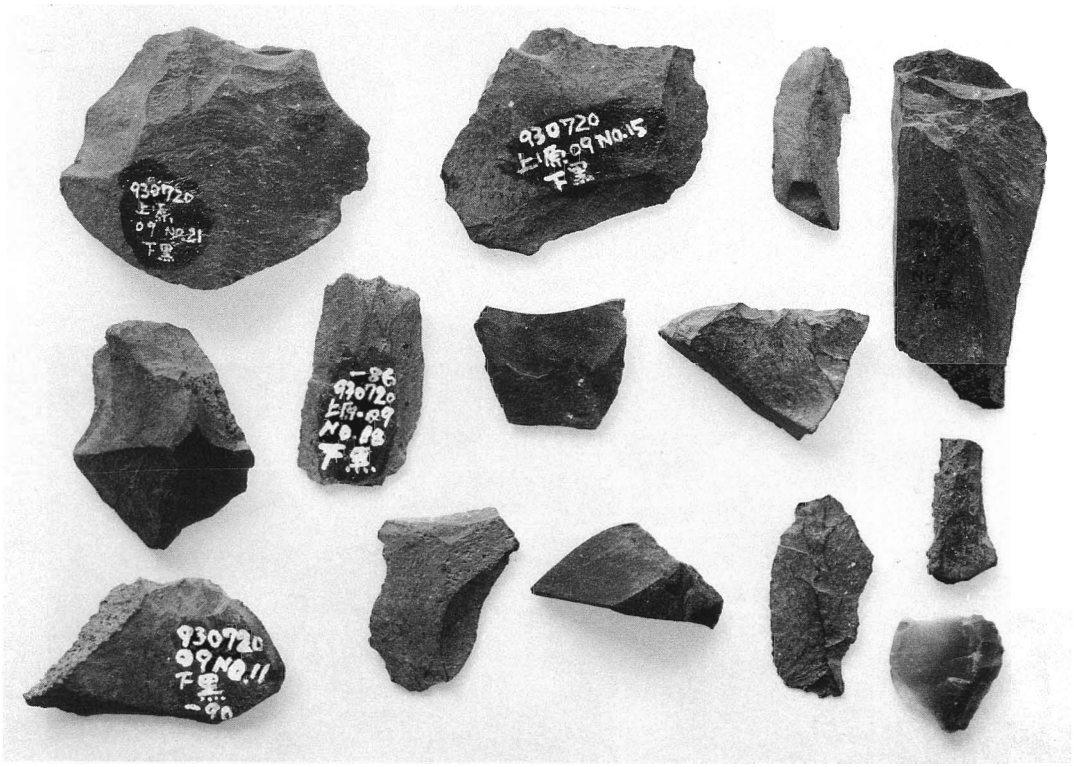
2．楔形石器・円形掻器・削器（裏面；1/1）



1．打製石斧ほか（表面；1/2）

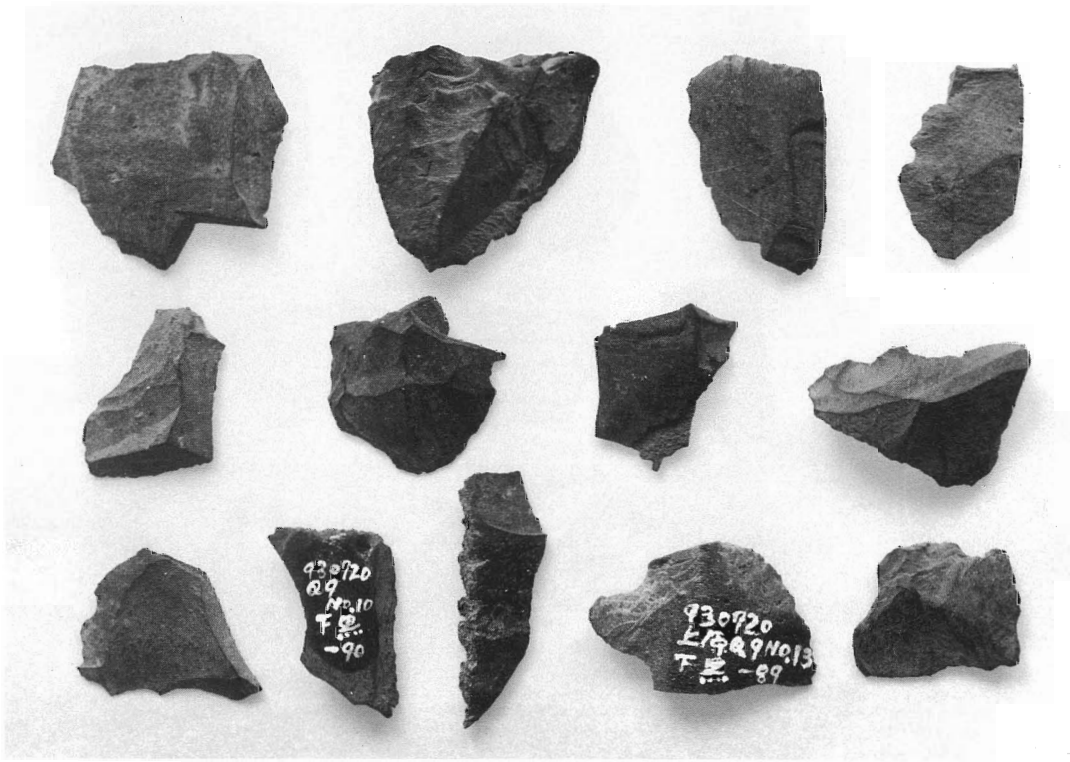


2．打製石斧ほか（裏面；1/2）



1．第２黒色土Ｏ９区から出土した剥片（1/1）

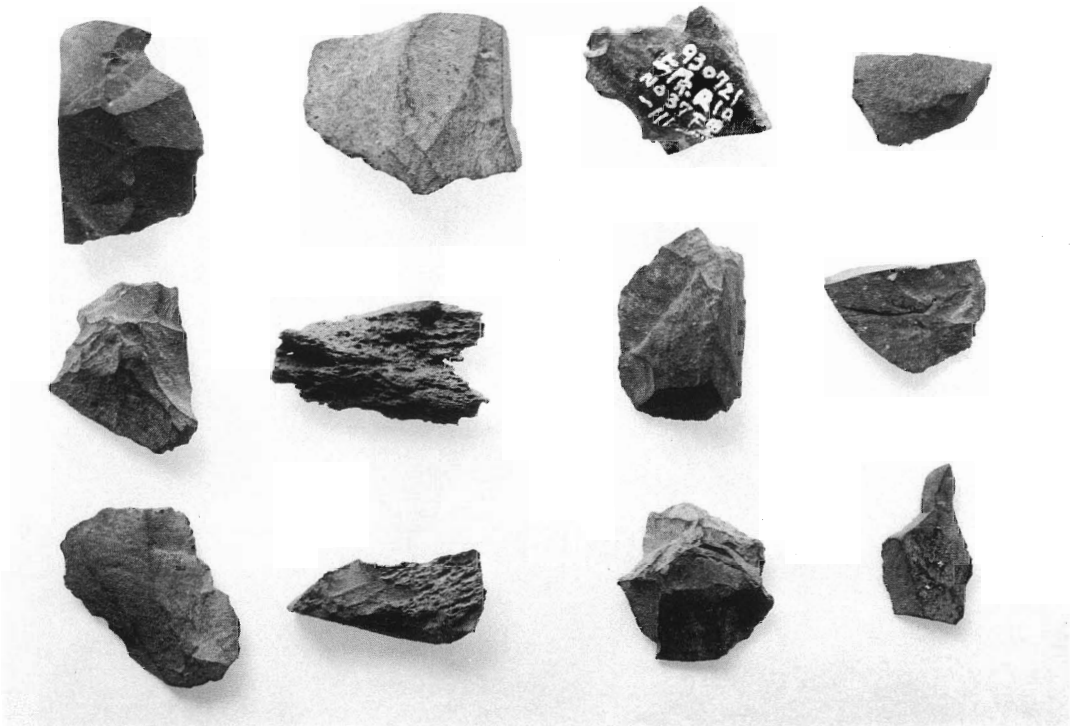
2．第２黒色土Ｐ９区から出土した剥片（1/1）



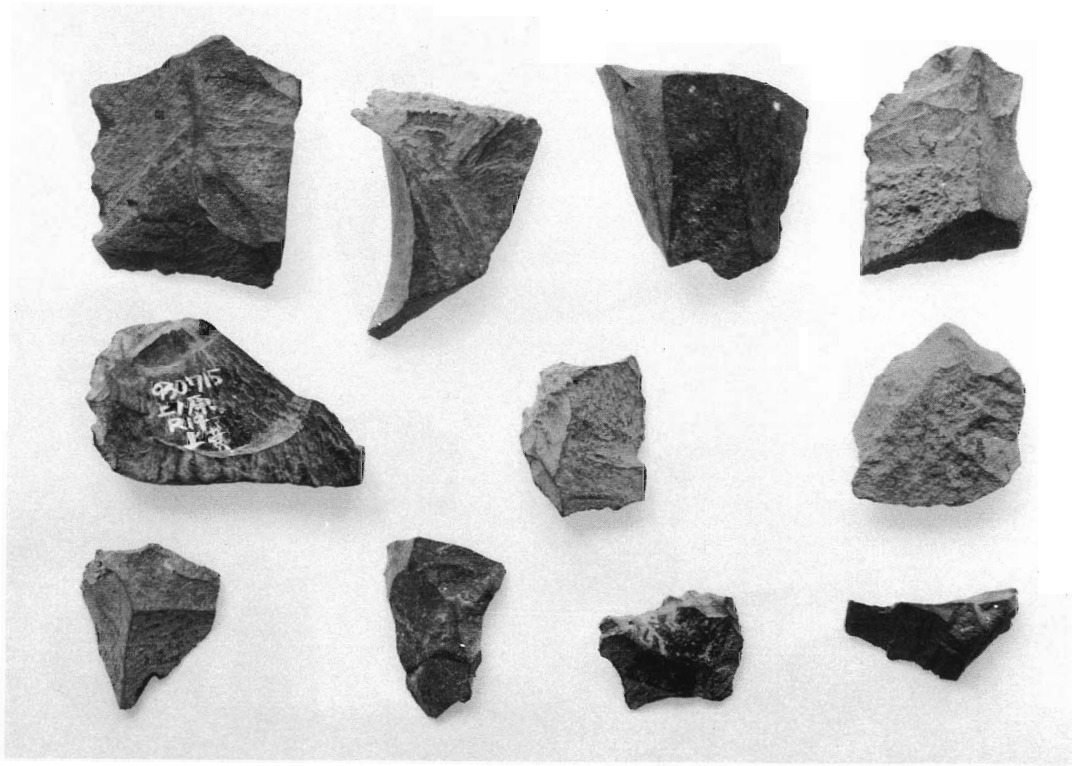
1．第２黒色土Ｑ９区から出土した剥片（1/1）

2．第２黒色土Ｒ８区から出土した剥片（1/1）

1．第２黒色土Ｒ９区から出土した剥片（1/1）



2．第２黒色土R10，11区から出土した剥片（1/1）



1．第１黒色土から出土した剥片（1/1）

2．第１黒色土から出土した剥片（1/1）

平成７年３月24日　印　刷
平成７年３月31日　発　行

島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査

発行　匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町
Tel;0856－56－1130
印刷　㈲　谷　口　印　刷
製本　島根県松江市母衣町89